

沖繩縣及東京府管内小笠原島、伊豆七島ニハ當分之法施行セシメ、市制町村制ヲ施行セサル地方ニ於テ本法中市町村ニ關スル條項ヲ適用スヘキ公共團體ハ勅令ヲ以テ之ヲ指定ス

北海道水産物營業人組合ハ本法ニ於テ市町村ニ準ス

第三十四條 明治二十二年法律第九號國稅徵收法、同年法律第三十二號國稅滯納處分法及同二十三年法律第四號ハ此ノ法律施行ノ日ヨリ廢止ス

●國稅徵收法施行規則 (三十年勅令第二百二十一號)

第一條 收稅官吏國稅ヲ徵收セムトスルトキハ納稅人ニ對シ其ノ納金額納期日及納付場所ヲ記載シタル納稅告知書ヲ發スヘシ

第二條 各市町村ニ於テ徵收スヘキ國稅ハ收稅官吏其ノ金額ヲ調査シ之ヲ市町村ニ通知スヘシ、市町村ハ前項ノ通知ニ依リ納稅人ニ對シ其ノ納金額納期日及納付場所ヲ記載シタル納稅告知書ヲ發スヘシ

第三條 納稅人納稅告知書ヲ受ケタルトキハ稅金ニ納稅告知書ヲ添ヘ之ヲ指定ノ場所ニ納付スヘシ

第四條 市町村ニ於テ稅金ヲ領收シタルトキハ領收證書ヲ納稅人ニ交付スヘシ

第五條 市町村ノ領收シタル稅金ハ送付書ヲ添ヘ之ヲ金庫ニ送付スヘシ

第六條 市町村ニ於テ徵收シタル稅金ハ遲滯ナク漸次之ヲ金庫ニ送付シ遲クトモ納期後三日ヲ過クルコトナカルヘシ

第七條 市町村ニ於テ國稅徵收法第八條ニ依リ稅金送付ノ責任ノ免除ヲ請ハムトスルトキハ地方長官

ヲ經由シテ大藏大臣ニ申出ヘシ

前項ノ申出アリタルトキハ地方長官事實ヲ調査シ意見ヲ具シテ大藏大臣ニ送付スヘシ

第八條 市町村ハ納期內ニ稅金ノ徵收ヲ了ラサルモノアルトキハ納期後五日以内ニ其ノ滯納者ノ住所、氏名及滯納ノ金額等ヲ收稅官吏ニ報告スヘシ

第九條 納稅人國稅其ノ他ノ公課ノ滯納ニ因リ滯納處分ヲ受ケ又ハ他ノ債務ノ爲メ強制執行若ハ破産ノ宣告ヲ受ケ又ハ納稅人タル會社カ解散ヲ爲シタル場合ニ於テハ未タ納期ノ到ラサルモ左ニ掲クルモノハ國稅徵收法第四條第一項ニ依リ之ヲ徵收スヘシ但シ納期ニ到リ納稅ニ妨ナシト認ムルモノハ此ノ限ニアラス

一 納稅告知書ヲ發シタル諸稅

二 造石數査定濟ノ酒類混成酒、煎醬油ノ造石稅

三 當該年分ノ自家川酒製造稅

第十條 國稅ノ滯納ニ因リ其ノ滯納處分ヲ執行スルニ際シ國稅徵收法第四條第一項ニ依リ國稅ヲ徵收セムトスル場合ニハ收稅官吏ハ滯納處分費滯納稅金ト共ニ之ヲ徵收スヘシ

前項ノ場合ニ於テ未タ納稅告知書ヲ發セサルモノハ其ノ納金額ヲ滯納者ニ告知スヘシ

第十一條 納稅人他ノ公課ノ爲メ滯納處分ヲ受ケ又ハ他ノ債務ノ爲メ強制執行若ハ破産ノ宣告ヲ受ケ又ハ納稅人タル會社カ解散ヲ爲シタル場合ニ於テ國稅徵收法第四條第一項ニ依リ國稅ヲ徵收セムトスルトキハ收稅官吏ハ第三十八條第三十九條第四十條ニ準シテ其ノ稅金ノ交付ヲ求ムヘシ、前項ノ場合ニ於テ未タ納稅告知書ヲ發セサルモノハ其ノ納金額ヲ納稅人ニ告知スヘシ

第十一編 國稅徵收法施行規則

第十二條 國稅徵收法第九條ニ依リ納稅ノ督促ヲ爲サムトスルトキハ收稅官吏ハ滯納者ニ對シ督促狀ヲ發スヘシ

督促狀ヲ發シタルトキハ手数料トシテ一通毎ニ金五錢ヲ徵收ス

第十三條 收稅官吏滯納者ノ財産差押ヲ爲ストキハ滯納處分費及税金ニ充ツル金額ヲ限度トシ徵收ニ

便利ナリト認ムル財産差押フヘシ

第十四條 質權又ハ抵當權ノ設定セラレタル財産ヲ差押フルトキハ收稅官吏ハ滯納處分費及税金額等

ヲ示シ之ヲ其ノ債權者ニ通知スヘシ

第十五條 國稅徵收法第三條ニ依リ國稅ノ徵收ニ對シ先取權ヲ有スル債權者前條ノ通知ヲ受ケ其ノ權

利ヲ行使セムトスルトキハ證憑書類ヲ添付シテ其ノ事實ヲ證明スヘシ

前項ノ場合ニ於テ提出スヘキ公正證書ハ官吏又ハ公吏其ノ職權ヲ以テ調製シタルモノトス

第十六條 債權ヲ差押ヘタルトキハ收稅官吏之ヲ債務者ニ通知シ滯納處分費及税金ニ相當スル金額ヲ

債務辨濟ノ時期ニ納付スルコトヲ求ムヘシ

第十七條 天然及法定ノ果實ヲ生スヘキ財産ヲ差押ヘタルトキ第三者ヨリ果實ノ引渡又ハ仕拂ヲ受ケ

ヘキ場合ニハ收稅官吏ハ其ノ旨ヲ第三者ニ通知スヘシ

第十八條 民事訴訟法ニ依レル假差押ヲ受ケタル財産ヲ差押フルトキハ之ヲ執行裁判所又ハ執達吏若

ハ強制管理人ニ通知スヘシ

第十九條 差押フヘキ財産管轄區域外ニ在ルトキハ收稅官吏ハ其ノ財産所在地ノ收稅官吏ニ滯納處分

ノ引繼ヲ爲スヘシ

第二十條 差押フヘキ財産數人ノ共有ニ係ルトキハ滯納者ニ屬スル持分ニ就キ滯納處分ヲ爲シ其ノ持

分ノ定メナキモノハ持分相均シキモノトシテ處分スヘシ

第二十一條 國稅徵收法第二十九條ニ依リ無限責任社員ニ就キ滯納處分ヲ爲ストキハ收稅官吏ハ無限

責任社員ノ一人ニ對シ又ハ同時若ハ順次ニ總員ニ對シ之ヲ執行スヘシ

第二十二條 數人共同ノ所有物件又ハ事業ニ係ル税金ノ滯納ヲ爲シタル場合ニ於テハ各自ノ負擔ニ屬

スル金額ニ就キ滯納處分ヲ爲スヘシ但シ數人連帶シテ納稅義務ヲ負擔スル場合ニハ前條ノ例ニ依ル

第二十三條 收稅官吏財産ヲ差押ヘタル場合ニ於テ滯納者又ハ第三者ヨリ滯納處分費及税金ヲ完納シ

タルトキハ其ノ財産ノ差押ヲ解クヘシ

第二十四條 收稅官吏財産ヲ差押ヘタルトキハ調書ニ通テ調製シ立會人ト共ニ之ニ署名捺印シ其ノ一

通ハ立會人ニ交付スヘシ但シ立會人ニ於テ署名捺印ヲ拒ミ又ハ署名捺印スルコト能ハサルトキハ其

ノ理由ヲ附記スヘシ

前項差押調書ニハ左ノ諸件ヲ記載スヘシ

一 滯納者ノ住所氏名

二 差押財産ノ名稱、數量、性質、重要ナル事情並所在ヲ明ニスル事項

三 差押ノ事由

四 調書ヲ作りタル場所年月日

第二十五條 不動産及船舶ヲ差押ヘタルトキハ收稅官吏之ヲ所轄登記所ニ照會シテ差押ノ登記ヲ受ケ

ヘシ

第十一編 國稅徵收法施行規則

第十一編 國稅徵收法施行規則

第二十六條 差押ヘタル財産ヲ公賣セムトスルトキハ三日以上差押財産所在地ノ市役所區役所町村役場若ハ戶長役場ノ揭示場ニ公告スヘシ

前項公告ノ外仍必要ト認ムルトキハ便宜他ノ場所若ハ新聞紙ニ公告スヘシ

第二十七條 財産公賣ノ公告ニハ左ノ諸件ヲ記載スヘシ

- 一 滞納者ノ住所氏名
- 二 公賣財産ノ名稱、數量、性質、重要ナル事情並所在ヲ明ニスル事項
- 三 入札又ハ競賣ノ場所、日時
- 四 開札ノ場所、日時
- 五 保證金ヲ徵スルトキハ其ノ金額
- 六 代金納付ノ期限

第二十八條 國稅徵收法第二十五條ニ依リ隨意契約ヲ以テ差押財産ヲ賣却セムトスルトキハ見積價格ヲ示シテ豫メ其ノ旨ヲ滞納者ニ通知スヘシ

第二十九條 公賣ハ入札又ハ競賣ノ方法ヲ以テ之ヲ爲スヘシ

第三十條 差押財産ヲ公賣スル場合ニ於テ必要ト認ムルトキハ加入保證金又ハ契約保證金ヲ徵スヘシ

落札者又ハ買受人義務ヲ履行セザルトキハ其ノ保證金ハ之ヲ滞納處分費ニ充テ仍殘餘アレハ政府ノ所得トス

第三十一條 公賣ハ差押財産所在ノ市區町村內ニ於テ之ヲ爲スヘシ但シ收稅官吏必要ト認ムルトキハ

他ノ地方ニ於テ之ヲ爲スコトヲ得

前項ノ規定ハ第二十八條ノ賣却ニ關シテモ之ヲ適用ス

第三十二條 公賣ハ公告ノ翌日ヨリ少クトモ十日ノ期間ヲ過キ之ヲ執行スヘシ但シ其ノ物件不相應ノ保存費ヲ要スルモノ若ハ著シク其ノ價格ヲ減損スルノ恐レアルモノナルトキハ此ノ限ニ在ラス

第三十三條 差押財産ヲ公賣セムトスルトキハ收稅官吏ニ於テ其ノ財産ノ價格ヲ見積リ之ヲ封書トシ公賣ノ場所ニ置クヘシ

第三十四條 入札ノ方法ヲ以テ公賣ニ付スル場合ニ於テ落札トナルヘキ同價ノ入札ヲ爲シタル者二名以上アルトキハ其ノ同價ノ入札人ヲシテ追加入札ヲ爲サシメ落札者ヲ定ム追加入札ノ價額仍同シキトキハ抽籤ヲ以テ之ヲ定ム

第三十五條 差押財産ヲ公賣ニ付スルモ買受者人ナキトキ又ハ見積價格以上ノ入札人ナキトキハ更ニ公告シテ公賣ヲ爲スコトアルヘシ

第三十六條 公賣財産ノ買受人代金納付ノ期限マテニ其ノ代金ヲ完納セザルトキハ其ノ賣買ハ無效トシ收稅官吏公告シテ更ニ之ヲ公賣ニ付スヘシ

第三十七條 前二條ニ依リ再度ノ公賣ヲ爲ス場合ニ於テハ第三十二條ノ期間ヲ短縮スルコトヲ得

第三十八條 國稅ノ滞納者他ノ公課ノ爲メ滞納處分ヲ受ケ其ノ財産ヲ差押ヘラレタル場合ニ於テ滞納處分ヲ執行スルトキ他ニ差押フヘキ財産ナキカ又ハ差押フヘキ財産アルモ滞納處分費及税金ニ充ツルニ足ラスト認ムルトキハ收稅官吏ハ他ノ公賣ニ係ル滞納處分ヲ執行スル官廳又ハ公共團體ニ滞納處分費及税金ノ全部又ハ一部ノ交付ヲ求ムヘシ

第十一編 國稅徵收法施行規則

第十一編 國稅徵收法施行規則

第三十九條 國稅ノ滯納者他ノ債務ノ爲メ強制執行ヲ受ケ其ノ財産ヲ差押ヘラレタル場合ニ於テ滯納處分ヲ執行スルトキ他ニ差押フヘキ財産ナキカ又ハ差押フヘキ財産アルモ滯納處分費及税金ニ充ツルニ足ラスト認ムルトキハ收稅官吏ハ執行裁判所又ハ執達吏若ハ強制管理人ニ滯納處分費及税金ノ全部又ハ一部ノ交付ヲ求ムヘシ

第四十條 滯納者破産ノ宣告ヲ受ケ又ハ滯納者タル會社カ解散ヲ爲シタル場合ニ於テ滯納處分ヲ執行スルトキハ收稅官吏ハ破産主任官又ハ清算人ニ滯納處分費及税金ノ交付ヲ求ムヘシ

第四十一條 滯納處分ヲ結了シタルトキハ收稅官吏ハ其ノ處分ニ關スル計算書ヲ作り之ヲ滯納者ニ交付スヘシ

賣却シタル財産ニ對シ質權又ハ抵當權ヲ有スル者ハ其ノ計算ニ關スル記録ノ閱覽ヲ收稅官吏ニ求ムルコトヲ得

第四十二條 國稅徵收法第二十八條第二項ニ依リ債權者ニ交付スヘキ金額ハ計算書ヲ滯納者ニ交付シタル日ヨリ五日ヲ經テ之ヲ交付スヘシ

第四十三條 滯納處分ニ關スル書類ノ送達ハ使丁又ハ書留郵便ヲ以テスヘシ

第四十四條 國稅徵收法第三十條第二項ノ公告ハ名宛人ノ住所又ハ事務所所在地ノ市役所區役所町村役場若ハ戸長役場ノ揭示場ニ三日以上揭示シ仍必要アリト認ムルトキハ新聞紙ニ公告スヘシ

附則 第四十五條 市制町村制ヲ施行セサル地方稅務署所在ノ戸長ハ稅務署收稅官吏ノ通知ヲ受ケ其ノ町村内ノ國稅ヲ酒類造石徵收シ之ヲ金庫ニ拂込ムヘシ

第四十六條 北海道水産稅ハ水産物營業人組合ニ於テ徵收シ之ヲ金庫ニ送付スヘシ
第四十七條 前二條ニ依リ徵收スヘキ國稅ヲ其ノ納期內ニ完納セサル者アルトキハ戸長若ハ水産營業人組合ハ本則中ニ規定セル市町村ノ例ニ準シ之ヲ稅務署收稅官吏ニ報告スヘシ

●市町村ニ於テ徵收スヘキ國稅 (勅令第九十五號)
左ノ諸稅ハ市町村ニ於テ徵收スヘシ
一 第三種ノ所得ニ係ル所得稅 (三十二年勅令第二百十九號ヲ以テ改正)

- 二 營業稅
- 三 自家川酒稅
- 四 寶樂營業稅

附則

本令ハ明治三十年七月一日ヨリ施行ス

第十二編 會計及官(國)有財産

●會計法 (二十二年法律第四號)

第一章 總則

第一條 政府ノ會計年度ハ毎年四月一日ニ始マリ翌年三月三十一日ニ終ル

一 會計年度所屬ノ歳入歳出ノ出納ニ關ル事務ハ翌年度十一月三十日マテニ悉皆完結スヘシ

第二條 租税及其他一切ノ收納ヲ歳入トシ一切ノ経費ヲ歳出トシ歳入歳出ハ總豫算ニ編入スヘシ

第三條 各年度ニ於テ決定シタル経費ノ定額ヲ以テ他ノ年度ニ屬スヘキ経費ニ充ツルコトヲ得ス

第四條 各官廳ニ於テハ法律勅令ヲ以テ規定シタルモノ、外特別ノ資金ヲ有スルコトヲ得ス

第二章 豫算

第五條 歳入歳出ノ總豫算ハ前年ノ帝國議會集會ノ始ニ於テ之ヲ提出スヘシ

第六條 歳入歳出ノ總豫算ハ之ヲ經常臨時ノ二部ニ大別シ各部中ニ於テ之ヲ款項ニ區分スヘシ

總豫算ニハ帝國議會參考ノ爲ニ左ノ文書ヲ添附スヘシ

第一 各省ノ豫定経費要求書但シ各項中各自ノ明細ヲ記入スヘシ

第二 其ノ年三月三十一日ニ終リタル會計年度ノ歳入歳出現計書

第七條 豫算中ニ設クヘキ豫備費ハ左ノ二項ニ分ツ

第一 豫備金

第二 豫備金

第十二編 會計法

第十二編 會計法

第一 豫備金ハ避クヘカラサル豫算ノ不足ヲ補フモノトス

第二 豫備金ハ豫算外ニ生シタル必要ノ費用ニ充ツルモノトス

第八條 豫備金ヲ以テ支辨シタルモノハ年度經過後帝國議會ニ提出シ其ノ承諾ヲ求ムルヲ要ス

第九條 毎年度大藏省證券發行ノ最高額ハ帝國議會ノ協賛ヲ經テ之ヲ定ム

第三章 收入

第十條 租税及其ノ他ノ歳入ハ法律命令ノ規程ニ從ヒ之ヲ徵收スヘシ

法律命令ニ依リ當該官吏ノ資格アル者ニ非サレハ租税ヲ徵收シ又ハ其ノ他ノ歳入ヲ收納スルコトヲ得ス

得ス

第四章 支出

第十一條 毎會計年度ニ於テ政府ノ經費ニ充ツル所ノ定額ハ其ノ年度ノ歳入ヲ以テ之ヲ支辨スヘシ

第十二條 國務大臣ハ豫算ニ定メタル目的ノ外ニ定額ヲ使用シ又ハ各項ノ金額ヲ彼此流用スルコトヲ得ス

得ス

國務大臣ハ其ノ所管ニ屬スル收入ヲ國庫ニ納ムヘシ直ニ之ヲ使用スルコトヲ得ス

第十三條 國務大臣ハ其ノ所管定額ヲ使用スル爲ニ國庫ニ問ヒテ任拂命令ヲ發スヘシ但シ別ニ定ムル所ノ規程ニ從ヒ他ノ官吏ニ委任シテ任拂命令ヲ發セシムルコトヲ得

第十四條 國庫ハ法律命令ニ反スル任拂命令ニ對シテ任拂ヲ爲スコトヲ得ス

第十五條 國務大臣ハ政府ニ對シ正當ナル債主若ハ其ノ代理人ノ爲ニスルニ非サレハ任拂命令ヲ發ス

ルコトヲ得ス

左ノ諸項ノ經費ニ限リ國務大臣ハ主任ノ官吏ニ委任シ又ハ政府ノ命シタル銀行ニ委任シテ現金支拂ヲ爲サシムル爲ニ現金前渡ノ任拂命令ヲ發スルコトヲ得

第一 國債ノ元利拂

第二 軍隊軍艦及官船ニ屬スル經費

第三 在外各廳ノ經費

第四 前項ノ外總テ外國ニ於テ支拂ヲ爲ス經費

第五 運輸通信ノ不便ナル内國ノ地方ニ於テ支拂ヲ爲ス經費

第六 廳中常用雜費ニシテ一箇年ノ總費額五百圓ニ滿タサルモノ

第七 場所ノ一定サセル事務所ノ經費

第八 各廳ニ於テ直接ニ從事スル工事ノ經費但シ主任官ニ付三千圓マテテ限ル

第五章 決算

第十六條 會計検査院ノ検査ヲ經テ政府ヨリ帝國議會ニ提出スル總決算ハ總豫算ト同一ノ様式ヲ用非

左ノ事項ノ計算ヲ明記スヘシ

歳入ノ部

歳入豫算額、調定濟歳入額、收入濟歳入額、收入未濟歳入額、

歳出ノ部

歳出豫算額、豫算決定後増加歳出額、任拂命令濟歳出額、翌年度繰越額、

第十七條 前條ノ總決算ニハ會計検査院ノ検査報告ト俱ニ左ノ文書ヲ添附スヘシ

第十二編 會計法

第十二編 會計法

第一 各省決算報告書

第二 國債計算書

第三 特別會計計算書

第六章 期滿免除

第十八條 政府ノ負債ニシテ其ノ仕拂フヘキ年度經過後滿五箇年内ニ債主ヨリ支出ノ請求若ハ仕拂ノ請求ヲ爲サ、ルモノハ期滿免除トシテ政府ハ其ノ義務ヲ免ル、モノトス但シ特別ノ法律ヲ以テ期滿免除ノ期限ヲ定メタルモノハ各々其ノ定ムル所ニ依ル

第十九條 政府ニ納ムヘキ金額ニシテ其ノ納ムヘキ年度經過後滿五箇年内ニ上納ノ告知ヲ受ケサルモノハ其ノ義務ヲ免ル、モノトス但シ特別ノ法律ヲ以テ期滿免除ノ期限ヲ定メタルモノハ各々其ノ定ムル所ニ依ル

第七章 歲計剩餘定額繰越豫算外收入及定額戻入

第二十條 各年度ニ於テ歲計ニ剩餘アルトキハ其ノ翌年度ノ歳入ニ繰入ルヘシ

第二十一條 豫算ニ於テ特ニ明許シタルモノ及一年度内ニ終ルヘキ工事又ハ製造ニシテ避クヘカラサル事故ノ爲ニ事業ヲ遅延シ年度内ニ其ノ經費ノ支出ヲ終ラサリシモノハ之ヲ翌年度ニ繰越シ使用スルコトヲ得

第二十二條 數年ヲ期シテ竣功スヘキ工事製造及其ノ他ノ事業ニシテ繼續費トシテ總額ヲ定メタルモノハ毎年度ノ仕拂殘額ヲ竣功年度マテ遞次繰越使用スルコトヲ得

第二十三條 誤拂過度トナリタル金額ノ返納出納ノ完結シタル年度ニ屬スル收入及其ノ他一切豫算外

ノ收入ハ總テ現年度ノ歳入ニ組入ルヘシ但シ法律勅令ニ依リ前金渡概算渡繰替拂ヲ爲シタル場合ニ於ケル返納金ハ各々之ヲ仕拂ヒタル經費ノ定額ニ戻入ル、コトヲ得

第八章 政府ノ工事及物件ノ賣買貸借

第二十四條 法律勅令ヲ以テ定メタル場合ノ外政府ノ工事又ハ物件ノ賣買貸借ハ總テ公告シテ競争ニ付スヘシ但シ左ノ場合ニ於テハ競争ニ付セス隨意ノ約定ニ依ルコトヲ得ヘシ

第一 一人又ハ一會社ニテ專有スル物品ヲ買入レ又ハ借入ル、トキ

第二 政府ノ所爲ヲ秘密ニスヘキ場合ニ於テ命スル工事又ハ物品ノ賣買貸借ヲ爲ストキ

第三 非常急遽ノ際工事又ハ物品買入借入ヲ爲スニ競争ニ付スル暇ナキトキ

第四 特種ノ物質又ハ特別使用ノ目的アルニ由リ生産製造ノ場所又ハ生産者製造者ヨリ直接ニ物品ノ買入ヲ要スルトキ

第五 特別ノ技術家ニ命スルニ非サレハ製造シ得ヘカラサル製造品及機械ヲ買入ル、トキ

第六 土地家屋ノ買入又ハ借入ヲ爲スニ當リ其ノ位置又ハ構造等ニ限アル場合

第七 五百圓ヲ超エサル工事又ハ物品ノ買入借入ノ契約ヲ爲ストキ

第八 見積價格二百圓ヲ超エサル動産ヲ賣拂フトキ

第九 軍艦ヲ買入ル、トキ

第十 軍馬ヲ買入ル、トキ

第十一 試験ノ爲ニ工作製造ヲ命シ又ハ物品ヲ買入ル、トキ

第十二 慈善ノ爲ニ設立セル教育所ノ貧民ヲ傭役シ及其ノ生産又ハ製造物品ヲ直接ニ買入ル、トキ

第十二編 會計法

第十三 囚徒ヲ備役シ又ハ囚徒ノ製造物品ヲ直接ニ買入ル、トキ及政府ノ設立ニ係ル農工業場ヨリ直接ニ其ノ生産又ハ製造物品ヲ買入ル、トキ

第十四 政府ノ設立シタル農工業場又ハ慈善教育ニ係ル各所ノ生産製造物品及囚徒ノ製造物品ヲ賣拂フトキ

第二十五條 軍艦兵器彈藥ヲ除ク外工事製造又ハ物件買入ノ爲ニ前金拂ヲ爲スコトヲ得ス

第九章 出納官吏
第二十六條 政府ニ屬スル現金若ハ物品ノ出納ヲ掌ル所ノ官吏ハ其ノ現金若ハ物品ニ付一切ノ責任ヲ負ヒ會計検査院ノ検査判決ヲ受クヘシ

第二十七條 前條ノ官吏水火盜難又ハ其ノ他ノ事故ニ由リ其ノ保管スル所ノ現金若ハ物品ヲ紛失毀損シタル場合ニ於テハ其ノ保管上避ケ得ヘカラサリシ事實ヲ會計検査院ニ證明シ責任解除ノ判決ヲ受クルニ非サレハ其ノ負擔ノ責ヲ免ル、コトヲ得ス

第二十八條 現金又ハ物品ノ出納ヲ掌ルニ付身元保證金ヲ納メシムルコトヲ要スルモノハ勅令ヲ以テ之ヲ定ムヘシ

第二十九條 仕拂命令ノ職務ハ現金出納ノ職務ト相兼メルコトヲ得ス

第十章 雜則
第三十條 特別ノ須要ニ因リ本法ニ準據シ難キモノアルトキハ特別會計ヲ設置スルコトヲ得 特別會計ヲ設置スルハ法律ヲ以テ之ヲ定ムヘシ

第三十一條 政府ハ國庫金ノ取扱ヲ日本銀行ニ命スルコトヲ得
第三十二條 本法ノ條項帝國議會ニ關涉セサルモノハ明治二十三年四月一日ヨリ施行シ其ノ關涉スルモノハ帝國議會開會ノ時ヨリ施行ス

決算ニ係ル條項ハ帝國議會ノ議定ヲ經タル年度ノ歲計ヨリ施行ス
第三十三條 本法ノ條項ト牴觸スル法令ハ各々其ノ條項施行ノ日ヨリ廢止ス

●會計規則 (二十二年勅令第六十號)
第一章 會計年度所屬區分、歳入歳出金出納

第一條 歳入ノ年度所屬ハ左ノ區分ニ據ル
第一 納期ノ一定シタル收入ハ其納期末日ノ屬スル年度

第二 隨時ノ收入ニシテ納額告知書ヲ發スルモノハ納額告知書ヲ發シタル日ノ屬スル年度
第三 隨時ノ收入ニシテ納額告知書ヲ發セサルモノハ領收ヲ爲シタル日ノ屬スル年度

第二條 歳出ノ所屬年度ハ左ノ區分ニ據ル
第一 公債ノ元利賞勳年金恩給諸給ノ類ハ仕拂期日ノ屬スル年度

第二 諸拂戻缺損補填ハ其拂戻又ハ補填ノ決定ヲ達シタル日ノ屬スル年度
第三 俸給手數料旅費ノ類ハ其支給スヘキ事實ノ生シタル時ノ屬スル年度

第四 廳中雜費土木建築費其他物件ノ購入代價ノ類ハ契約ヲ爲シタル日ノ屬スル年度但土木建築費ノ如キ契約ノ數年ニ涉ルコトヲ得ヘキモノハ契約ニ據リ定メタル仕拂期日ヲ以テ區分スヘシ

第十二編 會計規則

第五 前各項ニ掲クル類別ニ入ラサル費用ハ總テ仕拂命令ヲ發シタル日ヲ以テ年度ノ所屬ヲ定ムヘシ

第三條 毎年度所屬歳入歳出金ヲ金庫ニ於テ出納スルハ翌年度七月三十一日限リトス (二十六年勅令第百十二號ヲ以テ八月三十一日ヲ改ム)

第二章 豫算

第一款 總豫算

第四條 大藏大臣ハ歳入ノ景況ヲ調査シ各省ノ豫定經費要求書ニ基キ歳入歳出總豫算ヲ調製スヘシ

總豫算ノ首ニハ歳計全體ニ關スル説明ヲ付スヘシ

第五條 歳入豫算ハ經常臨時共ニ款項ニ区分シテ調製シ成ルヘク歳入ノ性質ヲ明示スヘシ

第六條 歳出豫算ハ經常臨時共ニ款項ニ区分シテ調製シ成ルヘク經費ノ目的ヲ明ニスヘシ

第七條 歳入歳出總豫算款項ノ区分ハ大藏大臣之ヲ定ムヘシ

第二款 豫定經費要求書

第八條 各省大臣ハ毎年度其所管經費ノ需用高ヲ算定シ前年度ノ定額ト比較チ立テ豫定經費要求書ヲ調製シ前年度八月三十一日マテニ之ヲ大藏大臣ニ送付スヘシ (二十六年勅令第百十二號ヲ以テ六月三十日ヲ八月三十一日ト改ム)

第九條 各省ノ豫定經費要求書ハ經常臨時共ニ款項ニ区分シ更ニ各項中所需ノ金額ヲ各自ニ区分シ尙ホ必要ノ場合ニ於テハ番號ヲ以テ之ヲ細分シ又經費所要ノ理由計算ノ基ク所ヲ示スヘシ

目ノ区分ハ各省大臣大藏大臣ト協議シテ之ヲ定ムヘシ

第十條 各省ノ豫定經費要求書ニハ各省所管經費ニ關スル説明及各款各項ノ説明ヲ付スヘシ

第三款 仕拂豫算

第十一條 各省大臣ハ毎年度決定ノ豫算定額ニ基キ仕拂命令官毎ニ所要ノ費額ヲ定メ仕拂豫算ヲ調製シ大藏大臣及會計検査院ニ送付スヘシ (二十六年勅令第百十二號ヲ以テ大藏大臣ノ檢視ヲ受ク)

仕拂豫算ハ各項ノ金額ヲ示スヘシ

第十二條 仕拂豫算ヲ更定シタルトキハ其計算書ヲ大藏大臣及會計検査院ニ送付スヘシ (二十六年勅令第百十二號ヲ以テ)

本條改正

第十三條 大藏大臣仕拂豫算若クハ其ノ更定計算書ヲ送付ヲ受ケタルトキハ之ヲ金庫ニ令送スヘシ (二十六年勅令第百十二號ヲ以テ本條改正)

第四款 歳入歳出現計書

第十四條 會計法第六條ニ掲クル歳入歳出現計書ハ大藏省ニ備ヘタル主計簿ニ據リ大藏大臣之ヲ調製スヘシ

第十五條 歳入歳出現計書ニハ總豫算ニ定メタル区分ニ從ヒ其年三月三十一日ヲ以テ終リタル年度ニ屬スル歳入歳出ノ七月三十一日ニ於ケル左ノ事項ノ現計ヲ示スヘシ (二十六年勅令第百十二號ヲ以テ八月三十一日ヲ七月三十一日ト改ム)

歳入ノ部

歳入豫算額、調定済歳入額、收入済歳入額、收入未済歳入額

歳出ノ部

歳出豫算額、豫算決定後増加歳出額、仕拂命令済歳出額、翌年度繰越額

第十二編 會計規則

第十二編 會計規則

第五款 豫備金支出

第十六條 豫備金ハ大蔵大臣之ヲ管理ス

第十七條 豫備金ヲ以テ補充シ得ヘキ費途及豫備金ヲ以テ支辨スル費途ノ金額ハ他ノ費途ニ流用スルコトヲ得ス

第十八條 第一豫備金ヲ以テ補充シ得ヘキ費途ハ毎年度豫メ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第十九條 各省大臣第一豫備金ノ支出ヲ要スルトキハ金額理由ヲ示ス所ノ計算書ヲ作り大蔵大臣ノ承認ヲ經ヘシ

第二十條 大蔵大臣第一豫備金ノ支出ヲ承認シタルトキハ之ヲ會計検査院ニ通知スヘシ

第二十一條 各省大臣第二豫備金ノ支出ヲ要スルトキハ金額理由ヲ示ス所ノ計算書ヲ作り之ヲ大蔵大臣ニ送付スヘシ

第二十二條 大蔵大臣ハ前條ノ計算書ヲ調製シ其意見ヲ付シテ勅裁ヲ請フヘシ

第二十三條 第二豫備金支出ノ勅裁アリタルトキハ大蔵大臣其事故金額ヲ會計検査院ニ通知シ及官報ニ掲載スヘシ

第二十四條 豫備金ヲ以テ補充支辨シタル金額ハ各省大臣其計算書ヲ作り各費途毎ニ説明ヲ付シ年度經過後五箇月以内ニ之ヲ大蔵大臣ニ送付スヘシ

大蔵大臣ハ豫備金支出ヲ第一豫備金支出ト第二豫備金支出トニ大別シ其總計算書ヲ作り之ニ説明ヲ付シ各省大臣ヨリ送付シタル豫備金支出ノ計算書ト共ニ帝國議會ニ提出スルノ手續ヲ爲スヘシ

第三章 收入

第二十五條 收入官吏現金ヲ以テ租税其他ノ收入ヲ領收スルトキハ其領收證ヲ納人ニ交付スヘシ

第二十六條 現金ヲ領收スル收入官吏ハ大蔵大臣定ムル所ノ規則ニ從ヒ毎月一回若クハ數回其領收シタル金額ヲ金庫ニ拂込ムヘシ但金庫ノ設ナキ運輸通信ノ不便ナル地方ニ在ル收入官吏ノ領收シタル金額ハ該官吏之ヲ保管シ大蔵大臣ノ指定ニ從ヒ金庫ニ拂込ノ手續ヲ爲スヘシ

第二十七條 金庫ハ收入官吏又ハ納人ヨリ租税其他ノ收入金ヲ領收スルトキハ其領收證ヲ拂込人又ハ納人ニ交付シ領收證ノ旨ヲ收入官吏ノ拂込ニ係ル分ニ付テハ歳入ノ徵收ヲ監督スル所ノ官吏ニ又納人ニ係ル分ニ付テハ收入官吏ニ通知スヘシ

第二十八條 (二十六年勅令第百二十二號ヲ以テ削除)

第二十九條 (二十六年勅令第百二十二號ヲ以テ削除)

第三十條 收入官吏ハ其收入ヲ記入スル帳簿ノ結果ニ據リ毎月收入報告書ヲ調製シ参照書類ヲ添ヘ各省大臣ノ定メタル期限ニ之ヲ其事務管理廳ニ送付スヘシ

第三十一條 歳入ノ事務管理廳ハ收入官吏ヨリ送付シタル收入報告書ニ據リ毎月收入總報告書ヲ作り之ニ必要ナル参照書類ヲ添ヘ其翌月中ニ大蔵大臣ニ送付スヘシ

第四款 支出

第一款 仕拂命令

第三十二條 仕拂命令官ハ總テ仕拂命令ヲ發スル前其經費ハ正當ニシテ必要ナルヤヲ調査シ該經費ノ金額ヲ算定シ又該經費ハ仕拂豫算額ニ超過スルコトナキヤ支出科目及所屬年度ヲ誤ルコトナキヤ該

第十二編 會計規則

第十二編 會計規則

經費ノ豫算ヲ以テ定メラレタル目的ニ違フコトナキヲ調査スヘシ

第三十三條 仕拂命令ニハ債主若クハ其代理人ノ氏名、仕拂フヘキ金額、支出科目、年度、番號ヲ記載スヘシ但支出科目ノ同一ナルモノハ數人ノ債主ニ對シ集合仕拂命令ヲ發シ別ニ各債主ノ金額氏名表ヲ添ユルコトヲ得(二十六年勅令第百十二號ヲ以テ番號ノ下「支出ノ目的」ノ五字及但ノ下「俸給諸」)給恩給賞勳年金諸條及定額拂切經費ノ仕拂ヲ爲ストキハ二十七年ヲ削ル

現金前渡ノ仕拂命令ニハ前渡ヲ受クヘキ官吏ノ資格、氏名、銀行ナレハ其名稱、前渡ヲ爲スヘキ金額、支出科目、年度及番號ヲ記載スヘシ

第三十四條 仕拂命令ハ一項毎ニ之ヲ發スヘシ

第三十五條 仕拂命令官第三十二條ノ調査ヲ了シタルトキハ其仕拂命令ヲ受取人ニ交付スヘシ但數人ノ債主ニ對スル集合仕拂命令及仕拂命令ヲ當テタル金庫所在地ノ外ニ於テ仕拂ヲ要スルモノハ直ニ仕拂命令ヲ金庫ニ送付シ受取人ニ仕拂ノ手續ヲ爲スヘシ(二十六年勅令第百十二號ヲ以テ改正)

第三十六條 仕拂命令官前條ニ據リ仕拂命令ヲ受取人ニ交代セントスルトキハ前以テ案内仕拂命令ヲ金庫ニ送付スヘシ(二十六年勅令第百十二號ヲ以テ改正)

第三十七條 (二十六年勅令第百十二號ヲ以テ削除)

第三十八條 (二十六年勅令第百十二號ヲ以テ削除)

第三十九條 現金前渡ノ仕拂命令ハ左ノ區分ニ從ヒ之ヲ發スヘシ

第一 常時ノ費用ニ係ルモノハ每一箇月分ノ費額ヲ豫定シテ仕拂命令ヲ發スヘシ但在外各處ノ經費外國ニ於テ仕拂ヲ爲ス經費運輸通信ノ不便ナル内國ノ地方ニ於テ仕拂ヲ爲ス經費其他仕拂場所ノ一定セサル經費ハ事務ノ必要ニ由リ二箇月以上六箇月分マテ合セテ仕拂命令ヲ發スルコトヲ得

第二 臨時ノ費用ニ係ルモノハ所要ノ費額ヲ豫定シテ事務上差支ナキ限りハ成ルヘク分割シテ仕拂命令ヲ發スヘシ

第三 各處ニ於テ直接ニ從事スル工事ノ經費ハ工事ノ大小ニ由リ其所要ヲ量リ三千圓以内ニ於テ仕拂命令ヲ發スヘシ

第四十條 會計法第十五條第八ニ據リ現金前渡ヲ爲シタルトキハ左ノ場合ヲ除クノ外更ニ同一ノ主任官吏ニ現金前渡ヲ爲スタメ仕拂命令ヲ發スルコトヲ得ス

第一 前ニ發シタル仕拂命令ノ金額三分ノ二以上ノ仕拂濟證明アリタルトキ但此場合ニ於テハ更ニ發スル仕拂命令ノ金額ト前ニ發シタル仕拂命令ノ仕拂濟證明未濟ノ金額ト合シテ三千圓ヲ超ルコトヲ得ス

第二 前ニ發シタル仕拂命令ノ金額三千圓未満ニシテ更ニ發スル仕拂命令ノ金額ト合シテ三千圓ヲ超サルトキ

第四十一條 現金前渡ヲ受ケタル官吏監督ノ規則ハ大藏大臣各省大臣ニ協議シテ之ヲ定ムヘシ

第四十二條 會計法第十五條ニ據リ政府ノ命シタル銀行ニ委任シテ現金仕拂ヲ爲サシムル爲メニ發スル現金前渡ノ仕拂命令ハ國債元利金仕拂ノ場合ニ限ル

第四十三條 仕拂命令ハ所屬年度經過後滿五箇年内ハ仕拂ノ請求アル毎ニ金庫ニ於テ仕拂フモノトス

第四十四條 各年度ニ屬スル經費ヲ精算シテ仕拂命令ヲ發スルハ翌年度六月三十日限リトス

第二款 仕拂命令ノ執行

第四十五條 金庫ハ案内仕拂命令集合仕拂命令若クハ金庫所在地外ニ於テ仕拂ヲ要スル仕拂命令ヲ受

ケタルトキ其命令式ニシテ且仕拂豫算各項ノ金額ニ超過セサルトキハ仕拂ヲ爲スヘシ
金庫ニ於テハ休日ヲ除クノ外毎日其開庫時間内ハ他時ニテモ仕拂命令持參人ニ仕拂命令ト引替ニテ
現金ヲ交付スヘシ(二十六年勅令第百一十二號ヲ以テ改正)

第四十六條 左ノ場合ニ於テハ事由ヲ仕拂命令持參人ニ告ケ金庫ニ於テ仕拂命令ノ執行ヲ拒ムヘシ

第一 案内仕拂命令ノ到着セサルトキ

第二 仕拂命令ト案内仕拂命令符合セサルトキ

第三 仕拂命令汚損シ案内仕拂命令ト照合シ難キトキ

第四十七條 各年度ノ仕拂命令ニシテ翌年度七月三十一日マテニ仕拂ノ請求ナキ仕拂命令濟金額ニ相
當スル資金ハ會計法第二十條ノ歲計剩餘ニ組入レヌ國庫ニ於テ繰越整理スヘシ(二十六年勅令第百
三十一日ヲ改ム)

第四十八條 前條ノ資金中年度經過後滿五箇年内ニ仕拂ノ請求ナクシテ會計法第十八條ノ期滿免除ニ
據リ政府力負債ノ義務ヲ免レタルモノアルカ爲メ不用トナリタルモノハ其負債ノ期滿免除トナリタ
ル年度ノ歳入ニ組入ルヘシ

第三款 計算報告

第四十九條 金庫出納役ハ毎月仕拂命令受領濟額報告書ヲ調製シ其翌月中ニ大藏省ニ送付スヘシ但シ
運輸不便ノ土地若クハ遠隔ノ地方ニシテ本文期限ニ據リ難キモノハ豫メ大藏大臣ノ認可ヲ受クヘシ
(二十六年勅令第百一十二號ヲ以テ改正)

第五十條 (二十六年勅令第百一十二號ヲ以テ削除)

第五章 決算

第一款 總決算

第五十一條 歳入歳出總決算ハ總豫算ト同一ノ區分ニ據リ大藏大臣之ヲ調製スヘシ

第二款 各省決算報告書及收入支出計算書(二十六年勅令第百一十二號ヲ以テ改正)

第五十二條 各省大臣ハ翌年度十二月三十一日マテニ各省豫定經費要求書ト同一ノ區分ニ據リ其省所
管ニ屬スル經費ノ決算報告書ヲ調製シ之ヲ大藏大臣ニ送付スヘシ

歳入ヲ測定スル官吏ハ會計検査院ニ證明ノ爲メ毎年度歳入測定額計算書ヲ調製シ證據書類ヲ添ヘ年
度經過後五箇月以内ニ其ノ歳入事務管理廳ニ送付シ歳入事務管理廳ハ之ヲ會計検査院ニ送付スヘシ
(二十六年勅令第百一十二號ヲ以テ本項以下三項ヲ追加ス)

仕拂命令官ハ會計検査院ニ證明ノ爲メ毎月支出ノ計算書ヲ調製シ證據書類ヲ添ヘ翌月十五日マテニ
其主管大臣ニ送付シ主管大臣ハ之ヲ會計検査院ニ送付スヘシ

本條第二項第三項ノ場合ニ於テ歳入歳出ニ關スル計算書ハ特ニ監督ノ任アル官吏若クハ特ニ主管大
臣ヨリ委任ヲ受ケタル官吏ヨリ直ニ會計検査院ニ送付セシムルコトヲ得

第三款 國債計算書

第五十三條 國債計算書ハ大藏大臣之ヲ調製スヘシ

第五十四條 國債計算書ニハ左ノ事項ヲ示スヘシ

- 第一 當該年度末日ニ於ケル國債ノ種類及現高ヲ示ス所ノ計算
- 第二 當該年度ニ於テ償還シ及仕拂ホタル各種國債ノ元高及利息ノ計算

第十二編 會計規則

第十二編 會計規則

第三 最近五箇年度間ニ於ケル各種國債増減ノ形況ヲ示ス所ノ計算

第四款 特別會計計算書

第五十五條

特別會計計算書ハ會計法第三十條ニ據リ特別ノ會計ヲ立ルコトヲ許サレタル事務ヲ管理スル所ノ各省大臣之ヲ調製シ毎年度經過後五箇月以内ニ之ヲ大藏大臣ニ送付スヘシ

第五十六條

特別會計計算書ニハ左ノ事項ヲ示スヘシ

第一 收入計算

第二 支出計算

第三 最近五箇年度間資金ノ増減

第四 最近五箇年度間損益ノ比較

第六章 定額繰越、過年度支出、定額戻入

第一款 定額繰越

第五十七條

各省大臣會計法第二十一條及第二十二條ニ據リ定額ヲ翌年度ニ繰越サントスルトキハ年度經過後二箇月以内ニ繰越シ計算書ヲ作り大藏大臣ノ承認ヲ經ヘシ(二十六勅令第百十二號ヲ以テ一箇月ヲ二箇月ト改ム)

本條繰越計算書ハ既出豫算ノ區分ニ從ヒ調製シ左ノ事項ヲ示スヘシ

第一 繰越ヲ要スル項ノ定額

第二 右定額ニ對シ年度内ニ仕拂命令濟トナリタル額及第四十四條ニ據リ翌年度六月三十日マテニ仕拂命令ヲ發スヘキ額(二十六勅令第百十二號ヲ以テ及以下ノ三十字ヲ加フ)

第三 右定額ニ對シ仕拂命令ヲ發スヘキ額即チ翌年度ニ繰越ヲ要スル額

第四 右定額中全ク不用ニ歸シ決算ニ於テ取消スヘキ額

第五十八條 會計法第二十一條ニ據リ年度内ニ其經費ノ支出ヲ終ラサリシ金額ヲ翌年度ニ繰越サントスルトキハ其繰越サントスル金額ノ計算書ニ各事件毎ニ竣功遲延ノ事由ヲ示シ又請負ニテ爲サシム

ル工事若クハ製造ナレハ竣功遲延ノ事由ノ外ニ請負人職業住所氏名ヲ示シ契約書ヲ寫テ添ユヘシ

第五十九條 大藏大臣各省定額ノ繰越ヲ承認シタルトキハ之ヲ會計検査院ニ通知スヘシ

第二款 過年度支出

第六十條 過年度ニ屬スル經費ノ支出ヲ爲ストキハ現年度各省定額ニ對シ仕拂命令ヲ發スヘシ

(二十六勅令第百十二號ヲ以テ改正)

第六十一條 (二十六勅令第百十二號ヲ以テ削除)

第六十二條 第六十條ニ據リ支出セントスル經費ノ金額ハ豫備金ヲ以テ補充シ得ヘキモノ、外其經費

所屬年度ノ豫算ニ於テ該經費ノ屬スル毎項定額中不用トナリタル金額ヲ超過スヘカラス

第三款 定額戻入

第六十三條 仕拂命令官會計法第二十三條但書ニ據リ定額ノ戻入ヲ爲サントスルトキハ其旨ヲ金庫ニ

通知スヘシ(二十六勅令第百十二號ヲ以テ改正)

第六十四條 金庫ハ定額ニ戻入ヲ爲シタルトキハ其旨ヲ仕拂命令官ニ通知スヘシ(二十六勅令第百十二號ヲ以テ改正)

第六十五條 各年度ニ屬スル定額戻入ヲ爲スハ翌年度六月三十日ヲ過クルコトヲ得ス(二十六勅令第百十二號ヲ以テ刪除)

第六十六條 (二十六勅令第百十二號ヲ以テ削除)

第十二編 會計規則

第十二編 會計規則

第十二編 會計規則

第七章 政府ノ工事及物件ノ賣買貸借

第一款 總則

第六十七條 各省大臣五百圓以上ノ工事ニ付テハ竣功ノ後其工事ヲ監督シタル官吏又ハ技術者ヲシテ

之カ調書ヲ作ラシムヘシ(二十六勅令第百十) (二號ヲ以テ本項追加)

契約ニ據リ工事ノ既濟部分又ハ物品ノ既納部分ニ對シ完濟前ニ代價ノ一部分ヲ仕拂ハントスルトキ

ハ各省大臣ハ特ニ検査ノ官吏ヲ命シテ事實ヲ調定シ其調書ヲ作ラシムヘシ (二十六勅令第百十)

任拂命令官ハ前各項ノ調書ニ據ルニアラサレハ任拂命令ヲ發スルコトヲ得ス (二號ヲ以テ本項中ヲ

改正)

第六十八條 前條第二項ノ仕拂ヲ爲サントスルトキハ工事ノ既濟又ハ物品ノ既納トナリタル部分ニ對

スル代價ノ五分ノ四ヲ超ユヘカラス (前條ノ下ニ第二項ノ三字ヲ加フ)

第六十九條 工事又ハ物品供給ノ競争ニ加ハラントシ若クハ其契約ヲ結ハントスル者ハ其工事又ハ物

品ノ供給ニ二年以來從事スルコトヲ證明スヘシ

各省大臣ハ工事又ハ物品ノ性質ニ依リ必要アルトキハ前項ノ外特ニ省令ヲ以テ其競争者ノ資格ヲ定

ムルコトヲ得 (二十六勅令第百十) (二號ヲ以テ本項追加)

工事又ハ物品賣買ノ競争ニ加ハラントシ若クハ其契約ヲ結ハントスル者ハ現金又ハ公債證書ヲ以テ

保證金ヲ納ムヘシ (二十六勅令第百十二號ヲ以テ本) (項中物品供給ヲ物品賣買ト改ム)

第七十條 前條ノ保證金ハ左ノ制限ニ據リ各省大臣之ヲ定ムヘシ

第一 競争ニ加ハラントスル者ハ其事項ノ見積代金ノ百分ノ五以上

第二 契約ヲ結ハントスル者ハ其事項ノ代金ノ百分ノ十以上 (二十六

第七十一條 競争ノ落札者請負又ハ賣買ノ契約ヲ結ハサルトキハ其保證金ハ政府ノ所得トス (二十六

第七十二條 競争ハ總テ入札ノ方法ヲ以テ之ヲ行フヘシ

第七十三條 入札ノ方法ヲ以テ工事又ハ物件ノ賣買貸借ヲ契約セントスルトキハ其入札期日ヨリ少ナ

クモ十五日以前ヨリ揭示又ハ官報新聞紙其他ノ方法ヲ以テ成ルヘク廣ク公告スヘシ

第七十四條 前條ノ公告ニハ左ノ事項ヲ示スヘシ

第一 競争入札ニ付スル事項

第二 契約書案ヲ示ス場所及其契約ノ取結ヲ擔任スル官吏ノ官氏名

第三 競争執行ノ場所日限及時刻

第四 入札ノ保證金額

第七十五條 各省大臣若クハ其委任ヲ受ケタル官吏ハ其競争入札ニ付シタル工事又ハ物件ノ價格ヲ豫

定シ其豫定價格ヲ封書トシ開札ノトキ之ヲ開札場所ニ置クヘシ

第七十六條 開札ハ公告ニ示シタル場所日限時刻ニ入札人ノ面前ニ於テ之ヲ行フヘシ

入札人又ハ其代理人若シ開札ノ場所ニ出席セザルトキハ其入札ハ無効トス

第七十七條 開札ノ上ニテ各人ノ入札中一モ第七十五條ニ據リ豫定シタル價格ノ制限ニ違セザルトキ

ハ直ニ入札人ヲシテ再度ノ入札ヲ爲サシムルコトヲ得

第十二編 會計規則

一九

第十二編 會計規則

第七十八條 落札トナルヘキ同價ノ入札ヲ爲シタル者數名アルトキハ同價ノ入札者ヲシテ直ニ再度ノ入札ヲ爲サシムヘシ

再度ノ入札ヲ爲スモ尙ホ同價ノ入札アルトキハ直ニ抽籤ヲ以テ落札人ヲ定ムヘシ

第七十九條 競争ノ落札者購買又ハ買賣貸借ノ契約ヲ結ハリルトキハ更ニ競争ヲ行フヘシ但本條ノ場合ニ於テハ第七十三條ノ期限ヲ七日マテニ伸縮スルコトヲ得(二十六勅令第百十二號ヲ以テ購買ノ六字并ニ借書ヲ加)

第八十條 工事及物件ノ買賣貸借契約書ニハ其契約セントスル事項ノ細密ナル設計、仕譯、落成期限、受渡期限、保證金額、契約違背ノトキ保證金ニ對スル處分其他一切必要ナル條件ヲ掲クヘシ

第八十一條 契約ハ各省大臣若クハ特ニ其委任ヲ受ケタル官吏其契約書ニ署名捺印スルニアラサレハ確定セサルモノトス

第三款 隨意契約

第八十二條 隨意契約書ハ第八十條及第八十一條ニ準據シ之ヲ作ルヘシ但一口五百圓未満ノ隨意契約ノ場合ニ於テハ本文ノ契約書ヲ省略スルコトヲ得(二十六勅令第百十二號)ナリテ但書以下改正

第八十三條 隨意契約ノ場合ニ於テハ各省大臣ノ見込ニヨリ購買人ノ保證金ヲ免除スルコトヲ得

第八章 出納官吏

第一款 收入官吏(現金前渡ヲ受ケタル官吏)(二十六勅令第百十二號ヲ以テ改正)

第八十四條 出納官吏ハ其責任ニ屬スル會計ニ付自身ニ事務ヲ執ラサルヲ理由トシテ其責任ヲ免ルコトヲ得ス但各省大臣ノ命令ヲ以テ特ニ其代理官若クハ分任官ヲ定メタルトキ其代理官若クハ分任官

ノ所爲ニ付テハ本條ノ限ニアラス(二十六勅令第百十二號ヲ以テ但書改正)

前項代理官ハ出納官吏ノ事務ノ全部ヲ代理シ分任官ハ其一部ヲ分掌スルモノトス(二十六勅令第百十二號ヲ以テ)

第八十五條 各省大臣ノ命シヌル出納官吏代理官若クハ分任官ハ其行爲ニ付會計法第二十六條ノ責任ヲ免ル、ヨトヲ得ス(二十六勅令第百十二號ヲ以テ但書改正)

第八十六條 出納官吏ハ現金前渡及現金收入ニ關シ大藏大臣ノ指揮監督ヲ受ク(二十六勅令第百十二號ヲ以テ改正)

第八十七條 各省大臣ハ所屬出納官吏ノ所爲ニ由リ政府ノ損失ヲ生シタリト認ムル場合ニ於テハ會計

第八十八條 各省大臣ハ所屬出納官吏ニ向テ辨償ヲ命スルコトヲ得

檢査院ノ判決以前ト雖モ其出納官吏ニ向テ辨償ヲ命スルコトヲ得

第八十九條 前條ノ場合ニ於テ其辨償ヲ命セラレタル出納官吏負擔ノ責ヲ免ルヘキ理由アリト信スル

トキハ計算書ヲ作り證據書類ヲ添ヘ本閣大臣ヲ經由シテ之ヲ會計檢査院ニ送付シ其判決ヲ求ムルコ

トヲ得

各省大臣ハ前項ノ場合ト雖モ其命シタル損失金ノ辨償ヲ猶豫セス

會計檢査院ニ於テ其出納官吏ニ向テ辨償ノ責ヲシト判決シタルトキハ其既納ニ係ル辨償金ハ直ニ之

ヲ還付ス

第九十條 (二十六勅令第百十二號ヲ以テ削除)

第九十一條 現金ヲ領收スル收入官吏及現金前渡ヲ受ケタル官吏ノ帳簿金櫃ハ毎年三月三十一日若ク

ハ該官吏輒免死亡停職ノトキ本閣大臣檢査員ヲ命シテ之ヲ檢査セシムヘシ但臨時ニ現金前渡ヲ受ケ

第十二編 會計規則

タル官吏ノ帳簿金櫃ハ定時ノ検査ヲ要セス

大蔵大臣又各省大臣ハ必要ト認ムルトキハ臨時ニ検査員ヲ命シテ現金ヲ領收スル收入官吏及現金前
渡ヲ受ケタル官吏ノ帳簿金櫃ヲ検査セシムルコトアルヘシ

第九十二條 前條ノ検査ヲ執行スルニ當リ主務ノ出納官吏事故ニ由リ自身検査ヲ受ケル能ハサルトキ
ハ其代理者若クハ特ニ本屬大臣ノ命シタル官吏ニ於テ立會ヲ爲スヘシ

第九十三條 現金ヲ領收スル收入官吏及現金前渡ヲ受ケタル官吏ノ帳簿金櫃ヲ検査シタルトキハ其檢
定書ニ通テ製シ検査員及主務ノ出納官吏若クハ立會人之ニ署名シ一通ハ該官吏若クハ立會人ニ交付

シ一通ハ本屬大臣ニ提出スヘシ

第九十四條 現金ヲ領收スル收入官吏及現金前渡ヲ受ケタル官吏他ノ公金ノ出納ヲ兼掌スルトキハ別
ニ検査ノ方法アルニ拘ハラズ金櫃ノ検査ヲ執行スル場合ニ於テハ他ノ公金ヲ併セテ検査ヲ行フヘシ

第九十五條 收入官吏ハ毎年度經過後五箇月以内ニ會計検査院ノ検査判決ヲ受ケル爲メ毎年度會計事
務ノ計算書ヲ調製シ證憑書類ヲ添ヘ之ヲ歳入ノ事務管理廳若クハ特ニ監督ノ任アル官吏ニ送付スヘ

シ(二十六年勅令第百
十二號ヲ以テ改正)

第九十六條 歳入ノ事務管理廳ノ部長若クハ特ニ監督ノ任アル官吏ハ前條計算書ノ下検査ヲ執行シ
其下検査書ヲ添ヘ之ヲ會計検査院ニ送付スヘシ(二十六年勅令第百十
二號ヲ以テ條中刪除)

第九十七條 現金ヲ領收スル收入官吏ハ會計検査院ノ検査判決ヲ受ケル爲メ一年度内ニ執行シタル出
納ノ計算書ヲ調製シ證憑書類ヲ添ヘ毎年度經過後二箇月以内ニ歳入ノ事務管理廳ヲ經由シテ之ヲ會
計検査院ニ送付スヘシ

在外各廳ニ勤務スル現金ヲ領收スル收入官吏ノ前條計算書及證憑書類ハ毎年度經過後一箇月以内ニ
其廳ヲ發シ之ヲ歳入ノ事務管理廳ニ送付シ其管理廳ハ之ヲ會計検査院ニ送付スヘシ

第九十八條 現金前渡ヲ受ケタル官吏ハ會計検査院ノ検査判決ヲ受ケル爲メ各省大臣ノ定ムル所ニ據
リ毎月一回若クハ數回經費仕拂ノ計算書ヲ調製シ證憑書類ヲ添ヘ仕拂命令官ニ送付シ仕拂命令官ハ
其下検査ヲ執行シ下検査書ヲ添ヘ之ヲ會計検査院ニ送付スヘシ但行軍費航海費ノ如キハ行軍若クハ
航海ノ終リタルトキ本條ノ手續ヲ爲スコトヲ得

第九十八條ノ二 分任出納官吏ノ出納ハ總テ主任出納官吏ノ計算トシテ取扱ヒ其報告書及計算書ハ各
別ニ提出ヲ要セス但各省大臣若クハ會計検査院ニ於テ必要ト認ムルトキハ特ニ分任出納官吏ヲシテ
報告書又ハ計算書ヲ提出セシムルコトアルヘシ(二十六年勅令第百十
二號ヲ以テ本條追加)

第九十九條 出納官吏交替ヲ爲シタルトキハ其在職期限經過後六十日以内ニ其在職期限間ニ執行シタ
ル會計ノ計算書ヲ調製シ第九十五條第九十七條第九十八條ノ手續ヲ爲スヘシ

第一百條 出納官吏死亡其他ノ事故ニ由リ自身ニ計算書ヲ調製スル能ハサルトキハ各省大臣特ニ命
シタル官吏ヲシテ之ヲ調製セシムヘシ

出納官吏定期内ニ計算書ヲ送付セサルトキハ各省大臣ハ他ノ官吏ニ命シテ之ヲ調製セシムヘシ
本條ニ據リ調製シタル計算書ハ出納官吏ノ自身ニ調製シタルモノト見做シ會計検査院ニ於テ検査判
決ヲ爲スヘシ

第一百一條 出納官吏ノ計算書ハ提出ノ後修正變更スルコトヲ得ス

第一百二條 會計法第二十八條ニ據リ出納官吏ノ納ムヘキ身元保證金額ハ各省大臣大蔵大臣ト協議シ

テ之ヲ定メ會計検査院ニ通知スヘシ

出納官吏相當ノ資産アル者二人以上ヲ以テ保證人ト爲ストキハ各省大臣前項ノ身元保證金ノ全部若クハ一部ヲ免除スルコトヲ得此場合ニ於テハ各省大臣ヨリ其保證人ノ住所氏名職業ヲ會計検査院ニ通知スヘシ(二十六年勅令第百十二號ヲ以テ本項中職業ヲノ下大藏大臣及ノ五字ヲ削ル)

第三百三條 身元保證金ハ現金ヲ以テ納ムヘシ但公債證書若クハ土地ヲ以テ現金ニ代用スルコトヲ得

第三百四條 身元保證ノ現金ハ大藏省預金局通常預金ノ利子ヲ付スヘシ
身元保證ニ供スル公債證書若クハ土地ハ出納官吏ヨリ各省大臣ニ書入トシ其土地ハ出納官吏ノ私費ヲ以テ登記ヲ受クヘシ(二十六年勅令第百十二號ヲ以テ大藏大臣ヲ各省大臣ト改ム)

第三百五條 會計検査院ノ判決ニ依リ各省大臣出納官吏ノ損失金辨償ヲ命シタル場合ニ於テ其指定シタル期限内ニ出納官吏ヨリ損失金ノ辨償ヲ爲サ、ルトキハ其身元保證金ヲ以テ辨償ニ充ツヘシ

前項ノ場合ニ於テ身元保證金ニ代用シタル公債證書若クハ土地ハ各省大臣之ヲ公賣ニ付シ其代價ヨリ損失金額ヲ差引シ剩餘アルハ出納官吏ニ返付スヘシ(廿六年勅令第百十二號ヲ以テ各省大臣ノ下ノ通知ニ依リ大藏大臣ノ十字ヲ削ル)
保證人ヲ以テ身元保證金ノ免除ヲ得タル官吏損失金ノ辨償ヲ命セラレタル場合ニ於テ辨償スルコト能ハサルトキハ其保證人ヲシテ損失金ヲ辨償セシムヘシ

第三百六條 前條ノ場合ニ於テ出納官吏ノ身元保證金ヲ以テ損失金ノ辨償ニ充ルニ足ラサルトキハ其不足ハ出納官吏及其保證人ヨリ徴收スヘシ

第三百七條 出納官吏數職ヲ兼務シタルカ爲メ各職毎ニ身元保證ヲ爲シタルトキト雖モ身元保證金ハ出納官吏ノ責任其何職ヲ行ヒタルヨリ生シタル間ハス流用シテ辨償ニ充ツヘシ

第三百八條 出納官吏ハ其身元保證金ヲ以テ損失金ノ辨償ニ充テラレタルカ爲メ其身元保證金額定規ノ高ヨリ減シタルトキハ各省大臣ノ指定シタル期限内ニ其減少高ヲ追納スヘシ期限ヲ過キ追納ヲ爲サ、ルトキハ其職務ヲ執ルコトヲ得ス

第三百九條 出納官吏轉職其他ノ事故ニ由リ身元保證金ノ増納ヲ要スルハ其轉職若クハ事故ノ生シタル日ヨリ起算シ六箇月以内ニ増納スヘシ期限ヲ過キ増納ヲ爲サ、ルトキハ其職務ヲ執ルコトヲ得ス
身元保證金トシテ納メタル公債證書若クハ土地ノ價格改定ノ爲メ身元保證金額定規ノ高ヨリ減少シ之ヲ補填ヲ要スル場合ニ於テハ前項ノ例ニ據ル

第三百十條 出納官吏ノ身元保證金ハ其解職後會計検査院ニ於テ其官吏ノ執行シタル會計事務ニ付責任解除ヲ與ヘタル後ニ非サレハ之ヲ還付セス

第二款 金庫出納役

第三百十一條 會計法第三十一條ニ據リ國庫金ノ取扱ヲ日本銀行ニ命シタル場合ニ於テハ日本銀行總裁ハ金庫出納役トシテ金庫ノ出納ヲ掌ルヘシ

金庫出納役ハ會計検査院ノ検査判決ヲ受クル爲メ毎年度經過後四箇月以内ニ一年度内ニ執行シタル出納ノ計算書ヲ調製シ證憑書類ヲ添ヘ之ヲ大藏大臣ニ送付スヘシ(二十六年勅令第百十二號ヲ以テ本項中ヲ改正ス)
金庫出納役ハ會計検査院ノ検査ヲ受クル爲メ毎月各金庫出納内譯書ヲ調製シ證憑書類ヲ添ヘ其翌月中ニ大藏大臣ニ送付スヘシ但運輸不便ノ土地若クハ遠隔ノ地方ニシテ本文期限ニ據リ雖モノハ豫メ大藏大臣ノ認可ヲ受クヘシ(二十六年勅令第百十二號ヲ以テ次項共追加)

大藏大臣ハ前各項ノ出納計算書及内譯書ヲ調査シ之ヲ會計検査院ニ送付スヘシ

第九章 帳簿

第百十二條 大藏省ハ日記簿原簿補助簿ヲ備ヘ國庫ノ計算ニ入ルヘキ一切現金ノ出納ヲ登記スヘシ

第百十三條 大藏省ハ歳入歳出ノ主計簿ヲ備ヘ總テ歳入ノ豫算額、調定濟額、收入濟額、收入未濟額、歳出ノ豫算額、仕拂命令濟額ヲ登記スヘシ

第百十四條 收入官吏ハ收入簿ヲ備ヘ歳入ノ種類ヲ區別シ調定濟額、收入濟額、收入未濟額ヲ登記スヘシ

第百十五條 歳入ノ事務管理廳ハ歳入簿ヲ備ヘ歳入ノ種類ヲ區分シ歳入豫算額、調定濟額、收入濟額、收入未濟額ヲ登記スヘシ

第百十六條 金庫出納役ハ支出簿ヲ備ヘ歳出ノ科目ヲ區分シ仕拂豫算額、仕拂命令受領濟額ヲ登記スヘシ
(二十六年勅令第百十號ヲ以テ條中改正)

第百十七條 (二十六年勅令第百十號ヲ以テ條中改正)

第百十八條 現金ヲ領收スル收入官吏、現金前渡ヲ受ケタル官吏及金庫出納役ハ現金出納簿ヲ備ヘ現金ノ出納ヲ登記スヘシ

第百十九條 各年度經過後八箇月ノ末日ニ於テ大藏大臣ハ會計検査官立會ノ上ニテ大藏省ニ備ヘタル主計簿ヲ締切ルヘシ

第十章 雜則

第百二十條 本規則ニ據リ當該官吏及金庫出納役ヨリ會計検査院ニ提出スル所ノ證明書ニ關スル規程様式ハ會計検査院ニ於テ之ヲ定ムヘシ
(二十六年勅令第百十號ヲ以テ條中改正)

第百二十一條 前條ノ外本規則ニ掲クル諸計算書仕拂命令領收證ノ様式ハ大藏大臣之ヲ定ム

第百二十二條 帳簿ノ様式及記入ノ方法ハ大藏大臣之ヲ定ムヘシ

第百二十三條 本規則ハ明治二十三年四月一日ヨリ施行ス

本規則ト牴觸スル命令ハ本規則ノ施行ノ日ヨリ總テ廢止ス

●歳入歳出豫算概定順序 (三十二年勅令第十二號)

第一條 歳入ノ事務管理廳ハ各年度歳入概算書ヲ調製シ前年度五月三十一日マテニ之ヲ大藏大臣ニ送付スヘシ
(二十六年勅令第二號ヲ以テ條中改正)

第二條 歳入概算書ハ經常ト臨時トニ大別シ更ニ之ヲ款項目ニ區分シ前年度ノ豫算ニ比シ増減ノ理由ヲ説明スヘシ

第三條 各省大臣ハ各年度歳出概算書ヲ調製シ前年度五月三十一日マテニ之ヲ大藏大臣ニ送付スヘシ
(二十六年勅令第二號ヲ以テ條中改正)

第四條 歳出概算書ハ各省ノ所管經費ヲ經常ト臨時トニ大別シ更ニ之ヲ款項ニ區分シ前年度ノ豫算ニ比シ増減ノ理由ヲ説明スヘシ

第五條 大藏大臣ハ各廳ノ歳入概算書及歳出概算書ヲ檢案シ歳入出ヲ對照調理シ歳入出總概算書ヲ調製シ前年度六月三十日マテニ之ヲ閣議ニ提出スヘシ
(二十六年勅令第二號ヲ以テ條中改正)

第六條 歳入出總概算書ハ歳入出共ニ經常ト臨時トニ大別シ更ニ之ヲ款項ニ區分シ前年度ニ比シ増減ノ理由ヲ説明スヘシ

第七條 内閣ニ於テ前年度七月十五日マテニ歳入出總概算書ヲ決定スヘシ
(二十六年勅令第二號ヲ以テ條中改正)

第八條 各省大臣ハ内閣ニ於テ決定シタル各省所管經費毎項ノ概算額以內ヲ於テ節約ヲ旨トシ各年度ノ豫算額ヲ決定ス

第十二編 歳入出豫算概定順序

ノ各省豫定經費要求書ヲ調製シ前年度八月三十一日マテニ之ヲ大藏大臣ニ送付スヘシ
以テ條中ヲ改正ス

第九條 歳入概算書及歳出概算書ノ様式ハ大藏大臣之ヲ定ムヘシ

第十條 明治二十三年度豫算ニ限リ前各條ノ期限ヲ一箇月間延スコトヲ得

●豫定經費算出概則 (二十二年閣令第十九號)

第一條 經費ヲ算出スルニハ其必要ヲ生スル法律命令契約其他經費ヲ請求スル確實ノ理由ヲ示スヘシ

第二條 經費中其給與ニ屬スルモノハ一人當リノ給額ヨリ積算シ又其物件ニ屬スルモノハ一箇當リノ費用ヨリ積算スヘシ

第三條 一人當リノ給額ヲ算出スルニハ規定ノ給額アルモノハ其規定ノ額ヲ基トシ又規定ノ給額ナキモノハ各其據ル所ヲ示スヘシ

第四條 一箇當リノ費用ヲ算出スルニハ規定ノ價格アルモノハ其價格ヲ基トシ又規定ノ價格ナキモノハ時々ノ相場ニ據リ其據ル所ヲ示スヘシ

第五條 給與ニ屬スル經費ヲ積算スルニハ定員アルモノハ定員ヲ限度トシ定員ナキモノハ前年度四月一日ノ現員標準トスヘシ但事務ノ繁閑ニ隨ヒ臨時備入及解備ヲナス人員ハ前々年度以前三箇年度ノ人員ノ平均ヲ標準トスヘシ

第六條 物件ニ屬スル經費ヲ積算スルニハ規定ノ箇數アルモノハ規定ノ箇數ヲ定度トシ規定ノ箇數ナキモノハ前々年度以前三箇年度間ニ實際使用ニ供シタル箇數ノ平均ヲ標準トスヘシ
第七條 國債償還ノ金額(定期アルモノヲ除ク)ハ財政ノ都合ニ依リ其利子及手数料ハ定規ニ據リ之ヲ豫算スヘシ

第八條 常例ノ旅行ニ屬スル旅費ハ各用務毎ニ人員、旅費等級、里程及滞在日數ヲ概定シテ豫算スヘシ

第九條 法律命令契約ニ據リ支出スヘキ總金額ノ定リタルモノハ其總金額ヲ以テ豫算額トスヘシ

第十條 前各條ニ據ルヘカラサル經費ハ最モ適宜ノ方法ヲ以テ豫算シ其計算ノ基ク所ヲ示スヘシ

●特別會計ノ第一豫備金支出方 (三十年勅令第一百十八號)
特別會計ノ豫算中ニ設ケタル第一豫備金ノ支出ヲ要スルトキハ其豫算ヲ所管スル主務大臣ニ於テ會計規則第十八條ノ勅令ニ基キ支出ヲナシ其ノ金額理由ヲ示ス所ノ計算書ヲ作り大藏大臣ニ通知シ大藏大臣ハ之ヲ會計検査院ニ通知スヘシ

●在外公館ニ於テ會計規則ニ定メタル手續省略方 (三十年勅令第五十八號)
第一條 公使館領事館貿易事務館收入官吏ノ領收シタル現金ヲ金庫ニ拂込ムヘキ期限及收入報告調製ノ期限ハ每三箇年一回若ハ數回ト爲スコトヲ得

第二條 公使館領事館及貿易事務館出納官吏ノ仕拂ヒタル現金ノ計算書調製及其ノ證憑書類送付ノ期限ハ外務大臣ニ於テ每三箇月一回若クハ數回ト爲スコトヲ得

第三條 公使館領事館貿易事務館ニ於テ工事又ハ物件ノ賣買貸借ヲ爲スニ當リ隨意契約ニ依ルトキハ一口二千圓未満ニ限リ會計規則第八十二條ノ契約書ヲ省略スルコトヲ得

●葉煙草賣渡ニ付會計規則ニ定メタル手續省略方

(三十一年勅令第二十五號)

第十二編

特別會計ノ第一豫備金支出方 在外公館ニ於テ會計規則ニ定メタル手續省略方

第十二編

葉煙草賣渡ニ付會計規程ニ定メタル手續省略方
物品會計規則

三〇

●物品會計規則 (二十二年勅令第八十四號)

第一條 此ノ規則ニ於テ物品ト稱スルハ政府ニ屬スル器具器械備品消耗品動物其ノ他一切ノ動産ヲ云フ但シ陸海軍ノ兵備ニ關ルモノハ各其規則ニ依ル

第二條 物品ノ會計ハ總テ年度ヲ以テ區分シ毎年四月一日ヨリ翌年三月三十一日ニ至ル十二箇月ヲ以テ一年度トス

第三條 物品ノ會計ハ現ニ其ノ出納ヲ執行シタル日ヲ以テ年度ノ所屬ヲ區分スヘシ

第四條 物品ヲ保管シ之カ出納ヲ掌ル者ヲ物品會計官吏トス

第五條 總テ物品ハ責任アル官吏ノ保管ニ付スヘシ

第六條 物品會計官吏ハ各省大臣ノ定メタル規程ニ據リタル命令アルニアラサレハ物品ヲ出納スルコトヲ得ス

第七條 物品會計官吏ハ其故意怠惰ニ由リ保管ノ物品ヲ亡失毀損シタルトキハ辨償ノ責ニ任スヘシ

第八條 各省大臣ノ定メタル規程ニ據リ各官吏以下ノ使用ニ供シタル物品ノ亡失毀損ニ就テハ物品會計官吏ハ合規ノ監督ヲ怠リタル場合ノ外ハ其ノ責任ヲ免ルコトヲ得

第九條 物品會計官吏ハ各省大臣ノ命シタル代理官ノ所爲ニ就テハ其ノ責任ヲ免ルコトヲ得

物品會計官吏ノ代理官ハ其ノ代理セル所爲ニ就テハ物品會計官吏タル責任ヲ免ルコトヲ得ス

第十條 物品會計官吏ハ物品ノ出納帳簿ヲ備ヘ其ノ出納ノ事實ヲ登記スヘシ

物品ノ消耗賣拂亡失毀損生産ノ爲メノ消費及其ノ他物品會計官吏ノ保管ヲ離ル、ヲ出トシ買入生産

及ヒ其ノ他其ノ保管ニ屬スルヲ納トス

第十一條 常時出納ヲナサ、ル倉庫若ハ貯藏所ノ物品ハ各省大臣ヨリ毎年一回若ハ物品會計官吏交替ノ際検査ノ官吏ヲ命シ目錄ト現在品ノ照合ヲナシメ其ノ調査ヲ作ラシムヘシ

第十二條 在外各廳其ノ他特ニ主任ノ官吏ヲ置ク能ハサル支部局ニアル物品ハ各省大臣ヨリ毎年一回若ハ物品會計官吏交替ノ際検査ノ官吏ヲ命シテ現在品及出納ノ實況ヲ調査セシメ其ノ調査ヲ作ラシムヘシ

第十三條 第十一條第十二條ノ調査ニハ検査官吏及検査ヲ受タル物品會計官吏若ハ特ニ命セラレタル立會人之ニ署名スヘシ

第十四條 (二十四年勅令第七十七號ヲ以テ削除)

第十五條 物品會計官吏ハ會計検査院ノ検査判決ヲ受ル爲メノ年度間ニ執行シタル物品出納ノ計算書ヲ製シ年度後四箇月以内ニ證據書類ヲ添ヘ之ヲ本廳大臣ニ差出スヘシ

物品會計官吏交替ヲナシタルトキハ前任官吏ハ前項ニ準シテ計算書ヲ差出スヘシ但シ前任官吏死亡其ノ他ノ事故ニ由リ自身計算書ヲ調製スル能ハサル場合ニ於テハ各省大臣ハ他ノ官吏ニ命シテ之ヲ調製セシムヘシ

第十六條 前條第二項但書ニ據リ調製シタル計算書ハ責任ヲ有スル物品會計官吏ノ自身ニ調製シタルモノト同一ニ見做シ會計検査院ニ於テ検査判決ヲナスヘシ

第十七條 各省ノ部長若ハ特ニ監督ノ任アル官吏ハ第十五條計算書ノ下検査ヲ執行シ其下検査書ヲ添付シテ之ヲ會計検査院ヘ送付スヘシ

第十二編 物品會計規則

三一

第十二編 政府ノ工事又ハ物件賣買貸借ニ關スル隨意契約方 三二

第十八條 當時出納ヲナサ、ル倉庫若ハ貯藏所ノ物品又ハ在外各廳其ノ他特ニ主任ノ官吏ヲ置ク能ハサル支部局ノ物品ヲ保管スル物品會計官吏ハ第十一條又ハ第十二條ノ調書ヲ以テ第十五條ノ計算書ニ代ヘ責任ノ解除ヲ會計検査院ニ求ムルコトヲ得

第十九條 物品會計官吏ノ身元保證ニ關スル規則ハ總テ會計規則出納官吏身元保證ノ例ニ據ル

第二十條 物品出納ノ順序ハ各省大臣之ヲ定ムヘシ

第二十一條 官吏ノ執務上必要ナル物品ノ交付及其交付ヲ受タル官吏ノ責任ニ就テハ各省大臣之ヲ規定スヘシ

第二十二條 此ノ規則ハ明治二十二年十月一日ヨリ施行ス

●政府ノ工事又ハ物件ノ賣買貸借ニ關スル隨意契約方 (二十三年勅令第九十三號)

政府ノ工事又ハ物件ノ賣買貸借ニシテ競争ニ付スルモ入札者ナキトキ又ハ會計規則第七十七條ニ依リ再度ノ入札ニ付スルモ尙ホ豫定價格ノ制限ニ違セザルトキハ隨意契約ヲナスコトヲ得之カ爲メ最初競争ニ付スルトキ定メタル價格及其他ノ條件ヲ變更スルコトヲ得ス

●中央備荒儲蓄金ヲ以テ購入シタル公債證書賣却隨意契約 (二十四年勅令第二百十二號)

中央備荒儲蓄金ヲ以テ購入シタル公債證書ヲ賣却スルニ當リ臨時急施ヲ要スルトキハ競争ニ附セス隨意契約ニ依ルコトヲ得

●在外各廳ニ於テ隨意契約ニ依リ工事又ハ物件ノ賣買貸借方

(二十七年勅令第四十號)

在外各廳ニ於テ工事又ハ物件ノ賣買貸借ヲ爲ストキハ隨意ノ契約ニ依ルコトヲ得

●軍事上緊急ノ必要ニ因リ購入シタル物件ハ隨意契約ヲ以テ貸付又ハ賣渡スコトヲ得 (二十七年勅令第七十六號)

軍事上緊急ノ必要ニ因リ購入シタル物件ハ隨意契約ヲ以テ貸付ケ又ハ賣渡スコトヲ得

●陸軍用地ノ生産物ヲ賣渡スコトキハ隨意契約ニ依ルコトヲ得 (三十二年勅令第二百六號)

陸軍用地ニ産スル薪炭材下草秣小柴ヲ從來ノ慣行ニ依リ地元人民ニ賣渡スコトキハ隨意契約ニ依ルコトヲ得

●輸入葉煙草買入ノ隨意契約方 (三十二年勅令第二百二十一號)

政府ニ於テ輸入ノ爲葉煙草ヲ買入ルルトキハ競争ニ付セス隨意契約ニ依ルコトヲ得

●工事ノ爲メ買収又ハ收用シタル土地ヲ隨意契約ヲ以テ貸付方 (三十年勅令第十五號)

國ノ起業ニ係ル工事ニ要スル土地ニシテ買収又ハ收用ノ後未タ其ノ土地ニ工事ヲ施行セサルモノハ其ノ施行ニ至ル迄隨意契約ヲ以テ之ヲ其ノ舊所有者ニ貸付スルコトヲ得

●官設鐵道ニ屬スル土地家屋ヲ私設鐵道會社ニ賣渡又ハ貸渡ニ關スル隨意契約 (二十九年勅令第二百四十號)

官設鐵道及私設鐵道ノ連絡營業ノ爲メ必要アル場合ニ於テ官設鐵道ニ屬スル土地家屋ヲ私設鐵道會社ニ賣渡又ハ貸渡ニ關スル隨意契約

第十二編 官設鐵道ニ屬スル土地家屋ヲ私設鐵道會社ニ賣渡又ハ貸渡ニ關スル隨意契約 三三

ニ賣渡又ハ貸渡ストキハ隨意契約ニ依ルコトヲ得

●工事ニ要スル機械器具鐵軌車輛船舶建物及其ノ他附屬物材料素品
ニ關スル隨意契約 (二十九年勅令第二百六十八號)

政府ニ於テ工事ニ要スル機械器具鐵軌車輛船舶建物及其ノ他材料素品ヲ府縣郡市町村及公共組合ヨリ買上ケ借入レ又ハ官有ノ機械器具鐵軌車輛船舶及其ノ他材料素品ヲ工事ノ爲メ府縣郡市町村及公共組合ニ賣渡シ貸渡ストキハ競争ニ付セス隨意契約ニ依ルコトヲ得

●府縣稅若クハ地方稅市町村稅又ハ水利組合費ヲ以テ施行スヘキ工
事ニ關聯スル政府ノ工事隨意契約方 (二十六年勅令第五十一號)

府縣稅若クハ地方稅市町村稅又ハ水利組合費ヲ以テ施行スヘキ工事ニ關聯スル政府ノ工事ニシテ其分割施行ヲ爲スナチ不利トスル場合ニ於テ政府ハ其工事ノ受負又ハ之ニ要スル物品ノ供給ヲ隨意契約ヲ以テ府縣市町村又ハ組合工事ノ受負人又ハ物品供給者ニ命スルコトヲ得

●官有ノ建物及其ノ附屬物ノ賣渡貸渡ニ關スル隨意契約方
(二十六年勅令第二百二十八號)

官有ノ建物及其ノ附屬物ヲ公用ニ供スル爲メ府縣郡市町村及公共組合ニ賣渡シ又ハ貸渡ストキハ競争ニ付セス隨意ノ契約ニ依ルコトヲ得

●痘苗製造ニ於テ牝牛ノ購入ハ隨意契約ニ依ルコトヲ得

(二十九年勅令第三百七十三號)

東京及大阪痘苗製造所ニ於テ痘苗製造ニ要スル牝牛ノ購入ハ隨意契約ニ依ルコトヲ得

●遞信省ニ於テ鐵道工事ニ要スル職工人夫雇傭ノ請負ハ隨意契約ニ
依ルヲ得 (二十九年勅令第二百八號)

遞信省ニ於テ直接ニ從事スル鐵道工事ニ要スル職工人夫雇傭ノ請負ハ隨意契約ニ依ルコトヲ得

●遞信省ニ於テ鐵道電信電話事業ニ要スル材料ヲ御料局ヨリ買受ル
トキ隨意契約ニ依ルコトヲ得 (二十九年勅令第三百五十四號)

遞信省ニ於テ鐵道電信電話事業ニ要スル材料ヲ御料局ヨリ買受クルトキハ隨意契約ニ依ルコトヲ得

●兵營及葉煙草取扱所ノ建築材料ヲ御料局ヨリ買受クルトキ隨意契
約ニ依ルコトヲ得 (二十九年勅令第三百十七號)

陸軍兵營及葉煙草取扱所ノ建築材料ヲ御料局ヨリ買受クルトキハ隨意契約ニ依ルコトヲ得

●農商務省ニ於テ馬匹改良ニ要スル馬匹ノ購入及貸渡ハ隨意契約ニ
依ルヲ得 (二十九年勅令第二百三十四號)

農商務省ニ於テ馬匹改良ニ要スル馬匹ノ購入及貸渡ヲ爲ストキハ隨意ノ契約ニ依ルコトヲ得

●製鐵所ニ於テ物件購入スルハ隨意契約ニ依ルコトヲ得
(二十九年勅令第三百七十八號)

製鐵所ニ於テ製鐵事業設備完了ニ至ル迄ニ必要トスル器具機械其ノ他物件ヲ外國ニ於テ購入スルトキ又ハ内國ニ於テ製鐵原料ヲ購入スルトキハ隨意契約ニ依ルコトヲ得

●鐵道作業局ニ於テ鐵道事業ニ要スル物件ノ賣買貸借ハ隨意契約ニ
依ルコトヲ得 (三十一年勅令第七十四號)

遞信省ニ於テ鐵道工事ニ要スル職工人夫雇傭ノ請
負ハ隨意契約ニ依ルヲ得

第十二編

札幌農學校資金ニ關スル北海道ノ土地貸付ハ隨意契約ニ依ルコトヲ得

鐵道作業局ニ於テ鐵道事務ニ要スル車輛器具機械其ノ他鐵道用品ヲ官廳若ハ私設鐵道會社ヨリ買入借入又ハ官廳若ハ私設鐵道會社ニ賣渡貸渡ストキハ隨意契約ニ依ルコトヲ得

●製鐵所用地地先浚渫及荷場設置工事請負ノ隨意契約方

(三十二年勅令第二十五號)

製鐵所創立費支辨ニ關スル用地地先浚渫及荷場設置工事ニシテ若松築港工事ノ請負ハ隨意契約ニ依ルコトヲ得

●北海道廳直營事業ニ使用スル職工人夫雇傭ハ隨意契約ニ依ルヲ得

(二十九年勅令第二百八十號)

北海道廳ニ於テ施行スル築港運河架橋及墾道ニ關スル工事ヲ競争ニ付スルモ入札者ナキ爲メ又ハ會計規則第七十七條ニ依リ再度ノ入札ニ付スルモ尙ホ豫定價格ノ制限ニ違セサル爲メ之ヲ北海道廳ノ直營事業ト爲シタルトキ之ニ使用スル職工人夫ノ雇傭ハ隨意契約ニ依ルコトヲ得

●北海道廳ニ於テ種畜貸渡ノ隨意契約

(三十四年勅令第六十三號)

北海道廳ニ於テ殖産獎勵ニ要スル種畜ヲ貸渡ストキハ隨意ノ契約ニ依ルコトヲ得

●札幌農學校資金ニ關スル北海道ノ土地貸付ハ隨意契約ニ依ルコトヲ得

(二十八勅令第四百四號)

札幌農學校ノ資金ニ關スル北海道ノ土地ノ貸付ハ左ノ場合ニ限り隨意契約ニ依ルコトヲ得

一 一人ニ付宅地ノ面積四百五十坪以内ヲ貸付スルトキ

二 一人ニ付耕地及未開地ノ面積三萬坪以内ヲ貸付スルトキ

不開地ヲ貸付スル場合ニ於テハ貸付料ヲ徵收セサルコトヲ得

●北海道森林ノ產物ヲ賣渡ストキ又ハ北海道廳直接從事ノ工事材料

ヲ御料局ヨリ買受クルトキ隨意契約ニ依ルコトヲ得

(三十年勅令第二十一號)

公益事業ノ工事ニ要スル北海道森林ノ主副產物ヲ賣渡ストキ又ハ北海道廳ニ於テ直接ニ從事スル各種工事ノ材料ヲ御料局ヨリ買受クルトキハ隨意契約ニ依ルコトヲ得

●粗悪炭並粉炭拂下ノ隨意契約

(三十二年勅令第二百二十九號)

海軍炭礦採掘ノ請負及採掘ヨリ生スル粗悪炭並ニ粉炭ノ拂下ハ競争ニ付セス隨意契約ニ依ルコトヲ得

●海軍艦船用石炭ヲ外國軍艦ニ讓渡方

(二十三年勅令第二百九十五號)

外國軍艦ニ於テ石炭缺乏ノ際其供給ヲ請フトキハ相當代價ヲ以テ海軍省貯藏ノ石炭ヲ讓渡スコトヲ得

●償金特別會計法

(二十九年法律第六號)

第一條 償金及其ノ利子ハ一般ノ歳入歳出ト區分シ特別ノ會計ヲ設置ス

第二條 償金ハ金銀地金及有價證券ヲ以テ之ヲ保有スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ日本銀行ヲシテ其

ノ交換ヲ取扱ハシム

前項ノ交換ヨリ生スル差増減ハ本會計ノ歳入出ニ屬スルモノトス

第三條 國庫内現金融通ノ爲國庫ヨリハ償金ノ金地金ヲ以テ日本銀行ヨリハ之ニ相當スル兌換銀行券ヲ以テ相互間ニ貸借勘定ヲ組成スルコトヲ得此ノ場合ニ於ケル利子ノ割合ハ大藏大臣之ヲ定ム

第十二編 償金特別會計法

前項ノ金地金ハ日本銀行ニ於テ兌換銀行券ノ準備ニ供スヘキモノトス
 償金ハ歲計上ノ都合ニ依リ國庫内他ノ會計部へ一時繰替運用ヲ爲スコトヲ得(三十二年法律第九號ヲ以テ本項追加)
 第四條 政府ハ毎年償金特別會計ノ歲入歳出豫算ヲ調製シ歳入歳出ノ總豫算ト共ニ帝國議會ニ提出ス
 へシ

●償金ヲ公債費途へ繰替運用ニ關スル法律 (三十二年法律第八號)

鐵道敷設法事業公債條例及北海道鐵道敷設法ニ依ル公債募集金ヲ以テ支辨スヘキ費途ハ市場金融ノ景況ニ由リ一時償金特別會計資金ヲ以テ繰替支辨シ他日公債ヲ募集シテ之ヲ返償スルコトヲ得

●葉煙草專賣資金會計法 (二十九年法律第七十九號)

第一條 葉煙草專賣法ニ依リ政府ニ於テ收納及輸入スル葉煙草賠償ノ爲葉煙草專賣資金ヲ置キ特別會計ヲ設置ス(三十二年法律第二十九號ヲ以テ改正)

第二條 毎會計年度ニ於テ其ノ歲入ノ葉煙草賠償金ニ超過スルモノハ同年度一般ノ歲入ニ編入シ資金ハ翌年度ニ繰越スヘシ

第三條 政府ハ毎年葉煙草專賣資金特別會計ノ歲入歳出豫算ヲ調製シ歳入歳出ノ總豫算ト共ニ帝國議會ニ提出スヘシ

第四條 葉煙草專賣資金ノ收入支出ニ關スル規定ハ別ニ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第五條 此ノ法律ハ明治三十一年一月一日ヨリ施行ス
 ●葉煙草專賣資金會計法廢止法 (三十二年法律第三十一號)
 葉煙草專賣資金會計法ハ明治三十二年度限り廢止ス

●葉煙草專賣資金會計規則 (三十年勅令第五十三號)

第一條 葉煙草專賣資金ハ葉煙草賣渡代金ヲ以テ歳入トシ葉煙草納付者ニ對スル賠償金ヲ以テ歳出トス

第二條 歳入歳出ノ豫定計算書ハ主管大臣之ヲ調製シ前年度八月三十一日迄ニ各省豫定經費要求書ト俱ニ之ヲ大藏大臣ニ送付スヘシ

第三條 主管大臣ハ其ノ年三月三十一日ニ終リタル會計年度ノ受拂勘定表ヲ調製シ歳入歳出ノ豫定計算書ニ添付スヘシ

第四條 歳入歳出ノ決定計算書ハ主管大臣之ヲ調製シ翌年度八月三十一日迄ニ之ヲ大藏大臣ニ送付スヘシ

歳入ヲ測定スル官吏ハ會計検査院ニ證明ノ爲メ毎年度歳入測定額計算書ヲ調製シ證憑書類ヲ添へ年
 度經過後二箇月以内ニ其ノ歳入事務管理廳ニ送付シ歳入事務管理廳ハ之ヲ會計検査院ニ送付スヘシ
 支拂命令官ハ會計検査院ニ證明ノ爲メ毎月支出ノ計算書ヲ調製シ證憑書類ヲ添へ毎月十五日迄ニ主
 管大臣ニ送付シ主管大臣ハ之ヲ會計検査院ニ送付スヘシ

第五條 各年度ニ於テ收入ヲ爲スヘキ權利ヲ得テ當該年度内ニ收入濟トナラサルモノハ收入未濟トシテ順次翌年度ニ繰越シ現ニ收入ヲナシタル年度ノ歳入ニ組入ルヘシ

第六條 各年度ニ於テ支拂ヲ爲スヘキ義務ヲ生シ當該年度内ニ仕拂命令ヲ發セサルモノハ支出未濟トシテ順次翌年度ニ繰越シ當該年度經過後滿五箇年内ハ支出ノ請求アル毎ニ仕拂命令ヲ發スヘシ

第七條 主管大臣ハ葉煙草專賣所ノ出納官吏ニ現金前渡ヲ爲スコトヲ得

第十二編 葉煙草競争讓渡ニ關スル件

四〇

- 第八條 前渡ヲ爲シタル現金ノ支拂殘額ハ翌年度四月三十日迄定額戻入ヲ爲スコトヲ得
- 第九條 歳入ノ收入濟額收入未濟額資金受入額、資金ニ屬スル現金ノ持越額及總葉煙草ノ價格ヲ以テ受入トシ歳出ノ支出濟額、支出未濟額、資金額、賣渡代價收入濟葉煙草ノ價格、賣渡代價收入未濟既出葉煙草ノ價格及損失ニ歸シタル葉煙草ノ價格ヲ以テ拂出トシ受入額ヨリ拂出額ヲ控除シ過剩アルトキハ葉煙草專賣益金トシテ之ヲ同年度一般歳入ニ納付スヘシ
- 前項ニ掲クル葉煙草ノ價格ハ總テ賠償價格ヲ以テ計算スヘシ但毎年度ノ終ニ現在スル葉煙草ノ價格ハ毎年ノ賠償價格ニ比準シテ之ヲ改算スヘシ
- 第十條 會計規則第九十五條ニ依リ收入官吏ノ會計検査院ニ提出スヘキ計算書ヲ事務管理廳ニ送付スルハ毎年度經過後二箇月以内トス
- 第十一條 葉煙草專賣事務管理廳ハ日記簿原簿及補助簿ヲ備ヘ其ノ事務ニ關スル一切ノ計算ヲ登記スヘシ
- 第十二條 本規則ニ依リ出納官吏ヨリ會計検査院ニ提出スル所ノ證明書ニ關スル規程様式ハ會計検査院ノ定ムル所ニ依ル
- 第十三條 前條ノ外本規則ニ掲クル諸書類帳簿ノ様式ハ大藏大臣之ヲ定ムヘシ
- 附則
- 第十四條 本規則ハ明治三十一年一月一日ヨリ施行ス
- 葉煙草競争賣渡ニ關スル件 (三十二年勅令第四十五號)
- 第一條 葉煙草專賣所ニ於テ競争ニ付シ葉煙草ヲ賣渡トキハ入札又ハ競賣ノ方法ニ依ル

葉煙草專賣所ハ競争ニ加ハラントスル者又ハ契約ヲ結ハントスル者ヲシテ現金ヲ以テ保證金ヲ納メシムルコトヲ得

- 第二條 競争ヲ行ハントスルトキハ豫メ揭示又ハ其ノ他ノ方法ヲ以テ成ルヘク廣ク公告スヘシ
- 第三條 競争ハ競争者ノ面前ニ於テ施行スヘシ競争施行ノ際出席セサル者ノ競争申込ハ無効トス
- 第四條 競争ニ付スルモ各人ノ競争價格定價以下ナルトキハ其ノ競争ハ無効トス
- 第五條 同一價格ヲ以テ競争シ落札又ハ競落トナルヘキ者數人アリタルトキハ直ニ抽籤ヲ以テ其ノ落札者又ハ競落者ヲ定ムヘシ
- 第六條 落札者又ハ競落者ハ直ニ買請書ヲ提出スヘシ

●作業會計法 (二十三年法律第十七號)

- 第一條 左ノ作業所ハ其事務ヲ經營スル爲メ固定資本据置運轉資本ヲ置キ作業上ノ收入及其附屬雜收入ハ作業ノ費用ニ充ルコトヲ許シ特別ノ會計ヲ立テシム (三十年法律第八號ヲ以テ本項中ヲ改正ス)
- 第一 造幣局
- 第二 印刷局
- 第三 製鐵所 (三十二年法律第十(二)號ヲ以テ改正)
- 第四 電信燈臺川品製造所
- 第五 廣島鑛山
- 第六 專賣局 (三十二年法律第三十號ヲ以テ追加) (但本號ハ三十三年度ヨリ施行)
- 第二條 各作業所ニ於テ從來使用シ及將來増加スル所ノ土地建物軌道其他築造道路船舶機械永遠保存
- 第十二編 作業會計法

四一

品其他重要ナル器具ヲ以テ固定資本トナシ從來ノ營業資本額ヲ以テ据置運轉資本トス

製鐵所据置運轉資本ハ四百五十拾萬圓トシ漸次一般會計ヨリ繰入ス

專賣局据置運轉資本ハ明治三十三年四月一日現在ノ葉煙草專賣資金ヲ以テ之ニ充テ漸次増加シテ八百萬圓トス(但本項ハ三十三年度ヨリ施行)

第三條 各作業所特別會計ノ歳出額ハ豫算定額内ニ於テ實際ノ歳入及据置運轉資本ノ合計額ヲ超過スルヲ許サス

第四條 固定資本ノ維持修理及補充ハ作業特別會計ノ歳入ヲ以テ支辨スヘシ

第五條 作業所ノ純益及固定資本ニ屬スル物件ノ賣拂代金ハ總テ一般ノ歳入ニ編入スヘシ

第六條 政府ハ毎年各作業所特別會計ノ歳入歳出豫算ヲ調製シ歳入歳出ノ總豫算ト俱ニ之ヲ帝國議會ニ提出スヘシ

第七條 各作業所特別會計ノ收入支出ニ關スル規程ハ別ニ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第八條 本法ハ明治二十三年度ヨリ施行ス其帝國議會ニ關涉スルモノハ帝國議會開會後ノ會計年度ヨリ施行ス

●官設鐵道會計法 (二十三年法律第二十號)

第一條 鐵道事業ヲ經營スル爲メ固定資本据置運轉資本ヲ置キ營業上ノ收入及其附屬雜收入ハ鐵道事業ノ費用ニ充ルコトヲ許シ特別ノ會計ヲ立テシム

第二條 鐵道事業ノ爲メ從來使用シ及將來増加スル所ノ工地軌道車輛停車場工場家屋機械其他重要ナル器具ハ其固定資本トシ從來ノ流動資本ハ其据置運轉資本トス

第三條 鐵道營業ニ要スル費用固定資本ノ維持修理及補充並ニ損失金ヲ鐵道事業ノ歳出トス

第四條 鐵道事業ノ純益及固定資本ニ屬スル物件ノ賣拂代金ハ總テ一般ノ歳入ニ編入スヘシ

第五條 政府ハ毎年鐵道事業ノ歳入歳出豫算ヲ調製シ歳入歳出ノ總豫算ト俱ニ之ヲ帝國議會ニ提出スヘシ

第六條 鐵道事業ノ歳出額ハ豫算定額内ニ於テ實際ノ歳入及据置運轉資本ノ合計額ヲ超過スルヲ許サス

第七條 災害事變ニ因リ鐵道財産ニ大破損ヲ生シ豫算定額ヲ以テ修理スルニ足ラサル場合ニ於テ其費用ヲ補フ爲メ鐵道事業ノ歳出豫算ニ豫備費ヲ設ルコトヲ得

第八條 鐵道事業ノ收入支出ニ關スル規程ハ別ニ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第九條 本法ハ明治二十三年度ヨリ施行ス其帝國議會ニ關涉スルモノハ帝國議會開會後ノ會計年度ヨリ施行ス

●北海道官設鐵道會計ニ關スル件 (三十一年法律第三號)

明治二十三年法律第二十號官設鐵道會計法ハ北海道官設鐵道ニ適用セス

●作業及鐵道會計規則 (二十三年勅令第三十三號)

第一章 歳入歳出

第一條 左ノ諸收入ヲ以テ作業所ノ歳入トス

第一 作業上ノ歳入

第二 附屬雜收入

第十二編 作業及鐵道會計規則

第十二編 作業及鐵道會計規則

四四

- 第二條 造幣局、印刷局、製鐵所、電信燈臺用品製造所、廣島鑛山ニテハ左ノ諸費ヲ以テ歲出トス
- 第一 事務員技術員ノ俸給諸給旅費(三十年勅令第百二十六號ヲ以テ本項改正)
- 第二 事務所費(三十年勅令第百二十六號ヲ以テ本項追加)
(シテ第二項ヲ第三項トナシ以下順次繰下ク)
- 第三 職工人夫ニ給スル諸費
- 第四 作業用器具機械ノ維持修理及補充費
- 第五 材料素品購入代
- 第六 動力費
- 第七 作業場川備品消耗品費
- 第八 建物築造道路船舶ノ維持修理及補充費
- 第九 損失金
- 第三條 東京砲兵工廠大阪砲兵工廠ニ於テハ左ノ諸費ヲ以テ歲出トス
- 第一 職工人夫ニ給スル諸費
- 第二 作業用器具機械ノ維持修理補充費
- 第三 材料素品購入代
- 第四 機械運轉用品購入代
- 第五 作業場川備品消耗品費
- 第六 損失金
- 第四條 千住製絨所ニ於テハ左ノ諸費ヲ以テ歲出トス

- 第一 事務員技術員ノ俸給諸給旅費
- 第二 事務所費
- 第三 職工人夫ニ關スル諸費
- 第四 作業用器具機械ノ維持修理及補充費
- 第五 材料素品購入代
- 第六 機械運轉用品購入代
- 第七 作業場川備品消耗費
- 第八 生産品販賣諸費
- 第九 土地建物ノ維持修理費
- 第十 損失金
- 第五條 鐵道事業ニ於テハ左ノ諸費ヲ以テ歲出トス
- 第一 營業ニ從事スル職員ノ俸給諸給旅費
- 第二 職工人夫ニ給スル諸費
- 第三 鐵道築造物建物車輛器具器械ノ維持修理及補充費
- 第四 材料素品購入代
- 第五 瀛車及機械運轉用品購入代
- 第六 營業事務所停車場機械場客車川備品消耗品費
- 第七 損害賠償金
- 第十二編 作業及鐵道會計規則

四五

第八 訴訟費

第九 手数料保險料借料廣告料謝金外國注成品監查費其他營業上ノ雜費

第十 運輸收入割戻金

第十一 損失金

第二章 豫算決算

第六條 歳入歳出ノ豫定計算書ハ所管大臣之ヲ調製シ前年度八月三十一日マテニ各省豫定經費要求書ト併ニ之ヲ大藏大臣ニ送付スヘシ(二十六年勅令第二百二十四號ヲ以テ六月三十日ヲ八月三十一日ト改ム)

第七條 歳入歳出豫定ノ計算書ハ科目ヲ分チ成ルヘク歳入ノ性質歳出ノ用途ヲ明示スヘシ

第八條 所管大臣ハ其年三月三十一日ニ終リタル會計年度ノ受拂勘定表及固定資本價格増減表ヲ調製シ歳入歳出ノ豫定計算書ニ添付スヘシ

第九條 歳入歳出ノ決定計算書ハ所管大臣之ヲ調製シ翌年度八月三十一日マテニ之ヲ大藏大臣ニ送付スヘシ

作業事務長又ハ作業支部局長ハ會計検査院ニ證明ノ爲メ毎年度歳入確定額計算書ヲ調製シ證據書類ヲ添ヘテ添ヘ年度經過後二箇月以内ニ其歳入事務管理廳ニ送付シ歳入事務管理廳ハ之ヲ會計検査院ニ送付スヘシ(二十六年勅令第二百二十四號ヲ以テ本項以下三項追加)

作業事務長又ハ作業支部局長ハ會計検査院ニ説明ノ爲メ毎月支出ノ計算書ヲ調製シ證據書類ヲ添ヘ翌月十五日マテニ其ノ所管大臣ニ送付シ所管大臣ハ之ヲ會計検査院ニ送付スヘシ

ヨ直ニ會計検査院ニ送付セシムルコトヲ得

第三章 收入支出

第十條 歳入歳出ノ豫算ハ決定ノ後豫備費ヲ除キ所管大臣各作業事務長ニ命シテ之ヲ執行セシム各省大臣ハ作業支部局長ヲシテ歳出豫算ノ一部ヲ執行セシメントスルトキハ仕拂豫算ヲ以テ之ヲ命スヘシ

仕拂豫算ニ關スル規程ハ會計規則第十一條第十二條第十三條ニ依ルヘシ

第十一條 豫備費ノ支出ハ會計規則第十九條第二十條第二十四條ニ依ルヘシ

第十二條 作業局ノ收入官吏ハ會計規則第二十五條第二十六條ノ手續ニ依リ收入ヲ取扱フヘシ(二十年勅令第二百二十四號ヲ以テ條中刪除)

第十三條 作業局ハ据置運轉資本ニ屬スル現金ノ持越高及當該年度ノ收入濟歳入額ヲ以テ仕拂元受高トシ歳出ヲ支出スルハ此仕拂元受高ヲ超過スルヲ得ス

第十四條 作業事務長又ハ作業支部局長ハ歳出ヲ支出スル爲メ金庫ニ向テ仕拂請求書ヲ發スヘシ

第十五條 仕拂請求書ヲ發スル官吏ハ正當債主若クハ其代理人ノ爲ニスルニアラサレハ仕拂請求書ヲ發スルヲ得ス但支部局及派出工場ニ於テ仕拂ヲナス經費外國ニ於テ仕拂ヲナス經費職工人夫ノ給料諸手當ハ仕拂請求書ヲ發シ主任ノ官吏又ハ外國派出ノ官吏ヲ仕拂官吏トシテ現金ノ前渡ヲナスコトヲ得(三十年勅令第二百三十號ヲ以テ但書中ヲ削ル)

第十六條 仕拂請求書ヲ發スル官吏ハ總テ仕拂請求書ヲ發スル前其支出ハ正當ニシテ必要ナルヤヲ調査シ其金額ヲ査定シ又其支出ハ豫算ノ目的ニ違フコトナキヤ金額ハ豫算定額及仕拂元受高ヲ超過ス

ルコトナキヤチ調査スヘシ

第十七條 仕拂請求書ニハ債主若クハ其代理人ノ氏名仕拂ヲ請求スル金額支出科目年度番號ヲ記載スヘシ但支出科目ノ同一ナルモノハ集合仕拂請求書ヲ發シ別ニ各受取人ノ金額氏名表ヲ添フルコトヲ得

（二十六勅令第二百二十四號ヲ以テ修正）
現金前渡ノ仕拂請求書ニハ前渡ヲ受クヘキ官吏ノ資格氏名前渡ヲナスヘキ金額支出科目年度番號ヲ記載スヘシ

（二十六勅令第二百二十四號ヲ以テ修正）
第十八條 仕拂請求書取扱ノ手續ハ會計規則第三十五條第三十六條仕拂命令取扱ノ例ニ依ル

（二十六勅令第二百二十四號）
第十九條 各年度ノ歳出ニ屬スル仕拂請求書ヲ發スルハ毎年度三月三十一日ヲ限リトス

（二十六勅令第二百二十四號）
第二十條 現金前渡ヲ受タル官吏監督ノ規則ハ大藏大臣所管大臣ニ協議シテ之ヲ定ムヘシ

第二十一條 金庫案内仕拂請求書集合仕拂請求書若クハ金庫所在地外ニ於テ仕拂ヲ要スル仕拂請求書ヲ受ケタルトキハ其ノ仕拂請求書合式ニシテ且豫算各項ノ金額及仕拂元受高ニ超過セサルトキハ仕拂ヲナスヘシ

前項ノ外金庫ニ於テ仕拂請求書ニ對シテ仕拂ヲ執行シ又ハ之ヲ拒絶スルハ會計規則第四十三條第四十五條第二項第四十六條仕拂命令取扱ノ例ニ依ル

（二十六勅令第二百二十四號ヲ以テ修正）
第二十二條 毎年度内ニ收入スヘキ權利ヲ得テ當該年度内ニ收入濟トナラサルモノハ收入未濟トシテ順次翌年ニ繰越シ現ニ收入ヲナシタル年度ノ歳入ニ組入ルヘシ

第二十三條 毎年度内ニ仕拂ヲナスヘキ義務ヲ生シ當該年度内ニ仕拂請求書ヲ發セサルモノハ支出未濟トシテ順次翌年度ニ繰越シ當該年度經過後滿五箇年内ハ支出ノ請求アル毎ニ仕拂請求書ヲ發スヘシ但支出未濟ノ繰越額ハ支出濟額ト合シテ豫算定額ヲ超過スルヲ得ス

（二十六勅令第二百二十四號）
第二十四條 毎年度内ニ於テ仕拂請求書ヲ發シ金庫ニ於テ仕拂ノ請求ヲ受ケサルモノハ仕拂未濟トシテ之ニ相當スル資金ヲ翌年度ニ繰越シ第二十一條ノ規程ニ依リ仕拂ヲナスヘシ

第二十五條 前條ノ仕拂未濟金ハ會計法第十八條ニ依リ仕拂義務ヲ免レタルトキハ其期滿免除トナリタル年度ノ一般ノ歳入ニ組入ルヘシ

第二十六條 收入官吏ハ其取扱タル收入ヲ記入スル帳簿ノ結果ニ依リ毎月収入報告書ヲ調製シ参照書類ヲ添ヘ翌月十五日マテニ所管大臣ヲ經由シテ之ヲ大藏大臣ニ送付スヘシ但作業支部局ノ收入官吏ハ其收入報告書ヲ翌月七日マテニ作業事務本局ノ收入官吏ニ送付スヘシ

第二十七條 作業事務本局ノ收入官吏ハ作業全部ノ收入合計表ヲ調製シ諸收入官吏ノ收入報告書ニ添付シ前條ノ手續ニ依リ之ヲ大藏大臣ニ送付スヘシ

第二十八條 金庫出納役ハ毎月仕拂請求書受領濟額報告書ヲ調製シ其ノ翌月中ニ大藏省ニ送付スヘシ

（二十六勅令第二百二十四號ヲ以テ修正）
第二十九條 第四章 資本

第三十條 資本ハ總テ價格ヲ付シテ計算スヘシ

第三十一條 資本ノ價格ハ左ノ方法ニ依テ之ヲ定ム

第十二編 作業及鐵道會計規則

四九

- 一 土地ハ近隣地ノ賣買價格五箇年間ノ平均ニ依ル近隣ニ比較スヘキ相當ノ土地ナキトキハ五人以上ノ評價人ヲ定メ其評定價格ノ平均ニ依ル
- 二 建物鐵道其他築造道路船舶機械器具其他ノ物品ハ建築費又ハ購入價格ニ依ル建築費又ハ購入價格ノ不明ナルモノハ物件ノ輕重ニ依リ二人以上ノ評價人ヲ定メ其評定價格ノ平均ニ依ル
- 三 材料素品器械ノ運轉用品ハ購入價格ニ依ル
- 四 生産品ハ生産費ニ依ル但賣買ノ契約濟トナリタルモノハ其賣渡代價ニ依ル
- 第三十二條 土地ノ價格ハ前條ノ方法ニ依リ毎五年ニ之ヲ改定スヘシ
- 第三十三條 公衆ノ用ニ供スル鐵道ノ固定資本ハ毎五年ニ五人以上ノ評價人ヲ定メ其評定價格ノ平均ニ依リ之ヲ改正スヘシ
- 第三十四條 建物公衆ノ用ニ供セサル鐵道其他築造道路船舶機械器具其他ノ物品ハ永遠保存品ヲ除キ總テ保存期限ヲ定メ其期限ニ應シテ毎年價格ヲ遞減スヘシ
- 前項中固定資本ニ屬スル物件ヲ修理シタルトキハ其修理費ヲ以テ現年ノ價格ニ加ヘ再ヒ保存年限ニ應シテ價格ヲ遞減スヘシ
- 第三十五條 前條ノ物件ヲ修理シタルトキハ保存期限ヲ改定シテ之ヲ延フルコトヲ得
- 第三十六條 材料素品器械ノ運轉用品ノ年度内未消費ニ屬スルモノハ市價ノ低落又ハ毀損變質等ニ由リ其價格ヲ減スルトキハ毎年度ノ終リ當時ノ市價ニ依リ其價格ヲ改定スヘシ
- 第三十七條 生産品ノ年度内未販賣ニ屬スルモノ需用ノ變動生産法ノ改良又ハ毀損變質等ニ由リ其價格ヲ減シ實際ノ市價生産費以下トナルトキハ毎年度ノ終リ當時ノ市價又ハ當年度ノ生産費ニ依リ其

價格ヲ改定スヘシ

第三十八條 材料素品器械ノ運轉用品生産品其他ノ物品ニシテ不用ニ歸シタルモノハ總テ損失トシ其價格ヲ削除シテ不用物品ニ組入レ之ヲ賣拂フヘシ

第五章 受拂勘定

第三十九條 受入ニ屬スルモノ左ノ如シ

- 第一 歳入ノ收入濟額
- 第二 收入未濟額
- 第三 据置運轉資本ニ屬スル現金ノ持越高
- 第四 總生産品ノ價格
- 第五 總材料及素品ノ價格
- 第六 總機械運轉用品ノ價格
- 第七 作業場用總備品ノ價格
- 第八 代價支出濟未收物品ノ價格
- 第四十條 拂出ニ屬スルモノ左ノ如シ
 - 第一 歳出ノ支出濟額(二十六勅令第二百二十四號ヲ以テ支出調定濟額ヲ支出濟額ト改ム)
 - 第二 支出未濟額
 - 第三 据置運轉資本額
 - 第四 賣拂代價收入濟物品ノ價格

第十二編 作業及鐵道會計規則

第十二編 作業及鐵道會計規則

第五 賣拂代價收入未済既出物品ノ價格

第六 消費シタル材料及素品ノ價格

第七 消費シタル機械運轉用品ノ價格

第八 損失ニ歸シタル物品ノ價格

第九 損失金

第四十一條 作業所ハ受入ノ總額ヨリ拂出ノ總額ヲ控除シ殘餘アルトキハ作業ノ益金トシテ其事業ヲ營ミタル年度ノ一般ノ歳入ニ納付スヘシ

第六章 工事及物件ノ賣買貸借

第四十二條 工事及物件ノ賣買貸借ニ關スル規則ハ總テ會計規則第七章ノ例ニ依ル

第七章 出納官吏

第四十三條 出納官吏ニ關スル規則ハ第四十四條ニ定メタル期限ノ外總テ會計規則第八章ノ例ニ依ル

第四十四條 會計規則第九十五條ノ例ニ依リ收入官吏ノ會計検査院ニ提出スヘキ計算書ヲ事務管理廳若クハ特ニ監督ノ任アル官吏ニ送付スルハ毎年度經過後二箇月以内トス(二十六年勅令第二百廿四號ヲ以テ本條中ヲ改正ス)

第八章 帳簿

第四十五條 大藏省ハ各作業會計ノ主計簿ヲ備ヘ歳入ノ豫算額確定額收入濟額收入未済額歳出ノ豫算額仕拂元受高支出濟額ヲ登記スヘシ(二十六年勅令第二百二十四號ヲ以テ條中ヲ削除)

第四十六條 作業所ハ日記簿原簿補助簿ヲ備ヘ其事業ニ關スル一切ノ計算ヲ登記スヘシ

第四十七條 收入官吏ハ收入簿ヲ備ヘ歳入ノ豫算額確定額收入濟額收入未済額ヲ登記スヘシ

第四十八條 金庫出納役ハ支出簿ヲ備ヘ歳出ノ豫算仕拂請求書受領濟額ヲ登記シ仕拂元受高差引簿ヲ備ヘ仕拂元受高仕拂請求書受領濟額仕拂額ヲ登記スヘシ(二十六年勅令第二百二十四號ヲ以テ改正)

第四十九條 收入官吏現金前渡ヲ受タル官吏現金ヲ出納スル場合ニ於テハ現金出納簿ヲ備ヘ其出納ヲ登記スヘシ

第九章 雜則

第五十條 本規則ニ依リ當該官吏ヨリ會計検査院ニ提出スル所ノ證明書ニ關スル規程様式ハ會計検査院ニ於テ之ヲ定ムヘシ(二十六年勅令第二百二十四號ヲ以テ出納官吏ヲ當該官吏ト改ム)

第五十一條 前條ノ外本規則ニ掲グル諸書類帳簿ノ様式ハ大藏大臣之ヲ定ムヘシ

第五十二條 此規則ニ於テ作業所トハ造幣局、印刷局、製鐵所、電信燈臺用品製造所、廣島鑛山、東京砲兵工廠、大坂砲兵工廠、千住製絨所及鐵道ヲ謂フ

第五十三條 此規則ニ於テ作業事務長トハ鐵道局長、造幣局長、印刷局事務長、製鐵所長官、東京砲兵工廠提理、大阪砲兵工廠提理、千住製絨所長ヲ謂フ(二十六年勅令第二百二十四號ヲ以テ鐵道局長官ヲ鐵道局長ト改ム)

電信燈臺用品製造所及廣島鑛山ニ於テハ其事務管理長ヲ以テ作業事務長トス

第五十四條 本規則ハ明治二十三年度ヨリ施行ス

●事業公債及鐵道公債特別會計法 (三十二年法律第十三號)

第一條 鐵道敷設法、事業公債條例、北海道鐵道敷設法及臺灣事業公債法ニ依ル公債金ノ會計ハ特別トシ一般ノ歳入歳出ト區分スヘシ(三十二年法律第七十八號ヲ以テ改正)

第二條 公債募集金ヲ使用セントスルトキハ其ノ金額ヲ一般ノ歳入ニ組入レ一般ノ歳出トシテ之ヲ拂

第十二編 事業公債及鐵道公債特別會計法

出スヘシ

但シ償金特別會計資金ノ一時繰替金ヲ返償スル場合ニハ直ニ償金特別會計ノ資金ニ繰入スヘシ

第三條 公債募集金ノ毎年度内ニ使用セサルモノハ翌年度へ繰越スヘシ

第四條 公債ヲ以テ支辨スル事業完了ノ上公債募集金ニ剩餘アルトキハ一般ノ繰入ニ繰入スヘシ

第五條 政府ハ毎年公債特別會計ノ繰入歳出豫算ヲ調整シ歳入歳出ノ總豫算ト共ニ帝國議會ニ提出スヘシ

附則

第六條 本法ハ明治三十二年度ヨリ施行ス

第七條 鐵道公債會計法ハ明治三十一年度限り廢止ス

●官設鐵道用品資金會計法 (二十六年法律第二號)

第一條 鐵道用品ヲ購入貯藏シ官設鐵道運輸營業並ニ建設事業ノ需用ニ應スル爲メ官設鐵道用品資金ヲ置キ特別會計ヲ立テシム

第二條 官設鐵道用品資金ハ官設鐵道會計ノ據置運轉資本ノ内金百八十萬圓ヲ以テ之ニ充ツ

第三條 官設鐵道用品資金ヲ以テ購入貯藏シタル物品ノ製作改製及修理ノ費用ハ該資金ヲ以テ之ヲ支辨スヘシ

第四條 官設鐵道用品資金會計ニ屬スル諸品ノ賣拂價格ハ其ノ自然ノ損減歩合、製作、改製及修理費並ニ其ノ附屬費用及購入ニ附隨スル諸費ヲ其ノ購入原價ニ加算シテ之ヲ定ムヘシ

第五條 官設鐵道用品資金特別會計ノ決算上該金額ニ過剩ヲ生スルトキハ其ノ過剩金ヲ同年度一般ノ

歳入ニ編入スヘシ

第六條 政府ハ毎年官設鐵道用品資金特別會計ノ歳入歳出豫算ヲ調整シ歳入歳出ノ總豫算ト俱ニ之ヲ帝國議會ニ提出スヘシ

第七條 官設鐵道用品資金特別會計ノ收入支出ニ關スル規程ハ別ニ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第八條 本法ハ明治二十七年年度ヨリ施行ス

●官設鐵道用品資金會計規則 (二十六年勅令第七十一號)

第一條 官設鐵道用品資金ハ貯藏物品賣拂代金並ニ附屬雜收入ヲ以テ歳入トシ物品歳入代製作費改製費修理費並ニ附屬諸費ヲ以テ歳出トス (二十七年勅令第九十一號ヲ以テ條中改正)

第二條 官設鐵道用品資金ノ歳出ハ實際ノ歳入額及資金ニ屬スル現金ノ持越高ヲ以テ支辨スヘシ

第三條 歳入歳出ノ豫算決算ハ作業及鐵道會計規則第二章ノ例ニ依ル

第四條 收入支出ノ取扱ハ作業及鐵道會計規則第三章ノ例ニ依ル

第五條 貯藏物品ノ購入原價ニシテ自然ノ腐朽又ハ毀損變質減量等ニ依リ其價格減少シタルトキハ毎年度ノ終リニ於テ之ヲ改定スヘシ

第六條 貯藏物品ノ損減歩合ハ自然ノ腐朽又ハ不用ニ歸シタルニ依リ生シタル既往ノ損減高及亡失毀損變質減量等ヲ參酌シテ之ヲ定ムルモノトス

第七條 受拂勘定ノ受入ニ屬スルモノ左ノ如シ

第一 歳入ノ收入濟額

第二 收入未濟額

第十二編 官設鐵道用品資金會計規則

五五

第十二編 官設鐵道用品資金會計規則

第三 資金ニ屬スル現金ノ持越高

第四 總貯藏物品ノ價格

第五 代價支出済未收物品ノ價格

第八條 受拂勘定ノ排出ニ屬スルモノ左ノ如シ

第一 歳出ノ支出済額(二十六年勅令第二百二十七號ヲ以テ本項改正)

第二 支出未済額

第三 資金額

第四 前受金

第五 代價收入済物品ノ價格

第六 代價收入未済既出物品ノ價格

第七 損失ニ歸シタル物品ノ價格

第八 損失金

第九條 受入ノ總額ヨリ排出ノ總額ヲ控除シ過剩アルトキハ益金トシテ之ヲ同年度ノ一般ノ歳入ニ納付スヘシ

第十條 物品ノ買入不用物品賣拂ノ規程ハ會計規則第七章ノ例ニ依ル

第十一條 出納官吏ニ關スル規則ハ作業及鐵道會計規則第七章ノ例ニ依ル

第十二條 帳簿ニ關スル規則ハ作業及鐵道會計規則第八章ノ例ニ依ル

第十三條 本規則ニ依リ當該官吏ヨリ會計検査院ニ提出スル所ノ證明書ニ關スル規程様式ハ會計検査

院ノ定ムル所ニ依ル(二十六年勅令第二百二十七號ヲ以テ條中改正)

第十四條 前條ノ外本規則ニ掲グル諸書類帳簿ノ様式ハ大藏大臣之ヲ定ムヘシ

第十五條 本規則ハ明治二十七年ヨリ施行ス

●官設鐵道用品ヲ官設鐵道用品資金ヨリ買入ル、其前金拂概算渡方(二十九年法律第二號)

官設鐵道用品ヲ官設鐵道用品資金會計ヨリ買入ル、トキハ前金拂並概算渡ヲ爲スコトヲ得

●北海道官設鐵道用品資金會計法(三十二年法律第十號)

第一條 北海道官設鐵道ノ用品ヲ買入貯藏シ其ノ運輸營業並建設事業ノ需用ニ應スル爲北海道官設鐵道用品資金ヲ置キ特別ノ會計ヲ立テシム

第二條 北海道官設鐵道用品資金ハ五十萬圓トシ必要ニ應シ漸次一般會計ヨリ繰入ス

第三條 北海道官設鐵道用品資金ノ會計ニ關シテハ明治二十六年法律第二號官設鐵道用品資金會計法ヲ適用ス

附則

此ノ法律ハ明治三十二年度ヨリ施行ス

●貨幣整理資金特別會計(三十年法律第十七號)

第一條 一圓銀貨幣及流通不便ノ貨幣引揚交換ノ爲貨幣整理資金ヲ置キ其ノ歳入歳出ハ一般會計ト區分シ特別ノ會計ヲ設置ス

第二條 明治三十年度以後造幣局特別會計作業益金ハ貨幣整理資金ニ充ツヘシ

第十二編 北海道官設鐵道用品資金會計法

第十二編 貨幣整理資金特別會計規則

第三條 交換ノ上引揚タル一圓銀貨幣及流通不便ノ貨幣ヲ地金トシテ賣却スルトキハ隨意契約ニ依ル

コトヲ得

第四條 毎會計年度ニ於テ貨幣整理資金特別會計ノ決算上該資金額ニ過剩ヲ生スルトキハ其ノ過剩金ヲ該資金ニ編入スヘシ

第五條 政府ハ毎年貨幣整理資金特別會計ノ歳入歳出豫算ヲ調製シ帝國議會ニ提出スヘシ

第六條 貨幣整理資金ノ收入支出ニ關スル規定ハ別ニ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

●貨幣整理資金特別會計規則 (三十年勅令第二百二十八號)

第一條 貨幣整理金ハ地金賣拂代ヲ以テ歳入トシ貨幣交換金、貨幣交換及地金賣拂ニ伴フ賄費ヲ以テ歳出トス(三十一年四月勅令第)

七十號ヲ以テ改正)

第二條 歳入歳出ノ豫定計算書及決定計算書ハ大藏大臣之ヲ調製シ帝國議會ニ提出ノ手續ヲ爲スヘシ

第三條 各年度ニ於テ歳入ヲ收入シ歳出ノ任拂命令ヲ發スルハ毎年度三月三十一日ヲ限リトス

第四條 大藏大臣ハ其ノ年三月三十一日ニ終リタル會計年度ノ受拂勘定表ヲ調製シ歳入歳出ノ豫定計

算書ニ添付スヘシ

第五條 受拂勘定ノ受入ニ屬スルモノ左ノ如シ

第一 歳入ノ收入濟額

第二 收入未濟額

第三 資金ニ屬スル現金ノ持越高

第四 造幣局作業益金ノ受入額

第五 總地金ノ價格

第六條 受拂勘定ノ拂出ニ屬スルモノ左ノ如シ

第一 歳出ノ支出濟額

第二 資金額

第三 代價收入未濟地金ノ價格

第四 代價收入未濟地金ノ價格

第七條 受入ノ總額ヨリ拂出ノ總額ヲ控除シ過剩アルトキハ資金ニ編入シ不足ヲ生スルトキハ資金ノ

減額ト爲スヘシ

第八條 此ノ規則ニ規定セザルモノハ總テ一般會計規則ノ各條項ヲ適用ス

●紙幣交換基金特別會計法 (二十三年法律第二十四號)

第一條 從來政府ニ於テ發行シタル紙幣ヲ廢止スル爲メ紙幣交換基金ヲ置キ漸次之ヲ交換セシム

第二條 政府所有ノ準備金壹千萬圓ハ之ヲ紙幣交換基金ニ組入ルヘシ

政府ハ金貳千貳百萬圓ヲ限リ日本銀行ヨリ借入ヲ爲シ前項ノ交換基金ニ組入ルヘシ (二十三年法律

第五十六號ヲ

以テ本項追加)

第三條 紙幣交換基金ノ會計ハ特別トシテ一般ノ歳入歳出ト區分スヘシ

第四條 毎年度ニ於テ紙幣交換基金ノ交換未濟トナリタルモノハ漸次之ヲ翌年度ヘ繰越スヘシ

第五條 紙幣交換基金ノ收入支出ニ關スル規則ハ別ニ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第六條 本法ハ明治二十三年四月一日ヨリ施行ス

第十二編 紙幣交換基金特別會計法

●鎖店銀行紙幣交換基金特別會計法 (二十三年法律第二十五號)

第一條 國立銀行條例第九十八條ニ於テ定メタル鎖店銀行紙幣交換基金ノ會計ハ特別トシテ一般ノ歳入歳出ト區分スヘシ

第二條 毎年度ニ於テ鎖店銀行紙幣交換基金ノ交換未済トナリタルモノハ漸次之ヲ翌年度ヘ繰越スヘシ

第三條 鎖店銀行紙幣交換基金ノ收入支出ニ關スル規則ハ別ニ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第四條 本法ハ明治二十三年四月一日ヨリ施行ス

第五條 本法ハ平穩鎖店ヲ爲シ又ハ營業滿期ニ至リタル國立銀行紙幣並ニ營業滿期前ニ特別處分ヲ爲シタル國立銀行紙幣交換基金ノ會計ニモ之ヲ適用ス (二十八年法律第十六號及二十九法律第十二號ヲ以テ追加)

●整理公債條例ニ依リ募集又ハ償還スル公債金政府紙幣交換基金鎖店銀行紙幣交換基金特別會計ノ規程

銀行紙幣交換基金特別會計規則 (二十三年勅令第六十八號)

整理公債條例ニ依リ募集又ハ償還スル公債金政府紙幣交換基金鎖店銀行紙幣交換基金特別會計ノ規程ハ左ニ掲ケルモノノ外總テ明治二十二年勅令第六十號會計規則ニ準據スヘシ

第一 大藏大臣ハ毎年公債整理金政府紙幣交換基金鎖店銀行紙幣交換基金ノ歳入歳出豫定計算書ヲ調製シ歳入歳出總決算ト共ニ帝國議會ニ提出シ手續ヲナスヘシ

第二 大藏大臣ハ公債整理金政府紙幣交換基金鎖店銀行紙幣交換基金ノ歳入歳出決定計算書ヲ調製シ歳入歳出總決算ト共ニ帝國議會ニ提出シ手續ヲナスヘシ

第三 紙幣交換基金ハ仕拂命令ヲ發シテ現金ヲ日本銀行ニ前渡スルコトヲ得此場合ニ於ケル仕拂ノ證明ハ明治二十三年勅令第二十號ニ準據スヘシ

第四 毎年度ニ於テ仕拂命令ヲ發スルハ毎年三月三十一日ヲ限リトス

第五 收入官吏ノ會計檢査院ニ提出スヘキ計算書ヲ大藏大臣ニ送付スルハ毎年度經過後二箇月以内トス (二十六年勅令第二百五號ヲ以テ本項中刪除)

第六 大藏省ハ公債整理金政府紙幣交換基金鎖店銀行紙幣交換基金會計ノ主計簿ヲ備フヘシ

●造幣局据置運轉資本増加ニ關スル法律 (三十二年法律第十一號)

造幣局据置運轉資本ニ屬スル金地金ノ價格ヲ造幣價格ニ改算シ其ノ増加金額ハ之ヲ造幣局据置運轉資本ニ加フヘシ

●陸軍作業會計法 (二十三年法律第十八號)

第一條 東京砲兵工廠大阪砲兵工廠及千住製絨所ハ其事業ヲ經營スル爲メ固定資本据置運轉資本ヲ置キ作業上ノ收入及其附屬雜收入ハ作業ノ費用ニ充ルコトヲ許シ特別ノ會計ヲ立テシム

第二條 東京砲兵工廠大阪砲兵工廠ニ於テハ從來使用シ及將來増加スル所ノ機械其他重要ナル器具ヲ以テ固定資本トシ從來ノ營業資本額ヲ以テ据置運轉資本トス

第三條 東京及大阪砲兵工廠ハ職工人夫ノ諸資材料素品及機械運轉用品ノ購入費機械器具ノ維持修理及補充費工場ノ雜費並ニ損失金ヲ作業ノ歳出トス

千住製絨所ハ俸給諸旅費應發生産品販賣ノ諸費職工人夫ノ諸資材料素品及機械運轉用品ノ購入費

第十二編 陸軍作業會計法

土地建物ノ維持修理機械器具ノ維持修理及補充費工業費ノ雜費並ニ損失金ヲ作業ノ歳出トス
第四條 各作業所特別會計ノ歳出額ハ豫算定額内ニ於テ實際ノ歳入及据置運轉資本ノ合計額ヲ超過ス

ルヲ許サス
第五條 作業所ノ純益及固定資本ニ屬スル物件ノ賣拂代金ハ總テ一般ノ歳入ニ編入スヘシ

第六條 政府ハ毎年各作業所特別會計ノ歳入歳出豫算ヲ調製シ歳入歳出ノ總豫算ト俱ニ之ヲ帝國議會ニ提出スヘシ

第七條 豫算外ニ軍用品ノ製作修理ヲ要スル場合ニ於テ其費用ヲ補フ爲メ各作業所ノ歳出豫算ニ豫備費ヲ設クルコトヲ得

第八條 各作業所ニ於テ機械器具材料素品及機械運轉用品ヲ外國ヨリ買入ル、トキハ前金拂ヲ爲スコトヲ得

第九條 各作業特別會計ノ收入支出ニ關スル規程ハ別ニ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第十條 本法ハ明治二十三年度ヨリ施行ス其帝國議會ニ關涉スルモノハ帝國議會開會後ノ會計年度ヨリ施行ス

●軍艦水雷艇補充基金特別會計法 (三十二年法律第七十九號)

第一條 軍艦水雷艇補充基金ヲ置キ其ノ歳入歳出ハ一般會計ト區分シ特別會計ヲ設置ス

第二條 價金特別會計資金ノ内三千萬圓ハ軍艦水雷艇補充基金ニ組入ルヘシ

第三條 明治三十七年度以後各前年度末日ニ於テ艦籍ニ現在スル艦艇製造費ノ左ニ掲クル遞減比率ニ相當スル金額ヲ毎年度一般會計ヨリ軍艦水雷艇補充基金ニ組入ルヘシ

防護軍艦 百分ノ三九
無防護軍艦 百分ノ五四

水雷艇 百分ノ六五

第四條 軍艦水雷艇補充基金ニ前條ノ組入ヲ爲スニ當リ艦艇製造費ノ左ニ掲クル遞減年期ヲ過キタル艦艇ニ對シテハ翌年度ヨリ其ノ組入ヲ停止シ爾後艦艇ノ艦籍ヨリ除カラルモノアルトキ其ノ遞減殘額ニ相當スル金額ハ翌年度ニ於テ一般會計ヨリ基金ニ組入ルヘシ

防護軍艦 二十五箇年
無防護軍艦 十八箇年

水雷艇 十五箇年

第五條 軍艦水雷艇補充基金ハ大藏省預金ニ寄託シ其ノ利子ハ之ヲ基金ニ編入スヘシ

第六條 軍艦水雷艇補充基金ハ軍艦水雷艇補充費ノ財源ニ充ツ但シ元資金三千萬圓ハ之ヲ消費スルコトヲ得ス

第七條 政府ハ毎年軍艦水雷艇補充基金特別會計ノ歳入歳出豫算ヲ調製シ歳入歳出ノ總豫算ト共ニ帝國議會ニ提出スヘシ

●鎮守府造船材料資金會計法 (二十三年法律第十九號)

第一條 鎮守府造船工場ニ於テ船舶ヲ製造修理スル爲メ必要スル材料貯蓄ノ資本トシテ造船材料資金ヲ置キ特別ノ會計ヲ立テシム

第二條 造船材料資金ハ從來積須賀鎮守府小野濱造船所ニ備ヘタル營業資本ヲ以テ之ニ充ツ

第十二編 鎮守府造船材料資金會計法

第十二編 鎮守府造船材料資金會計法規則

六四

第三條 造船材料資金ヲ以テ貯蓄シタル材料ヲ使用スルトキハ海軍省所管經費ヲ以テ之ヲ購入スヘシ
第四條 造船材料資金ヲ以テ貯蓄シタル材料ノ損減ハ豫メ歩合ヲ定メテ材料原價ニ加算スヘシ
第五條 毎會計年度ニ於テ造船材料資金特別會計ノ決算上該資金額ニ過剩ヲ生スルトキハ其過剩金ヲ
同年度一般ノ歳入ニ編入スヘシ

第六條 政府ハ毎年造船材料資金特別會計ノ歳入歳出豫算ヲ調製シ歳入歳出ノ總豫算ト俱ニ之ヲ帝國
議會ニ提出スヘシ

第七條 造船材料資金ノ收入支出ニ關スル規定ハ別ニ勅令ヲ以テ之ヲ定ム
第八條 本法ハ明治二十三年度ヨリ施行ス其帝國議會ニ關涉スルモノハ帝國議會開會後ノ會計年度自
ヨリ施行ス

●鎮守府造船材料資金會計規則 (二十三年勅令第三十四號)

第一條 造船材料資金ハ貯蓄材料賣拂代金ヲ以テ歳入トシ材料購入代、製作費、改製費、修理費並ニ其
附屬諸費及損失金ヲ以テ歳出トス(二十七年勅令第四百十八號ヲ以テ條中ヲ改正ス)
第二條 造船材料資金ノ歳出ハ實際ノ歳入額及資金ニ屬スル現金ノ持越高キヲ以テ支辨スヘシ
第三條 歳入歳出ノ豫算決算ハ作業及鐵道會計規則第二章ノ例ニ依ル
第四條 收入支出ノ取扱ハ作業及鐵道會計規則第三章ノ例ニ依ル(二十六年勅令第四十八號ヲ以テ本條但書削除)
第五條 貯蓄材料ノ原價ハ購入代價製作費、改製費、修理費並ニ其附屬諸費ヲ以テ計算スヘシ但造船法
ノ改良市價ノ低落又ハ毀損等ニ依リ其實價減少シタルトキハ毎年度ノ終リ當時ノ市價ニ依リ其價格
ヲ改定スヘシ(二十四年勅令第九十五號及二十七年勅令第四百十八號ヲ以テ改正)

第六條 貯蓄材料ヲ工場ニ使用スルトキハ原價ニ損減歩合ヲ加ヘテ之ヲ賣拂フヘシ(二十四年勅令第
百九十五號ヲ以テ改正)

第七條 貯蓄材料ノ損減歩合ハ前年度及前々年度ノ損減高ヲ參酌シテ之ヲ定ム(二十四年勅令第九
十五號ヲ以テ改正)

第八條 歳入額收入未済額資金ニ屬スル現金ノ持越高及總材料ノ價格代價支出未済未收物品ノ價格ヲ
以テ受入トシ歳出額支出未済額資金額賣拂代價收入済材料ノ價格損失ニ歸シタル材料ノ價格及損失
金ヲ以テ拂出トシ受入ノ總額ヨリ拂出ノ總額ヲ控除シ過剩アルトキハ造船材料賣拂益金トシテ之ヲ
同年度ノ一般ノ歳入ニ納付スヘシ

第九條 材料ノ買入不川材料賣拂ノ規程ハ總テ會計規則第七章ノ例ニ依ル
第十條 出納官吏ニ關スル規則ハ總テ作業及鐵道會計規則第七章ノ例ニ依ル

第十一條 帳簿ニ關スル規則ハ總テ作業及鐵道會計規則第八章ノ例ニ依ル(二十六年勅令第四
十八條但書削除)

第十二條 本規則ニ依リ當該官吏ヨリ會計検査院ニ提出スル所ノ證明書ニ關スル規程様式ハ會計検査
院ニ於テ之ヲ定ムヘシ(二十六年勅令第二百二十五號ヲ以テ出納官吏ニテ當該官吏ト改ム)

第十三條 前條ノ外本規則ニ掲グル諸書類帳簿ノ様式ハ大藏大臣之ヲ定ムヘシ
第十四條 本規則ハ明治二十三年度ヨリ施行ス

●在外海軍用地租稅前金拂ノ件 (二十四年勅令第二十四號)

海軍省所管經費中左ノ費目ハ前金拂ヲ爲スコトヲ得
在外海軍用地租稅

●陸海軍出師準備ノ物品ハ會計検査院法ヲ適用セズ

第十二編 在外海軍用地租稅前金拂ノ件
六五

陸海軍出師準備ニ關スル物品ニ對シテハ陸海軍大臣其責ニ任シ會計検査院法ヲ適用スルノ限ニ在ラス

●官立學校及圖書館會計法 (二十三年法律第二十六號)

第一條 文部省直轄學校及圖書館並ニ農商務省所管東京農林學校ハ資金ヲ所有シ政府ノ支出金資金ヨリ生スル收入授業料寄附金及其他ノ收入ヲ以テ其歲出ニ充ツルコトヲ許シ特別ノ會計ヲ立テシム

第二條 學校及圖書館ノ資金ハ從來所有スル蓄積金政府ヨリ交付シ若クハ他ヨリ寄附シタル動産不動産及歲入殘餘ヨリ成ルモノトス

第三條 教員事務員ノ俸給諸給旅費器具器械圖書標本授業費試驗費生徒ニ關スル諸費事務處費營繕費雜支出其他寄付者ノ指定シタル費途ヲ以テ學校及圖書館ノ歲出トス

第四條 學校及圖書館ノ寄付金ニシテ特ニ用途ヲ指定シタルモノハ其約束ニ從ヒ之ヲ使用シ其會計ハ別ニ之ヲ整理スヘシ

第五條 政府ハ毎年各學校及圖書館ノ歲入歲出豫算ヲ調製シ歲入歲出ノ總豫算ト俱ニ之ヲ帝國議會ニ提出スヘシ

第六條 學校及圖書館ノ收入支出ニ關スル規程ハ別ニ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第七條 本法ハ明治二十三年度ヨリ施行ス其帝國議會ニ關涉スルモノハ帝國議會開會後ノ會計年度ヨリ施行ス

●官立學校及圖書館會計規則 (二十三年勅令第五十三號)

第一章 資金

第一條 資金ヲ分テ左ノ二種トス

第一 維持資金

第二 特別資金

維持資金ヨリ生スル利子其他ノ收入ハ學校一般ノ經費ニ充ツルモノトス

特別資金ヨリ生スル利子其他ノ收入ハ特定ノ用途ニ充テ其殘餘ハ該資金ノ増殖ニ充ツルモノトス

第二條 資金ハ所管大臣之ヲ管理スヘシ

第三條 資金ハ之ヲ支消スルコトヲ得ス但特別資金ニ限リ用途指定者ノ同意ヲ以テ元金ヲ使用スルコトヲ得

第四條 資金ニ屬スル現金ハ總テ預金局ニ寄托スヘシ

第五條 資金ニ屬スル現金ヲ以テ不動産公債證書其他ノ證券ニ換ヘ又ハ資金ニ屬スル不動産公債證書

其他ノ證券ヲ離權シ又ハ他ノ不動産公債證書其他ノ證券ニ換ヘントスルトキハ所管大臣ハ大藏大臣

ト協議シテ之ヲ定ムヘシ但寄付ニ係ル不動産ハ寄付者ノ承諾ヲ得ルニアラサレハ離權スルコトヲ得ス

第六條 資金ニ屬スル現金ノ會計ハ別途ノ歲入歲出トシテ之ヲ整理スヘシ

第二章 歲入歲出

第七條 左ノ諸收入ヲ以テ學校ノ經常歲入トス

第一 政府ノ支出金

第二 授業料及試驗料

第十二編 官立學校及圖書館會計規則

第十二編 官立學校及圖書館會計規則

- 第三 寄付金
- 第四 公債證書及諸證券ノ利子又ハ配當金
- 第五 土地家屋ノ貸付料
- 第六 實驗川生産品賣拂代
- 第七 雜收入
- 第八條 左ノ諸費ヲ以テ學校ノ經常歲出トス
 - 第一 教員事務員ノ俸給諸給及旅費
 - 第二 學用器具器械圖書及標本費
 - 第三 授業費及試驗費
 - 第四 獎學費
 - 第五 生徒費
 - 第六 事務所費
 - 第七 營繕費
 - 第八 雜支出
- 第九條 左ノ諸收入ヲ以テ圖書館ノ經常歲入トス
 - 第一 政府ノ支出金
 - 第二 書籍借覽料
 - 第三 寄付金

- 第四 公債證書及諸證券ノ利子又ハ配當金
 - 第五 土地家屋ノ貸付料
 - 第六 雜收入
 - 第十條 左ノ諸費ヲ以テ圖書館ノ經常歲出トス
 - 第一 事務員ノ俸給諸給及旅費
 - 第二 圖書費
 - 第三 閱覽室費
 - 第四 事務所費
 - 第五 營繕費
 - 第六 雜支出
 - 第十一條 經常歲出ハ經常歲入ヲ以テ之ヲ支辨スヘシ臨時ノ歲出ニ充ツル所ノ財源ハ其都度之ヲ定ム
 - 第三章 豫算決算
 - 第十二條 歳入歳出豫定計算書ハ所管大臣之ヲ調製シ前年度八月三十一日マテニ各省豫定經費要求書ト俱ニ之ヲ大藏大臣ニ送付スヘシ(二十六年勅令第二百二十六號ヲ以テ六月三十日ヲ八月三十一日ト改ム)
 - 第十三條 所管大臣ハ其年三月三十一日現在ノ資金明細目錄ヲ調製シ毎年度ノ豫算ニ添付スヘシ
 - 第十四條 歳入歳出ノ決定計算書ハ所管大臣之ヲ調製シ翌年度八月三十一日マテニ之ヲ大藏大臣ニ送付スヘシ
- 學校長圖書館長又ハ其ノ支部長ハ會計検査院ニ證明ノ爲メ毎年度歳入確定額計算書ヲ調製シ證書

第十二編 官立學校及圖書館會計法

類ヲ添へ年度經過後二箇月以内ニ歳入事務管理廳ニ送付シ歳入事務管理廳ハ之ヲ會計検査院ニ送付スヘシ
(二十六年勅令第二百二十六號ヲ以テ本項以下三項追加)
 學校長圖書館長又ハ其支部長ハ會計検査院ニ證明ノ爲メ毎月支出ノ計算書ヲ調製シ證憑書類ヲ添へ
 翌月十五日マテニ其ノ所管大臣ニ送付シ所管大臣ハ之ヲ會計検査院ニ送付スヘシ
 本條第二項第三項ノ計算書ハ特ニ所管大臣ヨリ委任ヲ受ケタル官吏ヨリ直ニ會計検査院ニ送付セシ
 ムルコトヲ得

第十五條 歳入歳出ノ豫定計算書及決定計算書ハ款項ニ區分シ更ニ各目ニ分チ成ルヘク歳入ノ性質歳
 出ノ用途ヲ明示スヘシ(三十年勅令第二百九十號ヲ以テ條中改正)

第十六條 (三十年勅令第二百九號)
(十三號ヲ以テ削除)
 第四章 收入支出

第十七條 歳入歳出ノ豫算ハ決定ノ後所管大臣學校長若クハ圖書館長ニ命シテ之ヲ執行セシムヘシ
 所管大臣ハ學校若クハ圖書館ノ支部長ヲシテ歳出豫算ノ一部ヲ執行セシメントスルトキハ仕拂豫算
 ナリテ之ヲ命スヘシ(二十六年勅令第二百二十六號)
 仕拂豫算ニ關スル規程ハ會計規則第二章第三款ノ例ニ依ル

第十八條 學校及圖書館會計主任ノ官吏ハ收入官吏トシテ會計規則第二十五條第二十六條ノ手續ニ依
 リ學校又ハ圖書館ノ收入ヲ取扱ヒ學校長圖書館長又ハ其ノ支部長之ヲ監督スヘシ(二十六年勅令第
 二百二十六號ヲ
 以テ條
 中改正)
 第十八條ノ二 學校又ハ圖書館ハ當該年度ノ收入濟歳入額ヲ以テ仕拂元受高トシ歳出ヲ支出スルハ此

ノ仕拂元受高ヲ超過スルコトヲ得ス(二十六年勅令第二百二十六號ヲ以テ追加)

第十九條 學校長圖書館長又ハ其ノ支部長ハ經費ヲ支出スル爲メ仕拂命令官ノ責任ヲ以テ金庫ニ向ヒ
 テ仕拂請求書ヲ發スヘシ(二十六年勅令第二百二十六號ヲ以テ學校長又ハ圖書館
 長ヲ學校長圖書館長又ハ其ノ支部長ト改ム以下做之)

第二十條 學校長圖書館長又ハ其ノ支部長ハ正當債主若クハ其代理人ノ爲メニスルニアラサレハ仕拂
 請求書ヲ發スルコトヲ得ス
 在外國人學術家又ハ學術研究者ニ物品ノ購買採集若クハ實驗ヲ委託スル場合ニ於テハ其ノ委託
 ヲ受ケタル在外國人學術家又ハ學術研究者ヲ受取人トシテ仕拂請求書ヲ發シ概算ヲ以テ現金ヲ
 交付スルコトヲ得(二十六年勅令第二百二十六號ヲ以テ本項改正)
 學術試驗品標本品購入費獎學費生徒養育費事務費ニ限リ所管大臣ノ定ムル所ニ依リ身元保證金額ノ二
 倍ヲ極度トシ學校會計主任ノ官吏ニ現金ノ前渡ヲナスコトヲ得

第二十一條 所管大臣ハ前項ニ依リ現金前渡ヲナスヘキ費目及金額ヲ定メタルトキハ之ヲ大藏大臣ニ通知スヘシ
 第二十二條 學校長圖書館長又ハ其ノ支部長ハ總テ仕拂請求書ヲ發スル前其支出ハ正當ニシテ必要ナ
 ルヲ調査シ其金額ヲ算定シ又其支出ハ豫算ノ目的ニ違フコトナキヤ金額ハ豫算定額及仕拂元受高
 ニ超過スルコトナキヤ支出科目及所屬年度ヲ誤ルコトナキヤ調査スヘシ(二十六年勅令第二百二
 十六號ヲ以テ本條中ヲ
 改正)

第二十三條 學校長圖書館長又ハ其ノ支部長ハ歳出豫算明細書ニ定メタル費目ノ彼是流用ヲ要スルト
 キハ所管大臣ノ認可ヲ受ケヘシ
 第二十三條 仕拂請求書ニハ受取人ノ氏名(概算渡現金前渡ノ場合ニハ受取人ノ資格トモ)仕拂ヲ要ス

ル金額支出科目年度番號ヲ記載スヘシ但支出科目ノ同一ナルモノハ集合仕拂請求書トシテ別ニ各受
取入ノ金額氏名表ヲ添ルコトヲ得(二十六勅令第二百二十六號ヲ以テ本條中ヲ改正ス)

第二十四條 學校長圖書館長又ハ其ノ支部長ノ發シタル仕拂請求書取扱ノ手續ハ會計規則第三十五條
第三十六條仕拂命令取扱ノ例ニ依ル(二十六勅令第二百二十六號ヲ以テ本條中ヲ改正ス)

第二十五條 各年度ノ歳出ニ關スル仕拂請求書ヲ發スルハ翌年度四月三十日ヲ限リトス
第二十五條ノ二 定額戻入ニ關スル規程ハ第二十五條ノ三ニ定メタル期限ノ外總テ會計規則第六章第
三款ノ例ニ依ル(二十六勅令第二百二十六號ヲ以テ本條及次ノ一條ヲ追加ス)

第二十五條ノ三 各年度ニ屬スル定額戻入ヲ爲スハ翌年度四月三十日ヲ過クルコトヲ得ス
第二十六條 現金前渡ヲ受ケタル官吏監督ノ規則ハ大藏大臣所管大臣ニ協議シテ之ヲ定ムヘシ

第二十七條 金庫ノ案内仕拂請求書集合仕拂請求書若クハ金庫所在地外ニ於テ仕拂ヲ要スル仕拂請求
書ヲ受ケタルトキ其ノ仕拂請求書合式ニシテ且豫算各項ノ金額及仕拂元受高ニ超過セサルトキハ仕
拂ヲ爲スヘシ

前項ノ外金庫ニ於テ仕拂請求書ニ對シテ仕拂ヲ執行シ又ハ之ヲ拒絕スルハ會計規則第四十三條第四
十五條第二項第四十六條仕拂命令取扱ノ例ニ依ル(二十六勅令第二百二十六號ヲ以テ改正)

第二十八條 收入官吏ハ其收入ヲ記入スル帳簿ノ結果ニ據リ毎月收入報告書ヲ調製シ参照書類ヲ添ヘ
翌月五日マテニ所管大臣ヲ經由シテ之ヲ大藏大臣ニ送付スヘシ

第二十九條 金庫出納役ハ毎月仕拂請求書受領濟額報告書ヲ調製シ其ノ翌月中ニ大藏省ニ送付スヘシ
(二十六勅令第二百二十六號ヲ以テ改正)

第五章 年度繰越歳入殘餘

第三十條 毎年度内ニ於テ仕拂フヘキ義務ヲ生シ債主ノ支出請求ナキカ若クハ事故アリテ翌年度四月
三十日マテニ仕拂請求書ヲ發セサルモノ及仕拂請求書ヲ發シタルモ同日マテニ金庫ニ於テ仕拂請求
ヲ受ケサルモノハ支出未済又ハ仕拂未済トシテ翌年度ニ繰越シ計算ナナスヘシ

第三十一條 工事又ハ製造費ニシテ年度内ニ仕拂義務ヲ生セス仕拂請求書ヲ發スルニ至ラザリシモノ
ハ之ヲ翌年度ニ繰越スコトヲ得

第三十二條 所管大臣ハ學校又ハ圖書館ノ經費ヲ繰越サントスルトキハ年度經過後一箇月以内ニ繰越
計算書ヲ作り必要ノ参照書類ヲ添ヘ大藏大臣ノ承認ヲ經ヘシ

第三十三條 大藏大臣ハ前條繰越ヲ承認シタルトキハ之ヲ會計検査院ニ通知スヘシ
第三十四條 特ニ用途ヲ指定シタル寄付金ニシテ別途整理ヲ要スルモノ、毎年度内ニ仕拂請求書ヲ發
スルニ至ラザリシ殘額ハ總テ翌年度ニ繰越シ使用スヘシ其仕拂請求ヲ發シテ年度内ニ金庫ニ於テ仕
拂ヲ終ラザリシモノハ第三十條仕拂未済金整理ノ例ニ依ル但本條ノ支出殘額及仕拂未済金ハ寄付者
ノ同意ヲ得テ資金トナスコトヲ得

第三十五條 第三十條ニ依リ繰越シタル支出未済及仕拂未済ノ金額ニシテ會計法第十八條ニ依リ期滿
免除トナリタルモノハ總テ資金ニ組入ルヘシ

第三十六條 毎年度ノ歳入中仕拂濟額及繰越額ヲ控除シタル殘餘ハ總テ資金ニ組入ルヘシ
第六章 工事及物件ノ賣買貸借

第三十七條 工事及物件ノ賣買貸借ニ關スル規則ハ會計規則第七章ノ例ニ依ル

第十二編 官立學校及圖書館會計法

第十二編 官立學校及圖書館會計法

第七條 出納官吏ニ關スル規則ハ本條第二項ニ定メタル期限ノ外總テ會計規則第八章ノ例ニ依ル

第三十八條 出納官吏ニ關スル規則ハ本條第二項ニ定メタル期限ノ外總テ會計規則第八章ノ例ニ依ル
會計規則第九十五條ノ例ニ依リ收入官吏ノ會計検査院ニ提出スヘキ計算書ヲ事務管理廳ニ送付スルハ毎年度經過後三箇月以内トス(二十六年勅令第二百二十六號ヲ以テ改正)

第八章 帳簿

第三十九條 大藏省ハ各學校圖書館會計ノ主計簿ヲ備ヘ歳入ノ豫算額確定額收入濟額收入未濟額歳出ノ豫算額仕拂元受高支出濟額ヲ登記スヘシ(二十六年勅令第二百二十六號ヲ以テ本條中ヲ改正ス)

第四十條 收入官吏ハ收入簿ヲ備ヘ歳入ノ豫算額確定額收入濟額未濟額ヲ登記スヘシ

第四十一條 金庫出納役ハ支出簿ヲ備ヘ歳出ノ豫算額仕拂請求書受領濟額ヲ登記シ又仕拂元受高差引簿ヲ備ヘ仕拂元受高仕拂請求書受領濟額仕拂額ヲ登記スヘシ(二十六年勅令第二百二十六號ヲ以テ改正)

第四十二條 會計主任ノ官吏ハ現金出納簿ヲ備ヘ一切其取扱タル現金ノ出納ヲ登記スヘシ

第九章 雜則

第四十三條 本規則ニ依リ當該官吏ヨリ會計検査院ニ提出スル所ノ證明書ニ關スル規定様式ハ會計検査院ニ於テ之ヲ定ムヘシ(二十六年勅令第二百二十六號ヲ以テ本條中ヲ改正ス)

第四十四條 前條ノ外本規則ニ掲クル諸書類帳簿ノ様式ハ大藏大臣之ヲ定ムヘシ

第四十五條 所管大臣ハ部下ノ高等官ヲ以テ學校會計監督官トシ學校ノ會計ヲ監督セシムヘシ

第四十六條 本規則ハ明治二十三年四月會計法施行ノ日ヨリ施行ス

本規則ト相關スル命令ハ總テ本規則施行ノ日ヨリ廢止ス

●教育基金特別會計法 (三十二年法律第八十號)

第一條 教育基金ヲ置キ其ノ歳入歳出ハ一般會計ト區分シ特別會計ヲ設置ス

第二條 價金特別會計資金ノ内千萬圓ハ教育基金ニ組入ルヘシ

第三條 教育基金ハ普通教育費ニ使用ス

前項普通教育費ノ使用ニ關スル規程ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第四條 教育基金ヲ使用セントスルトキハ其ノ金額ヲ一般ノ歳入ニ組入レ一般ノ歳出トシテ拂出スヘシ但シ元金千萬圓ハ之ヲ費消スルコトヲ得ス

第五條 教育基金ハ大藏省預金ニ寄託シ其ノ利子ハ之ヲ基金ニ編入スヘシ

第六條 政府ハ毎年教育基金特別會計ノ歳入歳出豫算ヲ調製シ歳入歳出ノ總豫算ト共ニ帝國議會ニ提出スヘシ

●災害準備基金特別會計法 (三十二年法律第八十一號)

第一條 災害準備基金ヲ置キ其ノ歳入歳出ハ一般會計ト區分シ特別會計ヲ設置ス

第二條 價金特別會計資金ノ内千萬圓ハ災害準備基金ニ組入ルヘシ

第三條 災害準備基金ハ左ノ目的ニ使用ス

一 非常災害ノ爲租稅特免トナリタル場合ニ於テ生スル歳入缺損ノ補充

一 各府縣災害土木費ノ補助ニ要スル財源ノ補充

前項土木費補助ニ關スル規程ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第十二編 災害準備基金特別會計法

- 第四條 災害準備金ハ大藏省ニ寄託シ其ノ利子ハ之ヲ基金ニ編入スヘシ
- 第五條 災害準備基金千萬圓以内ニ減少シタトキハ一般會計ヨリ其ノ缺額ヲ補填スヘシ
- 第六條 政府ハ毎年災害準備基金特別會計ノ歳入歳出豫算ヲ調製シ歳入歳出ノ總豫算ト共ニ帝國議會ニ提出スヘシ

●中央備荒儲蓄金預金局預金郵便爲替金特別會計
(二十三年法律第二十一號)

- 第一條 中央備荒儲蓄金預金局預金郵便貯金預所貯金郵便爲替金ノ會計ハ特別トシテ一般ノ歳入歳出ト區分スヘシ
- 第二條 中央備荒儲蓄金ハ「預金局」ニ寄託シ其利子ハ之ヲ元金ニ編入スヘシ
- 第三條 備荒儲蓄法ニ依リ中央備荒儲蓄金ヲ使用セントスルトキハ其金額ヲ一般ノ歳入ニ組入レ一般ノ歳出トシテ之ヲ拂出スヘシ
- 第四條 「預金局」預金ハ日本銀行ヲシテ之レカ運用利殖ヲ取扱ハシメ其利殖金ヲ以テ利子ノ仕拂ニ充テ殘餘アルトキハ利子仕拂元金トシテ之ヲ積立預金ト共ニ運用利殖スヘシ
- 第五條 「預金局」預金ニ對シテ政府ヨリ仕拂フヘキ利子ハ其金額ヲ一般ノ歳入ニ組入レ一般ノ歳出トシテ之ヲ拂出スヘシ
- 第六條 郵便貯金預所貯金ハ「預金局」ニ寄託シ其利子ヲ貯金利子ノ仕拂ニ充ツヘシ
- 第七條 郵便爲替ヲ取扱フ爲メ特ニ爲替資本ヲ置キ從來ノ資本額ヲ以テ之ニ充ツヘシ
- 第八條 郵便條例第四百七十七條第三項ニ依リ政府ノ所得ニ歸シタル郵便爲替金ハ一般ノ歳入ニ組入ル

ヘシ

第九條 「預金局」預金、郵便貯金預所貯金、郵便爲替金ノ收入支出ニ關スル規則ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム但勅令ヲ以テ之ヲ定ムルマテハ從前施行スル所ノ規程ニ依ルヘシ

第十條 本法ハ明治二十三年度ヨリ施行ス

●中央備荒儲蓄金會計規則 (二十三年勅令第七十七號)

- 第一條 左ノ諸收入ヲ以テ中央備荒儲蓄金ノ歳入トス
 - 第一 預金利子
 - 第二 米穀賣拂代
 - 第三 雜收入
- 第二條 左ノ諸支出ヲ以テ中央備荒儲蓄金ノ歳出トス
 - 第一 府縣備荒儲蓄金補助
 - 第二 米穀購入代
 - 第三 米穀運送費
 - 第四 糶摺摺及精費
 - 第五 米穀保存取扱費
 - 第六 廠敷料及諸手数料
- 第三條 歳入歳出ノ豫定計算書及決定計算書ハ大藏大臣之ヲ調製シ歳入歳出ノ總豫算ト共ニ帝國議會ニ提出ノ手續ヲナスヘシ

第四條 大藏大臣ハ其年三月三十一日現在ノ中央備荒儲蓄金高明細表ヲ調製シ毎年度ノ豫定計算書ニ添付スヘシ

第五條 收入官吏ハ歳入ヲ收納スルトキハ中央備荒儲蓄金ノ寄付トシテ直ニ之ヲ「預金局」ニ拂込ヘシ

第六條 大藏大臣ハ府縣ノ備荒儲蓄金補助トシテ中央備荒儲蓄金ヲ支出セントスルトキハ命令ヲ「預金局」ニ下シテ寄付金ヲ支出セシメ之ヲ一般ノ歳入ニ繰入ルヘシ

第七條 大藏大臣ハ米穀ノ賣買保存ニ關スル費用ヲ支出セントスルトキハ命令ヲ「預金局」ニ下シテ寄付金ヲ支出シテ之ヲ主任官吏ニ交付セシメ主任官吏ヲシテ任拂ヲ執行セシムヘシ

第八條 毎年度内ニ收入ヲナスヘキ權利ヲ得テ當該年度内ニ收入濟トナラサルモノハ收入未済トシテ順次翌年度ヘ繰越シ現ニ收入ヲナシタル年度ノ歳入ニ組入ルヘシ

第九條 毎年度内ニ仕拂ヲナスヘキ義務ヲ生シ當該年度内ニ支出ノ請求ナキモノハ收入未済トシテ其定額ヲ順次翌年度ヘ繰越シ支出ノ請求アル毎ニ仕拂ノ命令ヲ發スヘシ

第十條 米穀ヲ購入スルニ當リ臨時急施ヲ要スルトキハ競等ニ附セス隨意ノ約定ニ依ルコトヲ得

第十一條 入札ノ方法ヲ以テ米穀ヲ賣却スルトキハ其入札期日ヨリ少ナクモ三日以前ヨリ揭示又ハ官報新聞紙其他ノ方法ヲ以テ成ルヘク廣ク公告スヘシ

第十二條 收入官吏任拂官吏及物品會計官吏ヨリ會計検査院ニ提出スヘキ計算書ヲ大藏大臣ニ送附スルハ毎年度經過後二箇月以内トス

第十三條 本規則ニ掲ケサル中央備荒儲蓄金會計ノ規定ハ總テ明治二十二年勅令第六十號會計規則ニ準據スヘシ

●官有財産管理規則 (二十三年勅令第二百七十五號)

第一條 此ノ規則ニ於テ官有財産ト稱スルハ國ノ所有ニ屬スル土地、森林、原野、營造物、家屋、船舶及其ノ附屬物トス

第二條 官有財産ハ主管ノ各省大臣之ヲ管理ス

第三條 官有財産ノ賣拂、讓與、交換及貸付ハ特別ノ規定アルモノヲ除ク外總テ此ノ規則ニ依ルヘシ

第四條 官有財産賣拂代金ハ其ノ財産引渡ノ際一時ニ納付セシムヘシ

第五條 官有財産ヲ貸付スルトキハ其ノ貸付料ヲ徵收スヘシ但シ公益ノ爲官有財産ヲ貸付シ又ハ森林經濟ノ爲森林ヲ貸付スルトキハ別ニ主管大臣ノ定ムル所ノ規則ニ依ル

第六條 官有財産ノ貸付料ハ毎年前納セシムヘシ若シ前納スル能ハサルトキハ相當ノ保證ヲ出サシムヘシ

第七條 貸付財産ノ修理其ノ他ノ費用ヲ負擔スル方法ハ貸付契約ヲ爲ストキ之ヲ定ムヘシ

第八條 官有財産ノ貸付ハ左ノ期限ヲ超ユルコトヲ得ス

- 第一 樹木培養ニ供スル土地ハ八十年以内
- 第二 農工其ノ他ノ營業及住居ニ供スル土地ハ三十年以内
- 第三 土地森林ノ使用權ハ十五年以内
- 第四 右ニ掲ケタル物件ハ三年以内

第九條 官有財産ノ貸付期限中政府ニ於テ之ヲ國ノ使用ニ供スルノ必要アルトキハ貸付ノ契約ヲ解キ之ヲ返還セシム

第十二編 官有財産管理規則

七九

前項ノ場合ニ於テ借受人ハ其ノ直接ニ受ケタル損失ニ付賠償ヲ求ムルコトヲ得

第九條 官有財産ノ借受人ニシテ主管大臣ノ許可ヲ得スシテ其ノ財産ノ原形ヲ變シ若ハ故意怠慢ニ由

リ之ヲ荒廢ニ歸シ又ハ毀損亡失シタルトキハ主管大臣ハ其ノ損失ヲ賠償セシムヘシ

第十條 官有財産ノ借受人ハ主管大臣ノ許可ヲ得ルニアラサレハ其ノ財産ヲ他人ニ轉貸スルコトヲ得

第十一條 官有財産ヲ以テ他人ノ所有物ト交換スルコトヲ得ルハ同一種類ノ財産ニシテ少クモ評定

價額相均キモノニ限ル

森林原野田畑ハ同一種類ノ財産ト見做スコトヲ得

營造物家屋船舶及其ノ附屬物ハ他人ノ所有物ト交換スルコトヲ得ス

第十二條 府縣郡市町村公共ノ道路公園市場河川竝木敷堤塘溝渠等ノ用ニ供スル爲官有ノ土地森

林ヲ必要トスルトキハ主管大臣ニ於テ之ヲ其ノ府縣郡市町村ニ讓與スルコトヲ得

第十三條 府縣郡市町村ニ於テ新ニ道路公園市場河川竝木敷堤塘溝渠等ヲ開設シ爲ニ不用ニ歸シ

タル官有ノ畜同種類ノ土地ハ内務大臣ニ於テ其ノ府縣郡市町村ニ讓與スルコトヲ得但シ官林内若ハ

官廳使用地内ニ包含セルモノ又ハ他ノ官有財産保護上離權シ難キモノハ此ノ限ニアラス

第十四條 官有財産ヲ賣拂貸付若ハ交換スル場合ニ於テ其ノ財産ヲ管理シ若ハ其ノ取扱ヲ爲ス官吏ハ

之ヲ買受ケ又ハ自己ノ所有物ト交換スルコトヲ得ス

第十五條 此ノ規則施行ノ前ニ官有財産ノ賣拂若ハ貸付ノ契約ヲ爲シタルモノハ其ノ契約ノ滿期マテ

總テ舊契約ニ依ルヘシ

貸付ノ期限ナキモノハ此ノ規則施行ノ日ヨリ三箇年以内ニ於テ此ノ規則ニ依リ更ニ契約ヲ爲スヘシ

第十六條 各省大臣ハ毎十年其ノ年三月三十一日ニ現在スル所管官有財産ノ目錄ヲ調製シ其ノ年開會

ノ帝國議會ニ報告ノ手續ヲ爲スヘシ

第十七條 各省大臣ハ毎會計年度間ニ於ケル所管官有財産ノ増減異動報告書ヲ調製シ翌年度開會ノ帝

國議會ニ報告ノ手續ヲ爲スヘシ

第十八條 第十六條ノ目錄及第十七條ノ報告書ハ其ノ事由ニ依テ區別シ左ノ事項ヲ示スヘシ

第一 買入ニ係ルモノハ其ノ代價

第二 賣拂ニ係ルモノハ各廳ニ於テ定メタル最低賣價實際ノ賣拂代價及目錄價格アルモノハ其ノ

價格

第三 讓與交換又ハ亡失毀損等ニ係ルモノハ其ノ目錄價格

第四 交換ニ係ルモノハ其ノ交換ニ由テ得タル財産

第五 買入又ハ賣拂ノ契約ハ特別ノ條件アルモノハ其ノ條件

第十九條 此ノ規則第十六條ニ掲グル官有財産ノ目錄ニシテ第一回ノモノハ明治二十四年三月三十一

日ノ現在高チ以テ同年六月三十日マテニ之ヲ調製スヘシ但シ調査未済ノ官有財産ハ調査ヲ了ルマテ

其ノ概算ヲ目錄ニ掲ケヘシ

第二十條 此ノ規則ハ明治二十四年四月一日ヨリ施行ス

●帝國議會用官有財産事務掌理方 (二十四年勅令第十五號)

第一條 帝國議會ノ用ニ供スル官有財産ニ關スル行政事務ハ各院書記官長之ヲ掌ル

第十二編 帝國議會用官有財産事務掌理方

第十二編 官有森林原野及產物特別處分規則

八二

第二條 前條事務ノ指揮監督ハ大藏大臣之ヲ行フ

(二十七年勅令第六十一號ヲ以テ内務大臣トアルヲ大藏大臣ト改ム)

●官有森林原野及產物特別處分規則 (二十三年勅令第六十九號)

第一條 農商務大臣ハ左ノ場合ニ限り官有森林原野及產物ヲ競争ニ付セス隨意ノ契約ヲ以テ貸渡又ハ賣却スルコトヲ得

- 一 官廳又ハ公共ノ用ニ供スル爲メ森林原野ヲ貸渡シ若クハ賣渡シ及其建築材料ヲ賣渡ストキ
- 二 開墾若クハ牧畜ノ爲メ森林原野ヲ貸渡シ若クハ賣渡ストキ
- 三 鑛業ノ爲メ森林原野ヲ貸渡シ若クハ建築材料又ハ薪炭材ヲ賣渡ストキ
- 四 植樹ノ爲メ森林原野ヲ貸渡ストキ
- 五 非常ノ災害ニ罹リタル地方人民ノ爲メ建築材料ヲ賣渡ストキ
- 六 從來ノ慣行ニ依リ地元人民ニ木竹薪炭材下草秣小柴若クハ土石ヲ賣渡ストキ
- 七 部分木ヲ仕付人ニ賣拂フトキ
- 八 社寺建築營繕ノ爲メ該社寺上地ノ木材若クハ土石ヲ賣渡ストキト
- 九 地押調査ニ由リ發見シタル開墾地ヲ其開墾人ニ賣渡スヘキトキ
- 十 建築其他ノ用ニ供スヘキ土石ヲ發見シタル場合ニ於テ之ヲ其發見人ニ賣渡ストキ
- 十一 季節アル生産物ヲ賣拂フトキ
- 十二 開墾牧畜若クハ植樹ノ爲メ貸渡シタル森林原野ノ區域内ニアル產物ヲ其借受人ニ賣拂フトキ
- 十三 林業附帶ノ用ニ供スル爲メ森林原野ヲ貸渡シ若クハ產物ヲ賣渡ストキ
- 十四 部分方法ニ由リ林產物製造ノ爲メ其原料ヲ請負人ニ賣渡ストキ

十五 見積借地料一箇年金貳百圓ニ超ヘサル森林原野ヲ貸渡ストキ

十六 拾町歩以下ニシテ見積代價金貳百圓ニ超ヘサル森林原野ノ民有地又ハ道路河川ニ介在セルモノヲ接續地ノ所有者ヘ賣拂フトキ

十七 見積代價金貳百圓ニ超ヘサル主副產物ヲ賣拂フトキ (二十四年勅令第二百二號ヲ以テ木竹ヲ主副產物ニ改ム)

十八 河海沼湖深池ノ埋立ニ要スル土石ヲ賣渡ストキ (二十三年勅令第二百八十二號ヲ以テ追加)

第二條 農商務大臣ハ競争入札ニ付シタル物件ノ豫定價格ニ違セス該入札ヲ取消シタル場合ニ於テ爾後三十日以内ニ豫定價格ヨリ低カラサル代價ヲ以テ同一物件ノ拂下ヲ望ム者アルトキハ隨意之ヲ賣拂フトキヲ得

第三條 農商務大臣ハ相當ノ年限ヲ定メ社寺上地官林ノ全部又ハ幾分ヲ該社寺ニ委託シ其林地ノ使用ヲ許可シ又ハ其林地ノ產物ヲ下附スルコトヲ得 (二十三年勅令第二百八十二號ヲ以テ追加)

第四條 農商務大臣ハ社寺上地官林又ハ特別ノ緣故アル官有森林原野ニシテ存置ヲ要セスト認めタルモノハ其社寺又ハ其緣故アルモノニ限り隨意ノ契約ヲ以テ賣渡スコトヲ得 (二十四年勅令第六十六號ヲ以テ追加)

第五條 農商務大臣森林保護ノ爲メ必要ト認めタルモノトキハ制限ヲ付シ地元人民ニ森林ノ副產物ヲ無料ニテ採取セシムルコトヲ得 (二十四年勅令第二百二號ヲ以テ追加)

第六條 農商務大臣ハ森林手入ノ爲メ採取シタル產物ノ全部又ハ一部ヲ手入料トシテ下付スルコトヲ得 (二十四年勅令第二百二號ヲ以テ追加)

●國有林野法 (三十二年法律第八十五號)

第一條 此ノ法律ニ於テ國有林野ト稱スルハ國ノ所有ニ屬スル森林原野ヲ謂フ

第十二編 國有林野法

八三

第十二編 國有林野法

第二條 國有林野ニシテ國土保安又ハ國有林野ノ經營上國有トシテ保存ノ必要アルモノハ賣拂讓與又ハ交換スルコトヲ得ス但シ公用又ハ公益事業ノ爲必要アルトキ及第十五條ノ場合ハ此ノ限ニ在ラズ

第三條 前條ノ國有林野ト雖官有地ニ編入スルノ必要アルトキハ之カ組換ヲ爲スコトヲ得 組換ヲ爲シタル土地ニシテ其ノ使用ヲ廢シタル場合ニ於テ林野ニ復スヘキ必要アルモノハ更ニ國有林野ニ編入ス

社寺土地ニシテ其ノ境内ニ必要ナル風致林野ハ區域ヲ畫シテ社寺現境内ニ編入スルコトヲ得

第四條 國有林野ノ境界査定ハ當該官廳ニ於テ豫メ期日ヲ定メ鄰接地所有者ニ通告シテ其ノ立會ヲ求メ施行スヘシ

隣接地所有者豫定期日ニ於テ立會ハサルコトアルモ當該官廳ハ境界査定ヲ施行スルコトヲ得

第五條 國有林野ノ境界査定ヲ終ヘタルトキハ當該官廳ハ直ニ鄰接地所有者ニ通告スヘシ

第六條 國有林野ノ境界査定ハ測量ノ爲目標ヲ設置シ若ハ支障木竹ヲ伐採スルノ必要アルトキハ其ノ土地若ハ木竹ノ所有者ハ正當ノ理由ナクシテ之ヲ拒ムコトヲ得ス但シ相當ノ補償ヲ求ムルコトヲ得

第七條 鄰接地所有者境界査定ニ不服アルトキハ第五條ノ通告ヲ受ケタル日ヨリ六十日以内ニ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第八條 國有林野ハ左ノ場合ニ限り隨意契約ヲ以テ賣拂フコトヲ得

- 一 公用又ハ公益事業ノ爲必要アルトキ
- 二 市町村又ハ公立小學校ノ基本財産ニ充ツルトキ

三 社寺土地ノ森林ヲ其ノ社寺ニ賣拂フトキ

四 命令ノ定ムル所ニ依リ特別ノ緣故アル林野ヲ其ノ緣故アル者ニ賣拂フトキ

五 民有地、道路、河川等ニ介在スル十町歩以内ノ林野ヲ賣拂フトキ

六 道路、溜池、堤塘、溝渠等ノ敷地トシテ貸付シタル林野ヲ其ノ借地人ニ賣拂フトキ

七 此ノ法律施行以前ニ開墾、牧畜又ハ植樹ノ爲貸付シタル林野又ハ第九條ノ開墾地ヲ其ノ事業ヲ成功シタル者ニ賣拂フトキ

第九條 國有林野ハ開墾ノ成功ヲ條件トシ豫メ其ノ價格及成功期限ヲ定メ隨意契約ヲ以テ賣拂ノ豫約ヲ爲スコトヲ得

第十條 國有林野產物ノ隨意契約ニ依リ賣拂ニ關スル規定ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第十一條 國有林野ハ左ノ場合ニ限り隨意契約ヲ以テ貸付シ又ハ使用セシムルコトヲ得

- 一 公川又ハ公益事業ノ爲必要アルトキ
- 二 牧畜又ハ植樹ノ爲必要アルトキ
- 三 牛馬放牧ノ爲使用セシムルトキ
- 四 第九條ニ依リ開墾者ノ爲ニスルトキ
- 五 一箇年貸付料三百圓ヲ超エサルトキ

第十二條 國有林野ヲ貸付シ又ハ使用セシムルトキハ相當ノ貸付又ハ牛馬放牧料ヲ徵收スヘシ但シ前條第一號及第四號ノ場合ニ於テハ貸付料ヲ免スルコトヲ得

第十三條 國有林野ヲ貸付シ又ハ使用セシムルトキハ左ノ期間ヲ超ユルコトヲ得ス

- 一 植樹ノ場合ニ於テハ八十年
- 二 家屋、倉庫其ノ他ノ建築物ノ場合ニ於テハ三十年
- 三 其ノ他ノ場合ニ於テハ十五年

前項ノ期間ハ之ヲ更新スルコトヲ得

第十四條 國土保安又ハ國有林野ノ經營上必要ナル場合ニ限り國有林野又ハ立木竹ト他ノ同價格以上ノ土地、森林、原野又ハ立木竹ト交換スルコトヲ得

第十五條 國有林野ハ左ノ場合ニ限り讓與スルコトヲ得

- 一 段別一町歩以下ニシテ公立ノ學校又ハ病院ノ用地ニ供スルトキ
- 二 府縣郡市町村及其ノ他ノ公共團體ニ於テ道路、河川、港灣、水道、堤塘、溝渠、溜池、火葬場、墓地、公園等公共ノ用ニ供スルトキ

第十六條 用途ヲ指定シタル國有林野ヲ指定ノ期限内ニ其ノ用途ニ使用セザルトキ又ハ一旦其ノ用途ニ使用シタル後當該官廳ニ於テ指定シタル期間其ノ使用ヲ繼續セザルトキハ之ヲ返還セシムルコトヲ得

第十七條 社寺ノ土地ノ森林ハ其ノ社寺ニ保管セシムルコトヲ得
社寺ハ勅令ノ定ムル所ニ依リ社寺林地ヲ使用シ又ハ主副產物ヲ採取スルコトヲ得

第十八條 國有林野ニシテ保護上必要ナル場合ニ於テハ市町村又ハ市町村内ノ一部ニ其ノ保護ヲ委託スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テハ其ノ受託者ニ林野產物ヲ讓與スルコトヲ得

第十九條 國ハ造林者ト其ノ收益ヲ分收スルノ契約ヲ以テ國有林野ニ部分林ヲ設クルコトヲ得

法令、慣行又ハ其ノ他ノ理由ニ依リ國有林ニ就キ收益ノ分收ヲ爲スモノハ前項ノ部分林ト看做ス

第二十條 部分林ノ樹木ハ國ト造林者トノ共有トシ其ノ持分ハ收益分收ノ部分ニ均シキモノトス
部分林設定前ヨリ存在スル樹木ハ國ノ所有トス

第二十一條 部分林ノ存續期間ハ八十年ヲ超ユルコトヲ得ス
前項ノ期間ハ之ヲ更新スルコトヲ得

第二十二條 民法第二百五十六條ノ規定ハ部分林ノ樹木ニ適用セス

第二十三條 第十八條第二項及第三項ノ規定ハ部分林ノ造林者ニ之ヲ準用ス

第二十四條 主務大臣ハ十箇年毎ニ其ノ年三月三十一日ニ現在スル國有林野現在表ヲ其ノ年開會ノ帝國議會ニ報告スヘシ但シ第一回ノ報告ハ明治三十四年三月三十一日ノ現在ニ依ル

第二十五條 主務大臣ハ毎會計年度間ニ於ケル國有林野ノ増減異動ヲ翌年度開會ノ帝國議會ニ報告ス

附則

第二十六條 此ノ法律ハ北海道及沖繩縣ニ施行セス

第二十七條 此ノ法律ハ明治三十二年七月一日ヨリ施行ス

● 國有土地森林原野下戻法 (二十二年法律第九十九號)

第十二編 國有土地森林原野下戻法

第十二編 國有土地森林原野下戻法

第一條 地租改正又ハ社寺土地處分ニ依リ官有ニ編入セラレ現ニ國有ニ屬スル土地森林原野若ハ立木竹ハ其ノ處分ノ當時之ニ付キ所有又ハ分收ノ事實アリタル者ハ此ノ法律ニ依リ明治三十三年六月三十日迄ニ主務大臣ニ下戻ノ申請ヲ爲スコトヲ得

前項ノ期限ヲ經過シタルモノ又ハ裁判所ノ判決ヲ受ケタルモノハ下戻ノ申請ヲ爲スコトヲ得ス
府縣設置以後土地處分ヲ受ケタル土地及地租改正處分既濟地方ニ於ケル未定地脫落地ニ付テハ此ノ法律ノ規定ヲ準用ス

第二條 下戻ノ申請ヲ爲ス者ハ第一條ノ事實ヲ證スル爲少クトモ左ノ書面ノ一ヲ添付スルコトヲ要ス

一 公簿若ハ公書ニ依リ所有又ハ分收ノ事實ヲ證スルモノ

二 高受又ハ正租ヲ納メタル證アルモノ

三 拂下下付賣買讓與實入書入寄附等ニ依ル所有又ハ分收ノ事實ヲ證スヘキモノ

四 水竹又ハ其ノ賣却代金ヲ分收シタル證アルモノ

五 私費ヲ以テ木竹ヲ植付ケタル證アルモノ

六 私費ヲ以テ田畑宅地ニ開墾シタル證アルモノ

第三條 前條ノ證憑書類ニシテ所有又ハ分收ノ事實ヲ證スルニ足ルト認ムルトキハ主務大臣ハ其ノ下戻ヲ爲スヘシ

第四條 下戻ヲ受ケタル者ハ其ノ下戻ニ因リテ所有又ハ分收ノ權利ヲ取得ス

前項ニ依リ所有又ハ分收ノ權利ヲ取得シタル者ハ其ノ土地森林原野若ハ立木竹ニ關シ第三者ニ關スル國ノ權利義務ヲ承繼ス

第五條 第二條ニ依リ下戻ヲ受ケタルモノト雖公用又ハ社寺境内ニ供セラルルモノハ其ノ公用又ハ社寺境内ヲ廢シタル後ニアラサレハ權利ヲ行使スルコトヲ得ス

第六條 下戻申請ニ對シ不許可ノ處分ヲ受ケタル者其ノ處分ニ不服アルトキハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第七條 此ノ法律施行以前ニ差出シタル下戻ニ關スル申請書又ハ願書ハ此ノ法律ニ依リタルモノト看做ス

●森林資金特別會計法 (三十二年法律第八十六號)

第一條 國有林野ノ處分國有林ノ實測、施業案編製、造林及森林買上ニ係ル特別經營ノ爲森林資金ヲ置キ其ノ歳入歳出ハ一般會計ト區分シ特別會計ヲ設置ス

第二條 森林資金ハ國有トシテ存置ノ必要ナキ林野賣却代金ヲ以テ之ニ充ツ

第三條 森林資金ヲ使用セントスルトキハ其ノ金額ヲ一般ノ歳入ニ組入レ一般ノ歳出トシテ拂出スヘシ

第四條 森林資金ニシテ毎年度内ニ使用セサルモノハ翌年度へ繰越スヘシ

第五條 第一條ニ掲クル特別經營ノ事業完了ノ上森林資金ニ剩餘アルトキハ一般ノ歳入ニ繰入ルヘシ

第六條 政府ハ毎年森林資金特別會計ノ歳入歳出豫算ヲ調製シ歳入歳出總豫算ト共ニ帝國議會ニ提出スヘシ

第七條 森林資金ノ收入支出ニ關スル規程ハ別ニ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

附則

第十二編 森林資金特別會計法

第八條 本法ハ明治三十二年度ヨリ施行ス

●森林資金ノ收入支出ニ關スル件 (三十二年勅令第二百二十三號)
森林資金ノ收入支出ニ關シテハ會計規則ヲ適用ス

●官有地特別處分規則 (二十三年勅令第三百三十五號)

第一條 內務大臣ハ左ノ場合ニ限リ官有地ヲ競争ニ付セス隨意ノ契約ヲ以テ貸渡又ハ賣渡スコトヲ得

一 直接公用ニ供スル爲又ハ公共ノ利益トナル事業ノ爲府縣郡市町村及公共組合又ハ其他ノ起業者

ニ官有地ヲ貸渡又ハ賣渡ストキ

二 不用ニ屬スル官有地一箇所ノ坪數百五十坪ニ滿タス其評定價格二百圓以内ノモノヲ賣渡又ハ其

貸渡料一箇年五圓以内ニシテ貸渡期限五箇年以内ノモノヲ貸渡ストキ但望人二名以上アルトキ

ハ此限ニアラス

三 鑛山ニ於ケル鑛物運搬道路、冷温泉場ニ於ケル汲泉場又ハ導泉敷地ノ如キ官許ヲ與ヘタル主タ

ル事業ニ直接附隨シ必要岡クヘカラスト認メタル官有地ヲ其事業者ニ貸渡又ハ賣渡ストキ

四 會計法施行以前土地ノ形質ヲ變更シ又ハ建物ヲ建設スルカ爲貸渡シタル官有地ヲ其借地人ニ賣

渡シ又ハ引續キ貸渡ストキ

第二條 直接公用ニ供スル官有地ヲ特ニ府縣郡市町村又ハ直接公用ニ供スルトキハ借地料ヲ徵收セザ

ルモノトス

第三條 府縣郡市町村又ハ公共組合ニシテ直接公用ニ供スル官有地ノ修理保存費ヲ負擔スルモノハ其

直接公用ヲ廢スルトキ官有財産管理上必要ノモノヲ除ク外之ヲ其費用負擔者ニ無代下付ス府縣郡市

町村又ハ公共組合ニ於テ其土地ヲ賣拂ハントスルトキハ鄰接地主ハ先買ノ權ヲ有スルモノトス

第四條 北海道官有未開ノ土地並官有森林原野ニハ本令ヲ適用セス

●帝國大學資金所屬森林原野並產物特別處分規則 (三十一年勅令九十二號)

第一條 文部大臣ハ左ノ場合ニ限リ隨意契約ヲ以テ帝國大學資金所屬森林原野ノ貸渡及其ノ產物ノ賣

却ヲ爲スコトヲ得

一 官廳又ハ公共ノ用ニ供スル爲メ森林原野ヲ貸渡シ若ハ建築材料ヲ賣渡ストキ

二 見積借地料一箇年二百圓ヲ超エサル森林原野ヲ貸渡ストキ

三 從來ノ慣行ニ由リ地元人民ニ木竹薪炭材下草秣小柴若ハ土石ヲ賣渡ストキ

四 林業附帶ノ用ニ供スル爲メ森林原野ヲ貸渡ストキ

五 季節アル生産物ヲ賣拂フトキ

六 部分木ヲ其ノ仕付人ニ賣拂フトキ

第二條 文部大臣ハ競争入札ニ付シタル物件ノ豫定價格ニ違セス該入札ヲ取消シタル場合ニ於テ爾後

三十日以内ニ豫定價格ヨリ低カラサル代價ヲ以テ同一物件ノ拂下ヲ望ム者アルトキハ隨意之ヲ賣拂

フトコトヲ得

●官有地取扱規則 (二十三年勅令第二百七十六號)

第一條 官有地ノ賣買讓與交換及貸付ハ內務大臣之ヲ處理ス

第二條 官有地ニ關スル願書ノ指令契約ノ締結登記ノ請求收入ノ徵收及收納並訴訟ハ內務大臣地方長

官ヲシテ之ヲ取扱ハシムヘシ

第十二編 帝國大學資金所屬森林原野並產物特別處分規則

第十二編 官有地取扱規則

第三條 各廳ニ於テ官有地ヲ使用セントスルトキハ内務大臣ニ請求スヘシ

第四條 各廳ノ使用地不用ニ歸シタルトキハ内務大臣ニ還付スヘシ

第五條 甲乙兩廳ノ間ニ於テ官有地ノ使用ヲ移サントスルトキハ内務大臣其手續ヲ爲スヘシ

第六條 各廳ノ所用ニ供スル爲メ民有地ヲ寄付セントスルモノアルトキハ内務大臣受納ノ手續ヲ爲スヘシ

第七條 官有地ヲ開墾セシコトヲ請フモノアルトキハ無料ニテ之ヲ貸付スヘシ但開墾成功ノ後事業者

ニ於テ該地ヲ拂下ケントスルトキハ豫メ契約ニ依テ其代價ヲ定メ置クヘシ

第八條 官有地ト民有地ノ交換ハ兩地ノ坪數及價格稍相均シキモノニアラサレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

第九條 借地人ハ特ニ許可ヲ受クルニアラサレハ其地ヲ當初借用ノ目的以外ニ使用スルコトヲ得ス

借地人前項ノ規定ニ違反スルトキハ地方長官ハ其使用ヨリ生シタル損害ヲ賠償セシメ返地ヲ命スル

コトヲ得

第十條 借地人官ノ許可ヲ得テ土地ノ原形ヲ變シタルトキハ借地満期ニ至リ自費ヲ以テ之ヲ原形ニ復

シ返納スヘシ但特ニ許可ヲ受ケタルモノハ此限ニアラス

第十一條 官ニ屬スル公有地及公有水面ハ其公用ヲ廢シタルニアラサレハ賣拂譲與交換又ハ貸付スル

コトヲ得ス公衆ノ妨害トナラサル限りハ公用ニ供シタル儘有料又ハ無料ニテ特ニ其使用ヲ許スコト

ヲ得

第十二條 官ニ屬スル公有水面ヲ埋立テ民有地ト爲サンコトヲ請フモノアルトキハ公衆ノ妨害トナラ

サル部分ニ限り之ヲ許スコトヲ得

第十三條 官ニ屬スル私有水面ノ賣拂譲與交換貸付及使用ハ本令ニ定ムル土地ノ規定ニ準據スヘシ

第十四條 隨意ノ契約ニ依リ官ニ屬スル土地又ハ水面ノ賣拂譲與交換又ハ有料貸付有料使用ヲ爲サン

トスルトキハ地方長官其評價ヲ爲サシムヘシ

既ニ貸付シ又ハ使用セシメタル土地又ハ水面ヲ引續キ貸付シ又ハ使用セシムル場合ニ於テモ亦前項

ヲ準用ス

第十五條 官有地ニ關スル事項ニシテ本令ニ規定セサルモノハ官有財産管理規則ニ依ル

第十六條 本令ハ勅令ヲ以テ特ニ規定シタルモノ及官有森林原野ニ適用セス

第十七條 官有地變換ニ關スル規定ハ別ニ之ヲ定ム

第十八條 此ノ規則ハ明治二十四年四月一日ヨリ施行ス

●外國公使館敷地貸渡ノ特別處分 (二十四年勅令第七十五號)

外國公使館敷地トシテ官有地ヲ貸渡ス場合ニ於テハ競争ニ附セス隨意ノ約定ニ依ルコトヲ得

●國有土地建物物件讓與ニ關スル件 (三十二年勅令第二百七十四號)

内務大臣ハ從來外國人居留地ニ關スル警察其ノ他公用ニ供シタル國有ノ土地建物物件ヲ新條約ノ實施

ニ際シ其ノ事務ヲ引繼キタル府縣其ノ他公共團體ニ讓與スルコトヲ得

●會計年度開始前現金支出規則 (二十二年勅令第九十五號)

第一條 各省大臣ハ會計法第十五條第二項ニ依リ現金前渡ヲナスニ當リ該年度ノ未タ開始セサルトハ

其前渡ヲ要スル經費ヲ算定シ其計算書ヲ作り大藏大臣及會計検査院ニ送付スヘシ (二十六勅令第

本條中ヲ
改正ス)

第十二編 會計年度開始前現金支出規則

第十二編 出納官吏身元保證金納付方

九四

第二條 大藏大臣前條ノ計算書ノ送付ヲ受ケタルトキハ之ヲ金庫ニ令送スヘシ(二十六勅令第二)
第三條 前各條ニ定メタルモノノ外仕拂命令發付ノ方法及該仕拂命令ニ對スル仕拂ノ手續ハ總テ會計規則ニ依ル

●出納官吏身元保證金納付方 (二十三年勅令第四號)

第一條 左ノ出納官吏ニシテ其取扱金額一箇年五百圓以上又ハ當時保管スル物品ノ價格千圓以上ニ達スルモノハ身元保證金ヲ納ムヘシ(二十四勅令第五十)
但兵備品ノ出納ヲ取扱フ武官ハ本條ノ限ニアラス(一號ヲ以テ但書追加)

第一 現金ノ領收ヲ常職トスル官吏

第二 當時現金前渡ヲ受クル官吏

第三 物品會計官吏

第二條 身元保證金ハ就職ノ時納付スヘキモノトス但現ニ明治二十三年四月一日ニ在職セル出納官吏ニ限り明治二十三年四月以後明治二十八年三月マテ五箇年間ヲ期シ其身元保證金額ヲ平分シ毎年四期又ハ毎月ニ之ヲ納付セシムヘシ

前項明治二十三年四月一日ニ在職セル出納官吏ニシテ土地若クハ公債證書ヲ以テ身元保證金ニ代用セントスル者ハ明治二十三年九月マテニ一時ニ納付セシムヘシ

第三條 身元保證金ニ代用セントスル公債證書ハ有利足ノモノヲ以テシ其價格ハ明治二十三年三月中旬東京取引所平均ノ相場ニ依リ爾後五箇年毎ニ其年三月中ノ同所平均相場ニ依リ其價格ヲ改定スヘシ但明治二十三年三月以後新ニ發行シタル公債證書ノ價格ハ身元保證金納付前月ノ東京取引所ノ平均

相場ニ依リ爾後本條ノ期限ト同時ニ其價格ヲ改定スヘシ

第四條 身元保證金ニ代用セントスル土地ノ價格ハ總テ土地臺帳ニ登記ノ價格ニ依ルヘシ

第五條 會計規則第五百五條第二項ニ依リ身元保證金ニ代用シタル公債證書若クハ土地ヲ公賣スルトキ其公賣公告入費ハ損失金ノ辨償ヲ命セラレタル出納官吏ヲシテ辨償セシムヘシ

第六條 (二十六年勅令第二)
(百四號ヲ以テ削除)

●郵便爲替金及貯金ノ出納官吏身元保證金 (二十三年勅令第五號)

第一條 郵便爲替金及郵便貯金ヲ取扱フ出納官吏ハ明治二十三年勅令第四號第一條ノ制限ニ依ラス身元保證金ヲ納ムヘシ

第二條 三等郵便電信局及三等郵便局ノ前條出納官吏ニハ明治二十三年勅令第四號第二條ノ但書ヲ適用セス

第三條 會計規則第四百四條第五百五條及明治二十三年勅令第四號第六條ニ依リ大藏大臣ノ爲スヘキ職務ハ遞信大臣之ヲ行フヘシ

●歳入歳出外現金出納取扱官吏ノ準則 (二十三年勅令第三十五號)

政府ニ屬スル歳入歳出外ノ現金ヲ取扱フ出納官吏ニ關スル規則ハ會計規則第八章及第九章中現金ヲ領收スル收入官吏ニ關スル各條ニ準據ス

●保管金規則 (二十三年法律第一號)

第一條 法律勅令又ハ從來ノ規則ニ依リ政府ニ於テ保管スル公有金私有金ハ左ノ計算法ニ從ヒ滿三十年ヲ過キテ拂戻ノ請求ナキトキハ政府ノ所得トス但別ニ法律ヲ以テ失權ノ期限ヲ定メタルモノハ各

第十二編 保管金規則

九五

第十二編 預金規則

其定ムル所ニ依ル

- 第一 保管義務解除ノ期アルモノハ其義務ヲ解除シタル翌日ヨリ起算ス
- 第二 保管義務解除ノ期ナキモノハ保管ノ翌日ヨリ起算ス
- 第三 訴訟事件ノ爲ニ拂戻ヲ請求スル能ハサル場合ニ於テハ裁判確定ノ翌日ヨリ起算ス
- 第二條 保管金ハ法律勅令又ハ從來ノ規則若クハ契約ニ依ルノ外利子ヲ付セス
- 第三條 保管金ノ證書ハ賣買讓與又ハ書入質入スルコトヲ得ス
- 第四條 保管金ノ受渡ニ屬スル證書ハ證券印税ヲ納ムルニ及ハス

●政府保管ノ義務アル公私有金寄托方 (二十三年勅令第二號)

預金規則ニ定メタルモノ、外法律勅令又ハ從來ノ規則ニ依リ政府ニ於テ保管ノ義務ヲ有スル公有金私有金ハ總テ大藏省「預金局」ニ寄托スヘシ
法律勅令又ハ從來ノ規則ニ依ルノ外政府ハ公有金私有金ヲ保管セス

●各官廳管理政府所有及政府保管ノ義務ヲ有スル有價證券寄托方 (二十六年勅令第七十號)

各官廳ニ於テ管理スル政府所有ノ有價證券ハ保管ノ爲メ大藏省「預金局」ニ寄托スヘシ
政府ニ於テ保管ノ義務ヲ有スル公有私有ノ有價證券ハ大藏省預金局ニ寄托スヘシ

●預金規則 (十八年第十三號布告)

- 第一條 大藏省中ニ「預金局」ヲ置キ左ノ貯金積立金ヲ預リ之ヲ保管利殖セシム
- 第一 曝曬局貯金

第二 各官廳ノ成規ニ從ヒタル積立金

第三 社寺教會會社其他人民ノ共有ニ係ル積立金ニシテ其請願ニ據ルモノ

第二條 預リ金取扱手續ハ「大藏卿」之ヲ定ム

第三條 預リ金ノ利子割合ハ「大藏卿」之ヲ定ム

第四條 預リ金ニ關スル損益ハ國庫ノ負擔トス

第五條 預リ金ノ證書ハ賣買讓與又ハ書入質入スルヲ得ス

第六條 預リ金ノ運用ハ日本銀行ヲシテ取扱ハシムルモノトス

第七條 「大藏卿」ハ便宜ノ地ヲ撰ミ「預金局」出張所ヲ設置シ又ハ國庫金取扱所ヲシテ預リ金受渡ヲ取扱

ハシムルコトアルヘシ

第八條 預リ金ノ受渡ニ屬スル證書ハ證券印税ヲ納ムルニ及ハス

●預金ニ制限ヲ置キ整理公債證書ニ交換方 (二十三年法律第七十五號)

第一條 預金規則第一條第二條第三條ニ依リ「預金局」ニ預リタル金額三百圓以上ニ達スルトキハ預ケ人ノ請求ニ依リ整理公債證書ヲ購入シテ之ヲ預ケ人ニ交付スルコトヲ得

第二條 前條預金ノ額二千圓ヲ超過スルトキハ「預金局長」ハ其超過額ヲ以テ整理公債證書ヲ購入シテ之ヲ預ケ人ニ交付スルコトヲ得

第三條 前二條ニ依リ購入シタル整理公債證書ハ預金ノ金額ヲ仕拂又ハ拂戻シタル場合ヲ除クノ外所有者ノ望ニ依リ之ヲ「預金局」ニ保管スルコトヲ得

第四條 本法ハ明治二十四年一月一日ヨリ施行ス

第十二編 預金ニ制限ヲ置キ整理公債證書ニ交換方

● 供託法 (三十二年法律第十五號)

- 第一條 法令ノ規定ニ依リテ供託スル金錢及ヒ有價證券ハ金庫ニ於テ之ヲ保管ス
- 第二條 金庫ニ供託ヲ爲サント欲スル者ハ大藏大臣カ定メタル書式ニ依リテ供託書ヲ作り供託物ニ添ヘテ之ヲ差出タスコトヲ要ス
- 第三條 金庫ハ金錢ノ供託ヲ受ケタル翌月ヨリ拂渡請求ノ前月マテ大藏大臣カ定メタル利息ヲ拂フコトヲ要ス
- 第四條 金庫ハ供託物ヲ受取ルヘキ者ノ請求ニ因リ供託ノ目的タル有價證券ノ償還金利息又ハ配當金ヲ受取リ供託物ニ代ヘ又ハ其從トシテ之ヲ保管ス但保證ニ代ヘテ有價證券ヲ供託シタル場合ニ於テハ供託者ハ其利息又ハ配當金ノ拂渡ヲ請求スルコトヲ得
- 第五條 司法大臣ハ法令ノ規定ニ依リテ供託スル金錢又ハ有價證券ニ非サル物品ヲ保管スヘキ倉庫營業者ヲ指定スルコトヲ得
- 第六條 倉庫營業者ハ其營業ノ部類ニ屬スル物ニシテ其保管シ得ヘキ數量ニ限り之ヲ保管スル義務ヲ負フ
- 第七條 倉庫營業者ニ供託ヲ爲サント欲スル者ハ司法大臣カ定メタル書式ニ依リテ供託書ヲ作り供託物ニ添ヘテ之ヲ交付スルコトヲ要ス
- 第八條 倉庫營業者ハ供託物ヲ受取ルヘキ者ニ對シ一般ニ同種ノ物ニ付テ請求スル保管料ヲ請求スルコトヲ得
- 第九條 供託物ハ供託物カ指定シタル者又ハ法令若クハ裁判ニ依リテ定マリタル者ニ之ヲ還付ス
- 第十條 供託者ハ民法第四百九十六條ノ規定ニ依レルコト、供託カ錯誤ニ出テシコト又ハ其原因カ消滅シタルコトヲ得

ルコトヲ證明スルニ非サレハ供託物ヲ取戻スコトヲ得ス

第九條 供託者カ供託物ヲ受取ル權利ヲ有セサル者ヲ指定シタルトキハ其供託ハ無効トス

第十條 供託物ヲ受取ルヘキ者カ反對給付ヲ爲スヘキ場合ニ於テハ供託所ニ其給付ヲ爲シ又ハ供託者ノ書面若クハ裁判ニ依リ其給付アリタルコトヲ證明スルニ非サレハ供託物ヲ受取ルコトヲ得ス

附 則

第十一條 本法ハ明治三十二年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

第十二條 本法施行前ニ供託シタル金錢ニハ其施行ノ月ヨリ拂渡請求ノ前月マテ第三條ノ利息ヲ附スルコトヲ要ス

第十三條 第四條第八條及ヒ第十條ノ規定ハ本法施行前ニ供託シタル物ニモ亦之ヲ適用ス

第十四條 明治二十三年勅令第四百五號供託規則ハ本法施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス

● 金庫規則 (二十二年勅令第二百二十六號)

第一條 金庫ハ國庫ニ於テ保管出納スル現金ヲ取扱フ所トス

第二條 金庫ヲ分テ左ノ三種トス

第一 中央金庫

第二 本金庫

第三 支金庫

第三條 東京ニ中央金庫ヲ置キ地方ニ本金庫及支金庫ヲ置ク (二十八年勅令第二百二十九號ヲ以テ次項トモ改正)

本金庫支金庫ノ位置及各金庫ノ出納區域ハ大藏大臣之ヲ定ム

第十二編 金庫規則

第十二編 國庫金出納上一時貸借方

100

- 第四條 金庫ハ大藏大臣之ヲ管理ス
- 第五條 中央金庫ハ各地ノ本金庫ヲ統轄シ本金庫ハ支金庫ヲ總轄ス但本金庫ヲ置カサル地方ノ支金庫ハ中央金庫之ヲ總轄ス(二十八年勅令第二百一十九號ヲ以テ改正)
- 第六條 中央金庫本金庫支金庫ノ現金ノ保管出納ハ日本銀行ヲシテ取扱ハシム
- 第七條 日本銀行ハ本金庫支金庫ノ現金ノ保管出納ヲ取扱フ爲メ各地ニ其支店出張店又ハ代理店ヲ設置スヘシ(二十八年勅令第二百一十九號ヲ以テ支店ノ下ニ出張店ノ三字ヲ加フ)
- 第八條 日本銀行ノ支店長出張店長又ハ代理店長ハ金庫出納役ノ代理人トシテ其ノ事務ヲ分擔スヘシ(二十八年勅令第二百一十九號ヲ以テ本條改正)
- 第九條 日本銀行ハ第七條ニ據リ各地ノ代理店ヲ定メントスルトキハ大藏大臣ノ認可ヲ要ス
- 第十條 大藏大臣ハ検査官吏ヲ派出シ何時ニテモ金庫ノ金櫃帳簿ヲ検査スルコトヲ得
- 此場合ニ於テハ日本銀行本支店出張店代理店タル銀行全部ノ金櫃帳簿ヲ併セテ検査スルコトアルヘシ(二十八年勅令第二百一十九號ヲ以テ本支店ノ下ニ出張店ノ三字ヲ加フ)
- 第十一條 日本銀行ハ中央金庫本金庫支金庫ノ現金ノ保管出納ニ對シ一切ノ責任ヲ有ス
- 第十二條 金庫ニ於テ備フヘキ帳簿ノ種類其規程出納ノ順序及金庫ノ検査規程ハ大藏大臣ノ定ムル所ニ依ル
- 第十三條 本規則ハ明治二十三年四月一日ヨリ施行ス
- 國庫金出納上一時貸借方 (二十七年法律第十六號)
- 第一條 政府ハ國庫金出納上一會計年度間餘裕アルトキハ相當ノ利子ヲ徴シテ之ヲ當坐預又ハ定期預

トシテ日本銀行ニ預ケ入ル、コトヲ得

第二條 政府ハ國庫金出納上一會計年度間一時不足ヲ生スルトキハ相當ノ利子ヲ附シ日本銀行ヨリ借入ヲ爲スコトヲ得

第三條 前條ニ依リ政府ノ借入ル、コトヲ得ヘキ金額ハ大藏省證券發行額ト合セテ當該年度該證券ノ發行最高額ヲ超過スルコトヲ得ス

第十二編 國庫金出納上一時貸借方

101

第十三編 貨幣、公債、度量衡

●貨幣條例 (八年第八號布告)

新貨幣條例ノ儀明治四年五月頒布ノ後追々貨幣圖面寸法ノ改正規則ノ刪補等有之候ニ付本年(四月)第六千二號布告但書ノ通今般改刻更ニ貨幣條例ト相改候條此旨布告候事

但明治六年(八月)第三百八號布告銅貨圖面同七年(三月)第三十四號布告壹圓銀圖面本年(二月)第三十五號布告貿易銀圖面共表裏ノ唱へ反對致シ居候ニ付今般改正候事

皇國徃古ヨリ他邦ノ貿易ノ事小ナク貨幣之制度イマタ精密ナラス其品類各種ニシテ其價位モ亦々一定セス今其概略ヲ舉ムニハ慶長金アリ享保金アリ文字金アリ大小判金アリ一分金アリ二分金アリ貳朱銀アリ一分銀アリ一朱銀アリ當百錢アリ大小數種ノ銅錢アリ其他一時通用ノ貨幣ハ枚舉ニ遺アララス甚シキハ一國一郡ノ貨幣アリテ今ニ至ルマテ僅ニ其一部ニ通用シ他方ニ流通セサルモノアリカク其品類區々ニシテ方圓大小其價ヲ異ニシ混合雜駁其實ヲ同フセス抑貨幣ノ眼目タル量目ト性合トニ至リテハ殆ント辨知スヘカラス新舊互ニ雜用シ品位自ラ低下シ其間或ハ贋造ノ弊アリテ竟ニ今日ノ甚シキニ馴致セリ偶々其性ノ貨幣ハ徒ラニ富家庫中ノ寶物トナリ或ハ外國へ輸出セシモ亦少ナカラス遂ニ諸品換用ノ能力ヲ失ヒ日用便利ノ道ヲ塞キ流通ノ公益殆ント絶ヘントスルニ至ル實ニコレ天下一般ノ窮厄ニシテ萬民ノ痛心更ニ之ヨリ大ナルモノナシ今其緣由ヲ尋釋スルニ全ク一定ノ價位ナクシテ善惡良否ヲ雜用スルノ蓄弊ヨリ生スル事ナリ方今貿易ノ道彌盛ムナル時ニ當リテ蓄弊ヲ改メ精良ノ新製ヲ設ケスルハ何チモツテ流通ノ道ヲ開キ富國ノ基ヲ立ンヤ是政府ノ責任ニシテ然モ燃眉ノ急務タリ故ニ去ル明

治元戊辰ノ年ヨリ早ク其ノ功ヲ起シ莫大ナル經費ヲ厭ハス大阪ニオイテ新ニ造幣寮ヲ建置シ壯大ナル器械ヲ備ヘ廣ク宇内各國貨幣ノ眞理ヲ察知シ金銀ノ性質量目ヨリ割合ノ差等鑄造ノ方法ニ至ルマテ詳カニ普通ノ制ヲ比較商量シ以テ精密ノ通用貨幣ヲ鑄造シ在來ノ貨幣ニ加ヘテ一般ノ流通ヲ資ケントスルノ都合ヲ謀リ既ニ開寮ノ儀典ヲ完了セリサレトモ前ニ言ヘルコトク區々各種ノ貨幣多ク現場諸品ノ價值ヲ錯亂シ萬民ノ迷惑ナルコトナレハ漸々新舊ヲ交換シテ在來ノ通貨ハ悉ク改鑄シ都テ品類ヲ一定セシメントノ御趣意ナリ且貨幣ハ天下萬民ノ通寶タル主旨ニ基キ「地金ヲ持參シテ引換ヲ望ムモノハハ速カニ改鑄シテ通用貨幣ヲ渡スヘシ」サレハ今人々古來ノ蓄習ヲ襲ヒ重代ノ寶物トセル古金銀ノ類モ數年ナラスシテ全ク地金一様ノモノトナルヘケレハ早々交換流通シテ貨幣ノ眞理ヲ失ハサル様注意スヘキ事肝要ナリ斯ク新々ニ造幣寮ヲ設ケシモ偏ニ萬民ノ保護ニ任スルノ職分ヲ盡スノ外他アルニアラサレハ萬民亦能ク此理ヲ會得シ各ソノ務ヲ勉勵シテ天賦ノ職ヲツクスヘシ仍テ今爰ニ其次第ヲ揭示シ并セテ新貨幣ノ眞形ヲ摹シ其量目品位表ヲ添ヘ「且地金引換ヘノ規則」等詳細ニ附録シ普ク國內ニ頒布諭告スルモノ也

明治四年辛未五月

太 政 官

貨幣條例

- 一 貨幣ノ稱呼ハ圓ヲ以テ起票トシ其多寡ヲ論セス都テ圓ノ原稱ニ數字ヲ加ヘテ之ヲ計算スヘシ但シ一圓以下ハ錢百分一ト厘十分一ヲ以テ小數ノ計算ニ用ヘシ
- 一 算則ハ都テ十進一位ノ法ヲ用ヒ一厘十ヲ合シテ一錢トシ一錢十ヲ合セテ十錢トイヒ十錢十ヲ合セテ一圓トス一圓ヨリ上十百千萬ニ至ルトイフトモ皆十數ヲ合シテ一位ヲ進ム其他半錢

五錢五十錢五圓ノ如キハ十數ヲ半割シ二十錢二圓二十圓ノ如キモ亦一十ノ數ヲ倍スルマテニシテ固ヨリ軌範ノ外ニ出ス

- 一 厘ヨリ以下ハ別ニ鑄造ノ貨幣ナシト雖若シ計算ヲ要スレハ毛絲忽微纖ヲ以テ微少ノ數ヲ算スヘシ又萬ヨリ以上ハ十萬百萬千萬ニ至リ千萬十即チ萬々ヲ以テ一億トシ大數ノ計算ヲ爲スヘシ
- 一 製貨中金銀純分ノ割合及其量目ハ都テ眞形摸寫ノ下ニ表出スルトイヘトモ鑄和鑄造ノ際僅少ノ差アルヲ免カレンス故ニ今各種ノ貨幣ニ就テ不得已シテ生スル量目并品位ノ公差ヲ表出シテ以テ毛絲ノ微細ヲ辨析ス

(品位公差表及貨幣略圖並位置目表略之)

貨幣通用制限

本位金貨幣即二十圓十圓ノ中一圓金ヲ以テ原貨ト定メ各種トモ何レノ拂方ニモ之ヲ用ヒ其高ニ制限アルコトナシ

本位トハ貨幣ノ主本ニシテ他ノ進據ナルモノナリ故ニ通用ノ際ニ制限ヲ立ルヲ要セス尤モ一圓金ヲ以テ本位中ノ原價ト定ムルトハ就中一圓金ヲ以テ本位ノ基本ヲ定メ他ノ四種ノ金貨モ都テ標準ヲ一圓金ニ取レハナリ

補助ノ銀貨即五十錢二十錢十錢五錢ハ都テ補助ノ貨品ニシテ其一種又ハ數種ヲ併セ用フルトモ一口ノ拂方ニ

十圓ノ高ヲ限ルヘシ

補助ノ白銅貨即五錢及銅貨即二錢一錢ハ都テ一口ノ拂方ニ一圓ノ高ヲ限ルヘシ (二十一年勅令第七十四號ヲ以テ本項

正改)

第十三編 貨幣法

四

補助トハ本位貨幣ノ補助ニシテ制度ニヨリテ其價位ヲ定メテ融通ヲ資クルモノナリ故ニ通用ノ際之レカ制限ヲ設ケテ交通ノ定規トス

貿易銀ハ各開港場貿易便利ノ爲メ内外人民ノ望ニ應ジ鑄造シ内外通商ノ流融ヲ資クヘシ

此貿易銀ハ海關稅其他外國人ヨリ納ムル諸稅及ヒ日本人外國人ト通商ノ取引ニ用ヒ又之ヲ内地ノ諸稅納方等其他公私一般ノ拂方ニモ用ヒ其高ニ制限アルコトナシ(十一年第十三號布告ヲ以テ本節改正)

海關稅其他外國人ヨリ納ムル諸稅受取方ニ付貿易銀但新舊本位金貨トノ價格比較ハ銀貨百枚ニ付本位金貨百圓ノ割合タルヘシ(九年第二十七號布告ヲ以テ本節改正)

通用制限ハ元來貨幣ニ原本ト補助トノ別アル所以ノ理ニ基キテ制定セシモノナレハ人々取引ノ節右ノ制限ニ照準シモシコレニ越レハ誰ニテモ請取渡ヲ拒ムノ道理アルヘシサレトモ私ノ取引ニ付便宜ノタメ對談ヲ以テ請取渡イタシ候儀ハ全ク相互ノ都合ニ從フ筈ナレハ右制限ニ不拘勝手次第ニ交通イタシ不苦候事

明治八年四月

大藏省

●貨幣法 (三十年法律第十六號)

第一條 貨幣ノ製造及發行ノ權ハ政府ニ屬ス

第二條 純金ノ量目二分ヲ以テ價格ノ單位ト爲シ之ヲ圓ト稱ス

第三條 貨幣ノ種類ハ左ノ九種トス

金貨幣

二十圓、十圓、五圓

銀貨幣

五十錢、二十錢、十錢

白銅貨幣

五錢

青銅貨幣

一錢、五厘

第四條 貨幣ノ算則ハ總テ十進一位ノ法ヲ用非一圓以下ハ一圓ノ百分ノ一ヲ錢ト稱シ十分ノ一ヲ厘ト稱ス

第五條 貨幣ノ品位ハ左ノ如シ

一 金貨幣 純金九百分參和銅一百分

二 銀貨幣 純銀八百分參和銅二百分

三 白銅貨幣 一ニッケルニ二百五十分參和銅七百五十分

四 青銅貨幣 銅九百五十分錫四十分亞鉛十分

第六條 貨幣ノ量目ハ左ノ如シ

一 二十圓金貨幣 四匁四分四厘四毛四十六グラム六六六五

二 十圓金貨幣 二匁二分二厘二毛二八グラム三三三三

三 五圓金貨幣 一匁一分一厘一毛一四グラム二六六六

四 五十錢銀貨幣 三匁五分九厘四毛二十三グラム四七八三

第十三編 貨幣法

五

第十三編 貨幣法

- 五 二十錢銀貨幣 一匁四分三厘七毛七五(グラム三九一四)
 - 六 十錢銀貨幣 七分一厘八毛八(グラム六九五五)
 - 七 白銅貨幣 一匁二分四厘四毛一(グラム六六五四)
 - 八 一錢青銅貨幣 一匁九分零厘零毛八(グラム二二八〇)
 - 九 五厘青銅貨幣 九分五厘零毛四(グラム五六四〇)
- 第七條 金貨幣ハ其ノ額ニ制限ナク法貨トシテ通用ス銀貨幣ハ十圓マテ白銅貨幣及青銅貨幣ハ一圓マテヲ限リ法貨トシテ通用ス

第八條 貨幣ノ形式ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第九條 金銀貨幣純分ノ公差ハ金貨幣ハ一千分ノ一銀貨幣ハ一千分ノ三トス

第十條 金銀貨幣量目ノ公差ハ左ノ如シ

- 一 金貨幣二十圓ハ每片八毛六四(グラム〇三二四〇)一千枚毎ニ八分三厘(グラム二二二五〇)十圓ハ每片六毛零五(グラム〇二二六九)一千枚毎ニ六分三厘(グラム三二二五〇)五圓ハ每片四毛三二(グラム〇一六二〇)一千枚毎ニ四分一厘(グラム五三七五〇)トス
 - 二 銀貨幣ハ各種共每片二厘五毛九二(グラム九七二〇)五十錢銀貨幣ハ一千枚毎ニ一匁二分四厘(グラム六五〇〇)二十錢銀貨幣ハ一千枚毎ニ八分三厘(グラム二二二五〇)十錢銀貨幣ハ一千枚毎ニ四分一厘(グラム五三七五〇)トス
- 第十一條 金貨幣ノ通用最輕量目ハ二十圓金貨幣四匁四分二厘十六(グラム五七五〇)十圓金貨幣二匁二分一厘八(グラム二八七五)五圓金貨一匁一分零厘五毛四(グラム二四三八)トス

第十二條 金貨幣ニシテ磨損ノ爲通用最輕量目ヲ下ルモノ及銀貨幣白銅貨幣又ハ青銅貨幣ニシテ著シク磨損シタルモノ其他流通不便ノ貨幣ハ其額面價格ヲ以テ無手数料ニテ政府ニ於テ之ヲ引換フヘシ

第十三條 貨幣ニシテ模倣ノ認識シ難キモノ又ハ私ニ極印ヲ爲シ其ノ他故意ニ毀傷セリト認ムルモノハ貨幣タルノ效用ナキモノトス

第十四條 金地金ヲ輸納シ金貨幣ノ製造ヲ請フ者アルトキハ政府ハ其ノ請求ニ應スヘシ

附 則

第十五條 從來發行ノ金貨幣ハ此ノ法律ニ依リ發行スル金貨幣ノ倍位ニ通用スヘシ

第十六條 從來發行ノ一圓銀貨幣ハ金貨幣一圓ノ割合ヲ以テ政府ノ都合ニ依リ漸次之ヲ引換フヘシ

前項引換ノ終了マテハ金貨幣一圓ノ割合ヲ以テ無制限ニ法貨トシテ其ノ通用ヲ許シ通用禁止ノ場合ニ於テハ六箇月以前ニ勅令ヲ以テ之ヲ公布スヘシ通用禁止ノ翌日ヨリ起算シ滿五箇年内ニ引換ヲ請

求セサルトキハ爾後金地金トシテ取扱フヘシ

第十七條 從來發行ノ五錢銀貨幣及銅貨幣ハ從前ノ通り通用スヘシ

第十八條 此ノ法律發布以後ハ一圓銀貨幣ノ製造ヲ廢ス但シ右期日以前ニ政府ニ輸納シタル銀地金ハ此ノ限ニ在ラス

第十九條 此ノ法律ニ抵触スル從前ノ法令ハ總テ之ヲ廢止ス

第二十條 此ノ法律ハ第十八條ヲ除ク外明治三十年十月一日ヨリ施行ス

●貨幣ノ形式

(三十年勅令第四百四十四號)
貨幣法第八條ニ依リ貨幣ノ形式ヲ定ムルコト左ノ如シ(三十二年勅令第二百一十七號ニ依リ改正アリ)

第十三編 貨幣ノ形式

(形式略之)

●造幣規則 (三十年勅令第三百三十八號)

- 第一條 金貨幣ノ製造ヲ請フヘントスル者ハ金地金ヲ造幣局ニ輸納スヘシ
- 第二條 貨幣製造ノ爲メ受取ル金地金ハ品位一千分中金九百九十以上ニシテ其ノ含有物ノ性質造幣ニ障害ナキモノニ限ル但シ含有物銅ノミナルトキハ金八百九十八以上トス(三十二年勅令第三十六號ヲ以テ改正)
- 第三條 貨幣製造ノ爲メ受取ル金地金ハ其ノ量目一百匁以上トス但シ金銀地金精製及品位證明規則ニ依リ貨幣ノ製造ヲ請フトキハ此ノ限ニアラス
- 第四條 輸納ノ地金ハ輸納人又ハ其ノ代理者ヲ立會ハシメ之ヲ秤量シテ預リ證書ヲ交付スヘシ
- 第五條 地金ノ品位及性質ハ試驗ノ上之ヲ定ム
- 第六條 地金ノ試驗了リタルトキハ勘定書ニ試驗表ヲ添ヘ之ヲ輸納人ニ送付スヘシ
- 第七條 輸納人前條書類ノ送付ヲ受ケ異議ナキトキハ預リ證書ヲ提出シテ貨幣拂渡證書ヲ請求スヘシ但シ異議アル者ハ三日以内ニ其ノ旨ヲ申告スヘシ此ノ期間内ニ異議ノ申告ヲ爲ササルトキハ承諾シタルモノト見做スヘシ
- 第八條 輸納人前條ニ依リ異議ノ申告ヲ爲シタルトキハ其ノ輸納地金ヲ返付スヘシ此ノ場合ニ於テハ手数料トシテ地金四匁匁及其ノ端數毎ニ金三圓ヲ徵收ス
- 第九條 輸納地金ノ鑄解減ハ輸納人ノ負擔トス
- 第十條 輸納地金ノ取扱ハ一般休暇日ノ外三月十六日ヨリ同三十一日マテノ間之ヲ停止ス但シ臨時停止ヲ要スルトキハ大藏大臣之ヲ告示ス

附 則

本令ハ發布ノ日ヨリ施行ス

●金銀地金精製及品位證明規則 (三十年勅令第三百三十九號)

- 第一條 造幣局ハ金銀地金ノ精製又ハ品位證明ヲ請フ者アルトキハ本規則ノ定ムル所ニ依リ其ノ精製又ハ證明ヲナスヘシ
- 第二條 精製又ハ品位證明ノ爲メ輸納スル地金ハ品位一千分中金銀七百五十以上量目一百匁以上ノモノニ限ル但シ金銀混合地金ナルトキハ金銀合シテ七百五十以上トス
- 第三條 輸納ノ地金ハ輸納人又ハ其ノ代理者ヲ立會ハシメ之ヲ秤量シテ預リ證書ヲ交付スヘシ
- 第四條 品位證明ノ爲メ輸納シタル地金ハ定型塊ト爲シ其ノ品位ヲ證明シ之ヲ輸納人ニ交付スヘシ金銀混合地金又ハ精製スルニアラサレハ定型塊ト爲シ難キ地金ノ品位證明ヲ請フ者アルトキハ精製ノ上品位ヲ證明ス
- 第五條 造幣局ニ於テ製造スル定型塊ハ金銀各一百匁以上トス
- 第六條 精製ノ爲メ輸納シタル地金ノ品位證明ヲ請ヒ又ハ其ノ金分ヲ以テ貨幣ノ製造ヲ請フヘントスル者ハ輸納ノ際其ノ旨ヲ申告スヘシ
- 第七條 輸納シタル地金試驗ノ後精製又ハ品位證明ヲ爲サスシテ返付ヲ要スルトキハ手数料トシテ地金一塊毎ニ金二圓ヲ徵收ス
- 第八條 輸納地金ノ鑄解減ハ輸納人ノ負擔トス
- 第九條 輸納地金ノ品位證明ヲ爲シタルトキハ手数料トシテ金ハ四匁匁又ハ其ノ端數毎ニ銀ハ八匁匁

第十三編 輸納地金ノ精製手數料ニ關スル件 紙幣

又ハ其ノ端數毎ニ各金二圓ヲ徵收ス(三十二年勅令第三十七號ヲ以テ改正)

第十條 輸納地金ノ精製ヲ爲シタルトキハ左ノ割合ニ依リ手數料ヲ徵收ス

一 千分中金銀九百五十以上	純銀金	百匁ニ付	金七十六錢
一 千分中金銀九百以上	純銀金	百匁ニ付	金八十二錢
一 千分中金銀八百五十以上	純銀金	百匁ニ付	金九十三錢
一 千分中金銀八百以上	純銀金	百匁ニ付	金九十七錢
一 千分中金銀七百五十以上	純銀金	百匁ニ付	金一圓十錢
	純銀金	百匁ニ付	金一圓十三錢
	純銀金	百匁ニ付	金一圓十八錢

附則

本令ハ發布ノ日ヨリ施行ス

●輸納地金ノ精製手數料ニ關スル件 (三十二年勅令第三十八號)

金銀地金精製及品位證明規則第十條ニ依ル輸納地金ノ精製手數料ハ當分ノ内金分ニ付テハ之ヲ徵收セ

●紙幣 (四年十二月布告)

維新已來太政官竝ニ民部省發行ノ金札製造ノ粗ナルヨリ變造ヲ謀ル者間々有之且又從來蓄藩々ニ於テ發行ノ金銀錢札ハ其管轄限リ通用ノ儀ニ付一般流通ノ便ヲ失ヒ其弊害不少依之今般御多端ノ折柄莫大ノ入費ヲ不被爲厭精工ノ新紙幣百圓五拾圓貳拾圓壹圓五拾錢貳拾錢拾錢五錢ノ各種ヲ製造シ來壬申年二月十五日ヨリ右各種ノ内差向壹圓五拾錢貳拾錢拾錢ノ四種ヲ發行セシメ追々製造成功

ノ都合ニヨリ從來官藩兩様ノ金札ト引換條厚キ御趣意ヲ體認シ無疑念通用可致尤モ一般引換ノ都合ハ猶道テ相違候儀モ可有之依テ各種ノ新紙幣相添此段相違候事

別紙布告文ノ通愈來二月十五日ヨリ今般新製ノ紙幣發行致シ候ニ付テハ僻地小民共ハ前以テ趣意、知セシメ篤下心得居候様不致テハ或ハ新奇ノ思ヲナシ厭忌ノ情ヲ生シ候モ難計發行ノ際ニ臨ミ右體ノ事有之候テハ難相成候條各地方廳ニカイテ厚ク注意致シ未々ニ至ル迄解シ易キ樣更ニ布告文ハ假名ヲ加ヘ管下ノ人民ヘ遺漏ナク布達行届候様可取計尤モ各府縣ヘ各種紙幣拾五枚ツ、相廻シ其内一枚ハ各種印章及口書込文字等ノ場所ヘ張紙ヲ以テ記入致シ候間各地方廳ニカイテ同様取計都合ノ地又ハ人民輻輳ノ場所ヘモ各布告文同様揭示イタシ置キ廣ク人民ヘ相示シ候様可致此段更ニ相違候

●國立銀行紙幣ノ通用及引換期限 (二十九年法律第八號)

第一條 國立銀行紙幣ノ通用期限ハ明治三十二年十二月九日トス

第二條 國立銀行紙幣ヲ所持スル者ハ前條期日ノ翌日ヨリ起算シ滿五箇年內ニ其ノ引換方ヲ政府ニ請

求スヘシ

前項ノ引換期日ヲ過クルトキハ總テ所持人ノ損失トス

第三條 本法ハ官命又ハ平穩銀店ニ係ル國立銀行發行ノ紙幣ニハ之ヲ適用セス

●通用禁止ノ貨幣紙幣引換期限 (二十三年法律第十三號)

政府發行ノ補助貨幣及紙幣ニシテ通用ヲ廢止シタルモノハ其廢止ノ翌日ヨリ起算シ滿五箇年內ニ引換ヲ請求セサレハ期滿免除トシテ政府ハ其引換義務ヲ免ル、モノトス但明治二十年六月三十日ヲ以テ通用ヲ廢止シタル拾錢紙幣ハ本法發布ノ日ヨリ起算シ滿三年ヲ以テ期滿免除ノ期限トス

第十三編 國立銀行紙幣ノ通用及引換期限

第十三編 鑄造金銀銅貨幣紙幣等取扱規則

一一

●政府發行紙幣通用禁止ニ關スル法律 (三十一年法律第六號)

政府發行ノ紙幣ハ明治三十二年十二月三十一日限り其ノ通用ヲ廢止ス

●鑄造金銀銅貨幣紙幣等取扱規則 (九年第五十七號布告)

銀行又ハ爲替方又ハ兩替屋又ハ官廳ニ於テ備入候鑑定人等金銀銅貨幣紙幣ヲ鑑定ノ節鑄造品取扱規則左ノ通相定候條此旨布告候事

第一條 新金銀銅貨幣紙幣等鑄造品ハ詳ニ其原由及持主ノ宿所姓名ヲ尋テ其面前ニ於テ斷截シ速ニ其最寄警察出張所或ハ屯所或ハ區戸長ニ差出シ其額未チ申立ツヘシ若シ官廳ニ關スルモ該廳ヨリ警察官署ニ通知スヘシ

但持主立會ハサル時ハ必ス代理人ヲ出サシムヘシ遠隔ノ地ヨリ遞送シ來レル者ハ立會人ヲ取リテ之ヲ斷截シ速ニ遞送主ヘ報告スヘシ

第二條 鑑定ヲ誤リ正貨紙幣ヲ斷截シタル時ハ改人ヨリ持主ヘ其斷截シタル正貨紙幣ヲ其同等ノ品ト引換相渡シ其斷截シタル紙幣ハ事由ヲ詳記シテ管轄廳ヘ引換ヲ乞フヘシ

第三條 若シ正貨定メ難キモノ有之節ハ其原由及持主ノ宿所姓名ヲ分明ニ記載シ持主ノ面前ニ於テ其品ヲ封シ持主ヲシテ之ニ封印セシメ鑑定者ヨリ管轄廳ヘ差出スヘシ然ル時ハ該廳ニ於テ詳細吟味ノ上全ク正品ニシテ其製充分ナラス通用ノ際人民ノ疑ヲ生スヘキモノハ直ニ持主ヘ引換渡スヘシ其鑄造品ハ第一條ニ依ル

第四條 古金銀貨幣鑄造品ハ持主又ハ代理人ノ面前ニ於テ斷截シ直ニ其持主又ハ代理人ヘ還付スヘシ
第五條 鑄造ヲ知ルト雖モ斷截セスシテ持主ニ還付シ又ハ申立チ等閑ニスル者ハ相當ノ處罰ヲ爲スヘシ

●新舊公債證書發行條例 (八年第九十九號布告)

明治五壬申年迄ノ間從來舊諸藩縣ニ於テ内國人民ヨリノ通債ヲ改テ政府ノ公債トシ之ヲ大藏省ニ引受ケ其債主ヘハ各此公債證書ヲ交付シ定期ヲ逐テ之ヲ償却スルニ付政府ニ於テ制定シタル條々左ノ如シ

新舊公債ノ區別及ロ證書ノ種類記號ノ品別等ヲ明ニス

第一節 弘化元甲辰年ヨリ慶應三丁卯年迄舊諸藩ニ於テ借用シタルモノヲ舊公債ト稱シ明治元戊辰年太政更始以後明治四辛未年七月廢藩迄及明治五壬申年迄ノ間舊諸藩ニ於テ借用シタルモノヲ新公債ト稱スヘシ

第二節 新舊公債トモ各其高チ五分シテ第一第二第三第四第五トシ證書面ノ金高チ五百圓三百圓壹百圓五十圓貳拾五圓ノ五種ニ區別スヘシ

第三節 新公債證書ハ向後抽籤ノ方法ヲ以テ其ノ元金ヲ償却スヘキニ付便宜ノ爲メ四十七部分ニ別チ(いろは)四十七字ノ記號ヲ證書面ニ命名スヘシ

第二條 新舊公債償却ノ年度及ヒ利息ノ割合ヲ明ニス

第一節 舊公債ハ無利息ニシテ元金ハ明治五年壬申ヨリ明治五十四年迄五十年賦トシ其年ノ拂方ニ當リタル賦金ヲ毎年十二月一日ヨリ同十五日迄ノ間ニ之ヲ拂渡スヘシ

第二節 新公債ハ利息付ニシテ明治八年ヨリ明治二十九年迄二十二年ノ間チ限リ大藏省ノ都合ニヨリ毎年或ハ隔年ニ抽籤ノ方法ヲ以テ其年ニ拂戻スヘキ證書ノ記號ヲ公定シ其割合ニ隨テ之ヲ拂戻スヘシ

第十三編 新舊公債證書發行條例

一一三

シ其利息ハ年々元高百分ノ四トシ明治五年壬申ヨリ明治二十九年迄毎年六月一日ヨリ十五日迄十二
月一日ヨリ十五日迄ノ間ニ之ヲ拂渡スヘシ 本文總テ其金類ハ大藏省ノ都合ニヨリ(九年第五十號布
告)上六月以上ノ
十字ヲ加フ)

但明治八年ヨリ抽籤法ヲ以テ元金ヲ拂戻ニ當リテハ年四分ノ利息月割ヲ以テ右抽籤法行ヒシ月迄

ノ分三ヶ渡スヘシ

第一節 (二十一年勅令第七十
三號ヲ以テ削除ス)

第二節 (二十一年勅令第七十
三號ヲ以テ削除ス)

第三節 (二十一年勅令第七十
三號ヲ以テ削除ス)

第四節 (二十一年勅令第七十
三號ヲ以テ削除ス)

第五節 (二十一年勅令第七十
三號ヲ以テ削除ス)

第六節 (二十一年勅令第七十
三號ヲ以テ削除ス)

第七節 (二十一年勅令第七十
三號ヲ以テ削除ス)

第八節 (二十一年勅令第七十
三號ヲ以テ削除ス)

第九節 (二十一年勅令第七十
三號ヲ以テ削除ス)

第十節 (二十一年勅令第七十
三號ヲ以テ削除ス)

第十一節 (二十一年勅令第七十
三號ヲ以テ削除ス)

第十二節 (二十一年勅令第七十
三號ヲ以テ削除ス)

第十三節 (二十一年勅令第七十
三號ヲ以テ削除ス)

第十四節 (二十一年勅令第七十
三號ヲ以テ削除ス)

第十五節 (二十一年勅令第七十
三號ヲ以テ削除ス)

第十六節 (二十一年勅令第七十
三號ヲ以テ削除ス)

第十七節 (二十一年勅令第七十
三號ヲ以テ削除ス)

第十八節 (二十一年勅令第七十
三號ヲ以テ削除ス)

第十九節 (二十一年勅令第七十
三號ヲ以テ削除ス)

第二十節 (二十一年勅令第七十
三號ヲ以テ削除ス)

第二十一節 (二十一年勅令第七十
三號ヲ以テ削除ス)

第二十二節 (二十一年勅令第七十
三號ヲ以テ削除ス)

第二十三節 (二十一年勅令第七十
三號ヲ以テ削除ス)

第二十四節 (二十一年勅令第七十
三號ヲ以テ削除ス)

第二十五節 (二十一年勅令第七十
三號ヲ以テ削除ス)

第二十六節 (二十一年勅令第七十
三號ヲ以テ削除ス)

第二十七節 (二十一年勅令第七十
三號ヲ以テ削除ス)

第二十八節 (二十一年勅令第七十
三號ヲ以テ削除ス)

第二十九節 (二十一年勅令第七十
三號ヲ以テ削除ス)

第三十節 (二十一年勅令第七十
三號ヲ以テ削除ス)

第三十一節 (二十一年勅令第七十
三號ヲ以テ削除ス)

第三十二節 (二十一年勅令第七十
三號ヲ以テ削除ス)

第三十三節 (二十一年勅令第七十
三號ヲ以テ削除ス)

第三十四節 (二十一年勅令第七十
三號ヲ以テ削除ス)

第三十五節 (二十一年勅令第七十
三號ヲ以テ削除ス)

第三十六節 (二十一年勅令第七十
三號ヲ以テ削除ス)

第三十七節 (二十一年勅令第七十
三號ヲ以テ削除ス)

第三十八節 (二十一年勅令第七十
三號ヲ以テ削除ス)

第三十九節 (二十一年勅令第七十
三號ヲ以テ削除ス)

第四十節 (二十一年勅令第七十
三號ヲ以テ削除ス)

第四十一節 (二十一年勅令第七十
三號ヲ以テ削除ス)

第四十二節 (二十一年勅令第七十
三號ヲ以テ削除ス)

第四十三節 (二十一年勅令第七十
三號ヲ以テ削除ス)

第四十四節 (二十一年勅令第七十
三號ヲ以テ削除ス)

第四十五節 (二十一年勅令第七十
三號ヲ以テ削除ス)

第四十六節 (二十一年勅令第七十
三號ヲ以テ削除ス)

第四十七節 (二十一年勅令第七十
三號ヲ以テ削除ス)

第四十八節 (二十一年勅令第七十
三號ヲ以テ削除ス)

第十二條

第一節 政府ノ都合ニヨリテ要用ノ事アレハ利息及償却年限ヲ除クノ外此條例ヲ增補シ又ハ之ヲ改正
スルコトアルヘシ

第二節 右增補改正等アレハ速ニ其由ヲ世上ニ公告スヘシ

右之通相定候事

(附録圖面略之)

●金祿公債證書發行條例 (九年第八號布告)

第一條 華士族及ヒ平民トモ各自ノ家祿賞典祿給與ノ制限ヲ改メ一時ニ之ヲ下渡スコトト爲シ以テ公
債證書ヲ付與スヘシ

一 永世祿ノ者ヘハ

金祿元高 賞典祿アルモノハ家
祿ニ合計シ元高トス

年限

五ヶ年分

五ヶ年二分五厘分

五ヶ年半分

五ヶ年七分五厘分

六ヶ年分

六ヶ年二分五厘分

一五

第十三編

金祿公債證書發行條例

第十三編 金祿公債證書發行條例

二萬圓未滿	六ヶ年半年分
一萬圓未滿	六ヶ年七分五厘分
七千五百圓未滿	七ヶ年分
七千五百圓以上	七ヶ年二分五厘分
五千圓未滿	七ヶ年半年分
二千五百圓未滿	七ヶ年七分五厘分
二千五百圓以上	八ヶ年分
千圓未滿	八ヶ年二分五厘分
千圓以上	八ヶ年半年分
九百圓未滿	八ヶ年七分五厘分
九百圓以上	九ヶ年分
八百圓未滿	九ヶ年二分五厘分
八百圓以上	九ヶ年半年分
七百圓未滿	九ヶ年七分五厘分
七百圓以上	九ヶ年分
六百圓未滿	九ヶ年二分五厘分
六百圓以上	九ヶ年半年分
五百圓未滿	九ヶ年七分五厘分
五百圓以上	
四百圓未滿	
四百圓以上	
三百圓未滿	
三百圓以上	
二百圓未滿	
二百圓以上	
一百圓未滿	
一百圓以上	

右一ヶ年五分ノ利子ヲ給ス

右一ヶ年六分ノ利子ヲ給ス

三百圓未滿	十ヶ年分
二百五十圓未滿	十ヶ年二分五厘分
二百五十圓以上	十ヶ年半年分
二百圓未滿	十ヶ年分
二百圓以上	十一ヶ年分
一百五十圓未滿	
一百五十圓以上	十一ヶ年半年分
一百圓未滿	十二ヶ年分
七十五圓未滿	十二ヶ年半年分
七十五圓以上	十三ヶ年分
五十圓未滿	十三ヶ年半年分
五十圓以上	十四ヶ年分
四十圓未滿	
四十圓以上	
三十圓未滿	
三十圓以上	
二十圓未滿	
二十圓以上	
十圓未滿	
十圓以上	
五圓未滿	
五圓以上	
二圓未滿	
二圓以上	
一圓未滿	
一圓以上	

右一ヶ年七分ノ利子ヲ給ス

一終身祿ノ者ヘハ

右永世祿年限十分ノ五ヲ給ス

但利子ハ永世祿ノ割合ト同シ

一年限祿ノ者ヘハ

第十三編 金祿公債證書發行條例

第十三編 公債證書發行條例

十年以上ノ者ハ右永世祿年限十分ノ四ヲ給ス
 十年未滿ノ者ハ右永世祿年限十分ノ三五ヲ給ス
 八年以上ノ者ハ右永世祿年限十分ノ三ヲ給ス
 六年未滿ノ者ハ右永世祿年限十分ノ二五ヲ給ス
 四年未滿ノ者ハ右永世祿年限十分ノ二ヲ給ス
 三年未滿ノ者ハ右永世祿年限十分ノ一五ヲ給ス
 二年ノ者ハ右永世祿年限十分ノ一五ヲ給ス

但利子ハ永世祿ノ割合ト同シ

第二條 此公債證書ノ利子下渡シハ明治十年分ハ十一月翌年五月ニ相渡シ以後之レニ準シ年々兩度ニ下渡ス

但(十一年第廿六號布告ヲ以テ但書ヲ追加シ十二年第二十六號布告ヲ以テ改正シ二十一年勅令第七十三號ヲ以テ削除ス)

第三條 家祿賞典元高ヲ付與スル年限ニヨリテ利子ノ差異ヲ生スル元高ニ向テ公債證書ヲ付與スル制限左ノ如シ

- 一金一萬圓 家祿賞典祿合高
- 此六ヶ年半分金六萬五千圓此公債證書ノ利子一ヶ年五歩金三千二百五十圓下成ル
- 一金九千九百圓 家祿賞典祿合高
- 此六ヶ年七分五厘分金六萬六千八百二十五圓此公債證書ノ利子一ヶ年五歩金三千三百四十一圓廿五錢下ナル

右比較九千九百圓ノ方利子九十一圓廿五錢ノ過ト成ル然ル時ハ一萬圓ノ利子金額ニ超過セサルヲ以テ制限トナス故ニ九十一圓廿五錢ヲ引去リ利子三千二百五十圓ニ適當スル公債證書ノ下渡ヲ以テ規則トス其他右ニ類似ノ件ハ皆之ニ準ス

- 第四條 此公債證書ハ利子ノ差ニヨリ區別アリト云モ其發行スル種類ハ左ノ如シ
- 五圓 十圓 廿五圓 五十圓 百圓
- 三百圓 五百圓 千圓 五千圓
- 第五條 前條公債證書ヲ付與スル元高ニ當リテ公債證書ニ未滿ノ端金ハ都テ通貨ニテ相渡スヘシ
- 第六條 此公債證書ノ元金ハ五ヶ年間之ヲ据置キ六ヶ年目ヨリ大藏省ノ都合ニ因リ毎年抽職ノ方法ヲ以テ之ヲ消却シ都合三十ヶ年間ニ悉皆之ヲ消却スヘシ
- 第七條 此公債證書發行ニ付テノ順序其外トモ此條例外ノ事件ハ都テ新舊公債證書發行條例ノ通りタルト心得ヘシ

家祿賞典祿處分法 (三十年法律第五十號)

第一條 明治三年九月十日太政官布告藩制施行以後家祿賞典祿ヲ有シタル者及其ノ家名承繼人ニシテ明治九年八月太政官第百八號布告及同年十二月太政官第百五十二號布告施行ノ際其ノ祿高ニ對スル全部ノ給與ヲ受ケサル者若ハ相當額ノ給與ニ不足アル者明治四年七月二十四日祿高ニ關スル太政官布告ニ依リ調査シタル以後ノ祿高及其ノ調査以前ニ係ル藩制施行以後ノ祿高ニ錯誤アルトキハ本法施行ノ日ニ於テ其ノ本人又ハ其ノ家名承繼人ニ限リ其ノ給與未濟額ヲ明治九年八月太政官第百八號布告第一條及同年十二月太政官第百五十二號布告ノ率ニ據リ換算シ其ノ元金額ヲ祿高整理ノ爲發行

第十三編 家祿賞典祿處分法

スル公債證書ヲ以テ給與ス

但シ常事犯ノ爲没祿若ハ減祿セラレタル者ハ此ノ限ニ在ラス

第二條 明治六年十二月太政官第四百二十五號布告ニ據リ處分ヲ受ケタル者ニシテ其ノ祿高ニ對スル相當額ノ給與ニ不足アル者ハ其ノ本人及本法施行ノ日ニ於テ現ニ其ノ家名承繼人タル者ニ限リ其ノ給與未濟額ヲ明治六年十二月太政官第四百二十六號布告第一條ノ率ニ據リ換算シ其ノ元金額ヲ祿高整理ノ爲發行スル公債證書ヲ以テ給與ス

第三條 第一條及第二條ノ祿高ヲ金額ニ換算スルハ明治八年九月太政官第三百三十八號布告ニ據リ取調ヘタル既定ノ石代相場ニ據ル

第四條 第一條及第二條ノ給與ヲ受ケムトスル者ハ其ノ理由及證據ヲ具シ地方廳ヲ經由シテ大藏大臣ニ願出ツヘシ

但シ本法施行ノ日ヨリ一箇年以内ニ願出サルトキハ本法ノ給與ヲ受ケルコトヲ得ス

附則

第五條 此ノ法律ニ牴觸スル法律命令ハ此ノ法律施行ノ日ヨリ其ノ效力ヲ失フモノトス

●家祿賞典祿處分法施行法 (三十二年法律第八十四號)

第一條 家祿又ハ賞典祿ハ左ノ標準ニ據リ之ヲ調査ス

一 政府ノ布告布達其ノ他ノ命令ニ依リ定マリタル制度

一 明治四年七月十四日前各藩ニ於テ最後ニ定メタル制度 (各藩ニ於テ最後ニ定メタル制度ニシテ廢藩以後各府縣ニ於テ施行シタルモノトモ) 但各藩ニ於テ定メタル制度中他日ノ改正ヲ期シタルモノハ之ヲ問ハス

第二條 明治九年八月太政官布告第百八號第一條ニ依リ給與未濟額ヲ換算スル場合ニ於テハ同布告第

三條ヲモ適用ス

第三條 家祿賞典祿處分法第一條ニ依リ三箇年未滿ノ年限祿ニ對スル給與未濟額ヲ給與スル場合ニ於テハ明治九年八月太政官布告第百八號第一條二年ノ者ニ對スル換算率ヲ準用ス

家祿賞典祿處分法第二條ニ依リ年限祿ニ對スル給與未濟額ヲ給與スル場合ニ於テハ明治七年太政官布告第三十一號ヲ適用シ其ノ三箇年未滿ノ者ニ付テハ二年ノ者ニ對スル換算率ヲ準用ス

第四條 明治九年八月太政官布告第百八號及同年十二月太政官布告第百五十二號ノ率ニ依リ給與未濟額ヲ算出スル場合ニ於テハ祿高全部ニ付テ換算シタル額ヨリ既ニ給與シタル額ヲ控除ス

第五條 祿高整理ノ爲發行スル公債證書ハ一千萬圓以内トシ其ノ利率ハ一箇年百分ノ五トス

前項公債ノ利子仕拂期ハ毎年三月及九月トス

第六條 前條ノ公債證書ハ隨時之ヲ發行シ券面金額ノ計算ヲ以テ交付ス

前條ノ公債ニ關シ此ノ法律ニ規定セサル事項ニ付テハ明治十九年勅令第六十六號整理公債條例ヲ適用ス

第七條 公債證券券面金額ニ滿タサル端數ハ現金ヲ以テ給與ス

●鐵道費補充公債條例 (二十二年勅令第六號)

第一條 鐵道費補充公債ハ神奈川縣下戶塚橫須賀間滋賀縣下大津長濱間ノ鐵道布設資金ヲ補充スルカ爲メニ證書額面二百萬圓ヲ限リ募集スルモノトス

第二條 此公債募集ノ方法元金ノ償還年限利子歩合利子支拂期月及ヒ其他ノ事項ハ總テ明治十九年勅

令第六十六號整理公債條例ニ依ル

●海軍公債證書條例 (十九年勅令第四十七號)

第一條 海軍公債證書ハ海軍軍備ノ費途ニ充ツル爲メ一千七百萬圓ヲ限リ三箇年間に漸次之ヲ發行スルモノトス

第二條 此公債ノ利子ハ二箇年百分ノ五トス

第三條 此公債ノ元金ハ證書發行ノ年ヨリ五箇年據置其翌年ヨリ向三十箇年間に抽籤ヲ以テ之ヲ償還ス

第四條 此公債證書發行ノ價額ハ大藏大臣之ヲ定ム

第五條 公債證書ハ無記名利札附ニシテ千圓五百圓百圓ノ三種トス其様式ハ大藏大臣之ヲ定ム但應募者又ハ所有者ノ望ニ由リ記名トスルコトヲ得(二十年勅令第一號ヲ以テ改正)

第六條 此公債證書引受申込高毎期需用ノ高ニ超過スルトキハ其申込價額ノ高キモノヨリ順次證書ヲ交付シ需用額ニ滿ツルニ至テ之ヲ止ム

第七條 此公債ノ利子ハ毎年五月十一月ニ拂渡スモノトス

第八條 此公債證書抽籤ノ時ハ大藏省官吏三名以上會計検査院官吏二名以上及ヒ日本銀行役員二名以上立會ノ上之ヲ執行ス但此公債證書額面十萬圓以上ヲ有スルモノハ抽籤ノ席ニ臨ムコトヲ得(二十年勅令第七十六號)

第九條 此條例外ノ事項ハ總テ明治十九年勅令第六十六號整理公債條例ニ據ル(二十年勅令第一號ヲ以テ改正)

●整理公債條例 (十九年勅令第六十六號)

第一條 整理公債ハ從前發行ノ六分以上利附ノ内國債ヲ償還整理スルカ爲メニ募集スルモノトス

第二條 整理公債ハ一億七千五百萬圓ヲ限リ大藏大臣財政ノ便宜ヲ計リ漸次之ヲ募集スルモノトス

第三條 整理公債利子ノ割合ハ一箇年百分ノ五トス

第四條 整理公債ニ對シ發行スル證書ハ無記名利札附ニシテ五千圓千圓五百圓百圓五十圓ノ五種トス但應募者又ハ所有者ノ望ニ由リ記名スルコトヲ得

第五條 整理公債證書ノ様式ハ大藏大臣之ヲ定ム豫メ告示スヘシ

第六條 整理公債ヲ募集スルトキハ其總額價格應募申込日限應募金拂込度數等ハ大藏大臣之ヲ定ム豫メ告示スヘシ

大藏大臣ハ前項ノ手續ニ據ラス市場ノ時價ニ準シ整理公債證書ノ價格ヲ定メ臨時之ヲ發行シテ日本銀行ニ交付スルコトヲ得但發行シタル證書ノ金額及價格ハ大藏大臣發行ノ翌日之ヲ告示スヘシ(二十年勅令第四十六號ヲ以テ本項追加)

第七條 整理公債應募高毎期需用ノ額ニ超過スルトキハ大藏大臣ハ應募價格ノ高キモノヨリ順次證書ヲ交付シ需用額ニ滿ルニ至テ止ム其價格同シキモノハ申込ノ高チ割合減少スルモノトス

但時宜ニ依リ二百圓以下ノ應募者ニハ之ヲ減少セサルコトアルヘシ(二十一年勅令第四十號ヲ以テ但書追加)

第八條 整理公債應募金ノ拂込度數回ニ分ツ場合ニ於テ拂込期ノ末日マテニ拂込未済ノモノアルトキハ其翌日ヨリ現拂込日マテ一箇年百分ノ七ノ割合ヲ以テ利子ヲ徵收スヘシ

前項拂込期日後三ヶ月ヲ過キ猶ホ拂込ヲナサルトキハ公債證書ヲ交付セス且既ニ拂込ノ金額ハ還付セサルモノトス

第十三編 整理公債條例

第九條 整理公債元金ハ募集ノ年ヨリ五箇年据置其翌年ヨリ向五十箇年間ニ抽籤法ヲ以テ償還スルモノトス但償還金額ハ其時々大藏大臣之ヲ定メ豫メ告示スヘシ

第十條 整理公債元金償還ノ爲メ抽籤ヲ爲ストキハ日本銀行ノ本店ニ於テ大藏省官吏三名以上會計検査院官吏二名以上日本銀行役員二名以上立會ノ上之ヲ執行ス但整理公債證書額面三十萬圓以上ヲ有スルモノハ抽籤ニ出席スルコトヲ得

抽籤ノ後ハ日本銀行ヲシテ當籤證書ノ記號番號種類及ヒ金額等ヲ廣告セシムルモノトス

第十一條 整理公債ノ利子ハ毎年六月十二日ニ於テ支拂フモノトス

第十二條 整理公債ノ利子ハ其元金拂込ノ時月ノ十五日以前ニ在ルモノハ下半年分ヨリ支拂ヒ月ノ十六日以後ニ在ルモノハ翌月分ヨリ支拂ヒ元金償還ノ年ニ於テハ其償還ノ月マテ月割ヲ以テ支拂フモノトス

第十三條 整理公債證書ノ利札ハ利子請取ノ時其所有者各自之ヲ截斷シテ日本銀行本支店又ハ代理店ニ持參スヘシ

第十四條 整理公債元利ノ支拂ヲ請求セサルモノアルトキハ元金ハ償還ノ月ヨリ滿十五箇年利子ハ支拂ノ期月後滿五箇年ヲ過ケルハ之ヲ支拂ハサルヘシ但證書ノ紛失汚染及ヒ毀損等ニ由リ元利ノ支拂ヲ見合セ及ヒ訴訟事件ニ由リ請求ヲ爲シ難キ場合アルトキハ其間ノ日數ヲ算セス

第十五條 無記名證書記名ニ變換セントスルモノハ其請求書ニ月長ノ與書ヲ受ケ證書ヲ添ヘ日本銀行本支店又ハ代理店ヲ經由シテ大藏省ニ申出ヘシ

第十六條 記名證書ノ竄買讓渡ヲ爲シタルモノハ雙方連署ノ請求書ニ證書ヲ添ヘ日本銀行本支店又ハ代理店ニ差出シ名前書換ヲ請フヘシ

第十七條 記名證書ノ所有者死去シタルトキ其相續人ハ請求書ニ正當ノ相續人タルコトヲ證スル月長ノ與書ヲ受ケ前條名前書換ノ手續ヲ爲スヘシ

第十八條 記名證書ノ所有者ノ遺言ニ依リ相續人ニ非スシテ證書ヲ讓リ受ケルモノアルトキハ右相續人ヲ以テ保證人ト爲シ前條名前書換ノ手續ヲ爲スヘシ但相續人ナキ場合ニ於テハ前條所有者ノ親戚二名以上ヲ以テ保證人ト爲スヘシ

第十九條 記名證書ノ所有者身代限ノ處分ヲ受ケ證書ノ所有權他ヘ移轉シタルトキ其引受人ハ裁判所ノ證明書ヲ承ケ之ヲ證書ニ添ヘ前條名前書換ノ手續ヲ爲スヘシ

第二十條 整理公債證書若クハ其利札水火等ニ由リ消滅シタルトキハ二名以上ノ保證人ヲ立テ日本銀行本支店又ハ代理店ヲ經由シテ大藏省ニ届出代證書若クハ代利札ノ交付又ハ利子ノ支拂ヲ請求スルコトヲ得此場合ニ於テ大藏省ハ其消滅ノ證據明確ナリト認ムルトキハ直ニ代證書若クハ代利札ヲ交付シ又ハ利子ヲ支拂フヘシ

第二十一條 整理公債證書又ハ利札ヲ紛失シタルモノハ日本銀行本支店又ハ代理店ニ届出ヘシ其發見ノ時亦同シ

前項ノ届出アルトキハ銀行ハ直ニ其次第ヲ廣告スヘシ但廣告料ハ届出人ヨリ納メシムルモノトス

第二十二條 公債證書又ハ利札紛失ノ届出アルトキハ日本銀行本支店又ハ代理店ハ之カ支拂ヲ見合スヘシ

第二十三條 紛失届出ノ證書又ハ利札ヲ日本銀行支店又ハ代理店ニ持參スルモノアルトキハ銀行ハ之

第十三編 整理公債條例

二五

ヲ預リ置キ其旨ヲ届人ニ報知シ持參人ト届出人ト相當ノ手續ヲ經テ所有權ヲ證明スルヲ待テ其取扱
ヲ爲スヘシ

第二十四條 記名證書紛失届出後一回ノ利拂了リタル上ハ二名以上ノ保證人ヲ立テ日本銀行本支店又
ハ代理店ヲ經由シテ大藏省ニ申出代證書ヲ交付ヲ請求スルコトヲ得

第二十五條 紛失無記名證書其届出ヨリ滿六箇年ヲ過キ紛失利札其支拂期限ヨリ滿四箇年ヲ過キ猶ホ
發見セサルトキハ届出人ニ代證書ヲ交付シ又ハ利子ヲ支拂フヘシ但本文期限ヲ過キテ紛失證書又ハ
利札ヲ持參スルモノアルモ届出人ニ對シテノミ起訴ノ權アルモノトス

第二十六條 紛失證書ノ當職ハ無効ノモノトス
第二十七條 整理公債證書ヲ汚染又ハ毀損シタルトキハ日本銀行本支店又ハ代理店ヲ經由シテ其證書
ヲ大藏省ニ差出シ代證書ヲ交付ヲ請求スルコトヲ得大藏省ニ於テ其真正ヲ鑑別シ得ヘキモノニハ代
證書ヲ交付シ鑑別シ難キモノニハ其取扱總テ紛失證書ノ例ニ準セシム

第二十八條 第十五條ノ證書交換ヲ受クルトキ第十六條第十七條第十八條第十九條ノ名前書換ノトキ
第二十條第二十四條第二十五條第二十七條ノ代證書ヲ受クルトキ及ヒ記名證書ノ取扱店ヲ變更スル
トキハ日本銀行本支店又ハ代理店ハ相當ノ手数料ヲ本人ヨリ納メシムルコトヲ得

第二十九條 第二十條第二十四條ノ保證人ハ日本銀行本支店又ハ代理店ニ於テ満足スルモノニ限ルヘ
シ
第三十條 従前ノ發行ノ六分以上利附ノ公債證書ヲ所有スルモノハ元金償還ノ時本人ノ請求ニ由リ
大藏省ノ都合ヲ以テ整理公債證書ヲ交付スルコトアルヘシ

第三十一條 整理公債證書ノ製造費發行費及ヒ募集利年ノ利子ハ募集金ヲ以テ支出スルコトヲ得

第三十二條 整理公債ノ募集償還利子ノ拂渡證書ノ書換等ニ關スル取扱手續ハ大藏大臣之ヲ定メ日本
銀行ヲシテ其事務ヲ取扱ハシム

●軍費支辨ノ爲メ公債募集方 (二十七年法律第二十五號)

清國及朝鮮國トノ交渉事件ニ關スル軍費支辨ノ爲メ壹億圓ヲ限リ一箇年六朱以下ノ利子ヲ以テ漸次公
債ヲ募集シ若クハ借入金ヲ爲スコトヲ得
但募集借入ノ方法規約償還年限其他必要ナル事項ハ大藏大臣之ヲ定ム

●同上 (二十八年法律第八號)

清國トノ交渉事件ニ關スル軍費支辨ノ爲更ニ壹億圓ヲ限リ一箇年六朱以上ノ利子ヲ以テ漸次公債ヲ募
集シ若クハ借入金ヲ爲スコトヲ得
但シ募集ノ價額及募集借入ノ方法規約償還年限其他必要ナル事項ハ大藏大臣之ヲ定ム

●軍事公債條例 (二十七年勅令第四百十四號)

第一條 軍事公債ハ勅令第四百十三號ニ依リ金額五千萬圓ヲ限リ漸次募集スルモノトス
第二條 此ノ公債ノ利子ハ一箇年百分ノ六以下トシ元金償還ニ至ルマテ毎年六月及十二月ノ兩度ニ之
ヲ支拂フ

第三條 此ノ公債ノ元金ハ證書發行ノ年ヨリ五箇年據置其ノ翌年ヨリ向五十箇年以内ニ償還ス

第四條 此ノ公債ヲ募集スルニ付キ其ノ總額價額利子歩合應募申込日限應募金拂込度數其ノ他必
要ナル事項ハ大藏大臣之ヲ定ム

第十三編 軍費支辨ノ爲メ公債募集方 軍事公債條例

第五條 此ノ公債證書ノ交付元利仕拂ニ關スル時効證書ノ取扱其ノ他此ノ條例ヲ以テ規定セサル事項ハ總テ明治十九年勅令第六十六號整理公債條例ニ據ル

●事業公債條例 (二十九年法律第五十九號)

第一條 事業公債ハ既設官線鐵道改良、北海道鐵道建設、製鋼事業、電話擴張ノ費途、葉煙草專賣資金及國防事業ノ費用ニ充ツルカ爲證書額面壹億參千五百萬圓ヲ限リ漸次之ヲ募集ス

第二條 本公債ノ利子ハ一箇年百分ノ五以下トシ募集ノ都度大藏大臣之ヲ定ム

第三條 本公債ニ關シ條本例ニ規定セサルモノハ明治十九年勅令第六十六條整理公債條例ノ各條項ヲ適用ス

適用ス

●國債ヲ外國ニ於テ募集スル場合ニ關スル法律 (三十二年法律第一號)

明治二十五年法律第四號鐵道敷設法明治二十九年法律第五十九號事業公債條例及明治二十九年法律第九十三號北海道鐵道敷設法ニ據ル公債ヲ外國ニ於テ募集スル場合ニハ外國貨幣ヲ以テ證書ノ金額ヲ記載シ其ノ證書ノ種類、元金ノ據置年限、募集、償還、利子ノ計算及仕拂ニ關スル方法其ノ他必要ナル手續ハ命令ヲ以テ之ヲ定ムルコトヲ得但シ償還期限ハ公債募集ノ年ヨリ起算シ五十五年ヲ超ユルコトヲ得ス

●英國倫敦ニ於テ募集スル公債ニ關スル手續方法 (三十二年大藏省令第二十二號)

第一條 帝國四分利付英貨公債一千萬磅ノ募集ハ橫濱正金銀行、(パリス)銀行、香港上海銀行及「チャイナード」銀行ノ組織スル「シンダケート」ヲシテ之ヲ引受ケシム

第二條 此ノ公債證券ハ無記名利札付トシ英貨ヲ以テ其ノ金額ヲ記載シ五十磅壹百磅及五百磅ノ三種トス

第三條 此ノ公債ノ利率ハ一箇年百分ノ四トス

第四條 此ノ公債ノ元金ハ明治三十二年一月一日ヨリ起算シ十箇年間据置キタル後四十五箇年間ニ抽

還法ニ依リ便宜之ヲ償還スヘシ

第五條 此ノ公債ノ利子ハ毎年六月十二月ニ於テ仕拂フヘシ

第六條 元金ノ拂込ハ明治三十二年六月ヨリ十月マテ六回トシ本年分ノ利子ハ十二月ニ於テ半箇年分ヲ仕拂フヘシ

●大藏省證券條例 (十七年第二十四號布告)

第一條 大藏省證券ハ出納上一時使用ノ爲メ大藏省ヨリ發行スルモノトス

第二條 大藏省證券ハ無記名利付定期拂ニシテ其發行シタル年度ノ歲入ヲ以テ仕拂ヲ爲スモノトス

第三條 大藏省證券ノ發行金額及利子金額ハ「大藏卿」之ヲ豫定シ「太政官」ノ裁可ヲ受クヘシ

第四條 大藏省證券ハ百圓、五百圓、千圓、五千圓、壹萬圓及拾萬圓ノ六種ニ別テ其支拂期限ハ十二箇月以內トス(二十六年法律第十九號)

第五條 大藏省證券ハ何人ニテモ授受買賣スルヲ得

第六條 大藏省證券ノ仕拂及ヒ引換ニ關スル事務ハ日本銀行ニ於テ取扱ハシムヘシ

第七條 大藏省證券ノ所持人ハ其仕拂ノ期日ニ至リ日本銀行本支店又ハ代理店ニ於テ其仕拂ヲ請求スヘシ但シ其仕拂ハ通貨ヲ以テスルモノトス

第十三編 大藏省證券條例

第八條 大藏省證券ハ其仕拂期日ヨリ起算シ滿六ヶ月間ハ之ヲ仕拂フヘシ滿六ヶ月ヲ過ルトキハ一切仕拂ヲ爲サ、ルモノトス但仕拂期日後ハ利子ヲ付セザルモノトス

第九條 大藏省證券汚染又ハ毀損セシトキハ日本銀行本支店又ハ代理店ニ差出シ證券ノ引換ヲ請フヘシ但其券面金額記號番號及ヒ主要ノ印部ヲ検査シ其真正タルヲ券圖シ得ヘキ者ニアラサレハ引換サルヘシ

第十條 大藏省證券ノ所持人其證券ヲ亡失セシトキハ其事由並ニ券面ノ金額支拂期日記號番號及ヒ所有セシトキノ手續ヲ詳記シ日本銀行本支店又ハ代理店ヲ經テ大藏省ニ届出ヘシ大藏卿ハ其證券ノ授受賣買引換及ヒ仕拂ヲ差止ムヘキ旨ヲ告示スルモノトス但發見シタルトキハ同様ノ手續ヲ以テ届出スヘシ

第十一條 亡失セシ證券ハ之ヲ發見セサルモ日本銀行本支店又ハ代理店ニ於テ満足スル保證人二人以上ノ證明アルニ於テハ其元利金額ヲ仕拂フヘシ

第十二條 大藏省證券ヲ偽造者ヲハ變造シテ行使シタルモノハ刑法第二百四條第二項ニ依テ處斷ス

●國債證券買入銷却法 (二十九年法律第五號)

第一條 政府ハ毎年度國債費豫算定額以内ニ於テ國債證券ヲ買入レ之カ銷却ヲ爲スコトヲ得

第二條 國債證券ノ買入銷却ヲ爲シタルトキハ大藏大臣ハ其ノ證券ノ種類、番號、總額及其ノ買入價格ヲ告示スヘシ

第三條 銷却ノ爲ニスル國債證券ノ買入ハ隨意契約ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

●度量衡法 (二十四年法律第三號)

第一條 度量ハ尺、衡ハ貫ヲ以テ基本トス

第二條 度量衡ノ原器ハ白金、イリヂウム、合金製ノ棒及分銅トス其ノ棒ノ面ニ記シタル標線間ノ攝氏〇、一五度ニ於ケル長サ三十三分ノ十ヲ尺トシ分銅ノ質量四分ノ十五ヲ貫トス

第三條 度量衡ノ名稱命令ヲ定ムルコト左ノ如シ

度 尺ノ萬分ノ一、厘 尺ノ千分ノ一、分 尺ノ百分ノ一、寸 尺ノ十分ノ一、尺、丈 十尺、間 六尺、町 三百六十尺(六十間)、里 一萬二千九百六十尺(三十六町)

地積 畝 歩ノ百分ノ一、合 歩ノ十分ノ一、步 或ハ坪 六尺平方、畝 三十步、段 三百步、町 三千步

量 勺 升ノ百分ノ一、合 升ノ十分ノ一、升 六萬四千八百二十七立方分、斗 十升、石百升

衡 毛 貫ノ百萬分ノ一、厘 貫ノ十萬分ノ一、分 貫ノ萬分ノ一、匁 貫ノ千分ノ一、貫、斤 百六十匁

第四條 從來慣用ノ鯨尺ハ布帛ヲ度ルトキニ限り之ヲ用井ルコトヲ得

鯨尺一尺ハ一尺二寸五分下シ其ノ十倍ヲ鯨尺一丈、十分ノ一ヲ鯨尺一寸、百分ノ一ヲ鯨尺一分トス

第十三編 度量衡法

第五條

メートル法度量衡ハ左ニ掲ケル比較ニ依リ之ヲ適法ノモノトシ本條以下ノ規定ヲ適用ス

三三

度	厘	分	寸	尺	丈	間	町	里	地積	合	勺	斗	升	合	勺	斤	兩	錢	分	厘	毫	絲	忽	微
〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇
「ミヤメートル」	「センチメートル」	「デシメートル」	「メートル」	「デカメートル」	「ヘクタメートル」	「キロメートル」	「センチアール」	「アール」	「ヘクタール」	「リットル」	「デシリットル」	「リットル」	「デカリットル」	「ヘクトリットル」	「センチグラム」	「ミリグラム」	「マイクログラム」	「ナノグラム」	「ピコグラム」	「フェムトグラム」	「アトグラム」	「ゼプトグラム」	「ユグタグラム」	「セクショグラム」
〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇

畝	段	町	合	勺	斗	升	合	勺	斤	兩	錢	分	厘	毫	絲	忽	微
〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇
「リットル」	「リットル」	「リットル」	「リットル」	「リットル」	「リットル」	「リットル」	「リットル」	「リットル」	「リットル」	「リットル」	「リットル」	「リットル」	「リットル」	「リットル」	「リットル」	「リットル」	「リットル」
〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇	〇〇〇〇〇〇〇

第十三編 度量衡法

三三

分	〇、三七五〇〇	「デシグラム」	〇、〇二六六七
分	三、七五〇〇〇	「グラム」	一、〇二六六六七
分	三、七五〇、〇〇〇〇〇	「デカグラム」	一、〇二六六六七
分	六〇〇、〇〇〇〇〇	「ヘクトグラム」	一、〇二六六六七
斤		「キログラム」	一、〇二六六六七

第六條 度量衡ハ農商務大臣之ヲ保管ス

農商務大臣ハ度量衡ノ原器ニ依リ副原器二組ヲ製作セシメ原器ノ代用ニ供ス
副原器ノ一組ハ農商務大臣之ヲ保管シ他ノ一組ハ文部大臣之ヲ保管ス

第七條 農商務大臣ハ副原器ニ依リ地方原器ヲ製作セシムヘシ

地方原器ハ地方長官之ヲ保管シ度量衡檢定ノ標準ニ供スルモノトス

第八條 度量衡器ヲ製作シ修繕シ若ハ販賣セント欲スル者ハ地方長官ヲ經由シ農商務大臣ニ願出免許ヲ受クヘシ

製作ノ免許ヲ得タル者ハ修覆及販賣ヲナスコトヲ得

販賣ノ免許ヲ得タルモノハ桿秤ノ取締及錘絲ニシテ金屬ニアラサルモノニ限り修覆ヲ爲スコトヲ得
(二十六年法律第三號ヲ以テ本項追加)

免許ニ關スル年限、身元保證金其ノ他必要ナル制限ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第九條 度量衡器ヲ製作シ修繕シ若ハ輸入シテ販賣シ又ハ營業ノ目的ニ使用スルモノハ豫メ其ノ檢定

ヲ受クヘシ

營業ノ目的ニ使用スル度量衡器ハ前項檢定ノ外之ヲ修覆シタルトキ及定期間ニ於テ檢定ヲ受クヘシ
製作者、修覆者及販賣者桿秤ノ取締及錘絲ニシテ金屬ニアラサルモノ、修覆ヲ爲シタルトキハ其ノ
檢定ヲ受クルコトヲ要セス(二十六年法律第三號ヲ以テ本項追加)

官廳、公署、官立、公立ノ諸建設場又ハ貧民病院其ノ他ニ類スル建設場ニ於テ販賣授受及證明ノ爲ニ
使用スル度量衡器ハ營業ノ目的ニ使用スルモノニ準ス

第十條 度量衡器ノ種類、形狀、物質、檢定ノ定期及公差、檢定スヘキ目盛及分銅ノ最小定限ハ勅令ヲ以
テ之ヲ定ム

第十一條 度量衡器ノ檢定及取締ハ地方長官之ヲ管理ス

地方長官ハ市長町村長ヲシテ其ノ市町村内ニ於ケル度量衡器ノ取締ヲ行ハシメ及其ノ檢定ニ關スル
事務ヲ補助セシムルコトヲ得

第十二條 度量衡器ノ製作者、修覆者、販賣者及使用者ハ取締ノ爲ニ行フ該當吏員ノ臨檢ヲ拒ムコトヲ
得ス但シ吏員ハ主任タルノ證據ヲ携帶シテ之ヲ示スヘシ

第十三條 度量衡器ノ製作、修覆及販賣ノ免許ヲ受クルモノハ免許料ヲ、檢定ヲ受クル者ハ檢定料ヲ納
ムヘシ

免許料及檢定料ノ金額ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第十四條 度量衡器ノ製作者、修覆者若ハ販賣者ニシテ度量衡ニ關スル法律命令ニ違背シタルトキハ
農商務大臣ハ其ノ營業免許ヲ取消スコトヲ得

第十五條 免許ヲ受ケスシテ度量衡器ヲ製作シ若ハ修葺シテ販賣シタル者ハ二十圓以上三百圓以下ノ罰金ニ處ス

免許ヲ受ケスシテ度量衡器ヲ販賣シ又ハ檢定ヲ受ケサル度量衡器ヲ販賣シ若ハ營業ノ目的ニ使用シ及吏員ノ臨檢ヲ拒ミタル者ハ十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

差狂アル度量衡器ナルコトヲ知テ之ヲ販賣シ又ハ營業ノ目的ニ使用シタル者亦前項ニ同シ

第十六條 本法施行ノ細則ハ農商務大臣之ヲ定ム

附則

第十七條 本法ハ明治三十六年一月一日ヨリ之ヲ施行ス

第十八條 度量衡器ノ製作ニ限リ本法施行前六箇月以内ニ之ヲ免許スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ本法中製作ニ關スル條項ハ之ヲ適用ス

第十九條 從來度量衡製作者及賣捌ノ免許ヲ受ケタル者ハ更ニ免許ヲ受クルコトヲ要セス本法ノ規定ニ從ヒ其ノ營業ヲ繼續スルコトヲ得

第二十條 從來ノ度量衡器ハ本法施行ノ日ヨリ七箇年以内ニ本法ノ規定ニ依リ其ノ檢定ヲ受クヘシ檢定ヲ經サルモノハ其期限ヲ過クル後之ヲ販賣シ若ハ營業ノ目的ニ使用スルコトヲ得ス

第二十一條 從來ノ度量衡器ニシテ修葺シタルモノ、檢定ハ本法施行ノ日ヨリ七箇年ヲ限リ從來ノ檢査規則ニ依ル

第二十二條 明治八年太政官第三百三十五號達度量衡取締條例並檢査規則同九年第十七號布告度量衡改定規則及西洋形權衡ニ係ル從來ノ法令ハ本法施行ノ日ヨリ之ヲ廢止ス但シ度量衡取締條例附屬檢査

規則ハ前條ノ場合ニ限リ明治三十二年十二月三十一日マテ其ノ効力ヲ有ス

●度量衡器ノ制限其ノ製作修葺及販賣免許檢定 (三十年勅令第十六號)

第一條 度量衡器ノ種類、形狀及物質ヲ定ムルコト左ノ如シ (三十二年勅令第三百二十六號ヲ以テ改正)

第二條 營業ノ目的ニ使用スル度量衡器ハ明治三十二年ニ之ヲ檢定シ爾後五年目毎ニ之ヲ檢定ス

第三條 度量衡器ノ公差ヲ定ムルコト左ノ如シ(同上)

但シ分銅ハ内減ヲ許サス

第四條 檢定スヘキ度器、玻璃製量器ノ目盛及分銅最小定限ヲ定ムルコト左ノ如シ

度器ノ目盛

五厘 (一尺以下ノ度器)

一分 (十尺未満ノ度器)

一寸 (十尺以上ノ度器)

鯨尺一分 (各種鯨尺度器)

一「ミリメートル」 (一「メートル」以下ノ度器)

五「ミリメートル」 (五「メートル」未満ノ度器)

五「センチメートル」 (五「メートル」以上ノ度器)

玻璃製量器ノ目盛

全量ノ十分ノ一

分銅

第十三編 度量衡器ノ制限其ノ製作修葺及販賣免許檢定

第十三編 度量衡器ノ制限其ノ製作修覆及販賣免許并檢定

一 一厘
一 「センチグラム」

第五條 度量衡器ノ製作、修覆又ハ販賣ノ免許年限ハ十五箇年トス

第六條 度量衡器ノ製作、修覆又ハ販賣ヲ願出ル者ハ其ノ願書ニ左ノ事項ヲ詳記シタル營業ノ設計書ヲ添ヘ地方長官ヲ經由シ農商務大臣ニ差出スヘシ

製作、修覆ヲ願出ル者

- 一 製作場、修覆場ノ位置及構造
- 二 製作、修覆セントスル度量衡器ノ種類、形狀及物質
- 三 資本金
- 四 製作、修覆ニ使用スヘキ技師、職工ノ員數及其ノ職業別並ニ諸器械ノ種類

販賣ヲ願出ル者及製作者ニシテ販賣ヲ兼ヌル者

- 一 販賣所ノ位置及構造
- 二 販賣セントスル度量衡器ノ種類、形狀及物質
- 三 資本金

農商務大臣前項營業ノ設計ヲ不適當ト認ムルトキハ其ノ願書ヲ却下スヘシ

第七條 度量衡器ノ製作、修覆又ハ販賣ノ免許ヲ受ケタル者其ノ營業ノ設計ヲ變更セントスルトキハ地方長官ヲ經由シ農商務大臣ノ認可ヲ受クヘシ

第八條 度量衡器ノ製作、修覆又ハ販賣ノ免許ヲ受クル者ハ左ノ免許料ヲ納ムヘシ

度量衡器又ハ衡器ノ製作 金十五圓

度量衡器又ハ衡器ノ修覆 金十二圓

度量衡器又ハ衡器ノ販賣 金五圓

第九條 度量衡器ノ檢定ヲ受クル者ハ左ノ檢定料ヲ納ムヘシ

二段以上目盛シタル度量器ハ一段毎ニ其ノ檢定料ヲ納ムヘシ但シ曲リ尺ニシテ尺及「メートル」ヲ合セ盛ラサルモノハ此ノ限ニアラス
桿秤及壺秤ニシテ實「キログラム」トナ併セ目盛シタルモノハ其ノ目盛毎ニ檢定料ヲ納ムヘシ(同上)

(檢定料略)

第十條 第八條ノ免許料及第九條ノ檢定料ハ登記印紙ヲ以テ納ムヘシ

第十一條 度量衡器ノ製作、修覆又ハ販賣ノ免許ヲ受ケタル者ハ左ノ身元保證金ヲ納ムヘシ(同上)

度量衡器製作 金三百圓

量器製作 金三百圓

衡器製作 金五百圓

但シ桿秤ノミノ製作ハ金三百圓トス

度量衡器修覆 金二百圓

度量衡器販賣 金百圓

附則

第十二條 本令ハ明治三十年五月一日ヨリ施行ス

第十三編 度量衡器ノ制限其ノ製作修覆及販賣免許并檢定

第十三編 度量衡器ノ制限其ノ製作修葺及販賣免許并檢定 四〇

但シ本令第一條中量器ノ形狀、物質、種類、寸法、容積、第三條中量器ノ容量、寸法ノ公差及第四條中
玻璃製量器ノ目盛ノ最小制限ニ關スル規程ハ明治三十一年一月一日ヨリ施行ス

第十三條 本令施行以前檢定ヲ受ケタル度量衡器ノ檢定ニ付テハ明治三十五年二月三十一日マテ明治
二十四年勅令第百七十七號ノ規程ヲ適用ス

第十四編 學事

●教育勅語 (二十三年十月)

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ德兆
心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民父母
ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ
啓發シ德器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉
シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ如キハ獨リ朕力忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ爾祖先ノ遺
風ヲ顯彰スルニ足ラン

斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中
外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテ其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

●帝國大學令 (十九年勅令第三號)

第一條 帝國大學ハ國家ノ須要ニ應スル學術技藝ヲ教授シ及其蘊奧ヲ攷究スルヲ以テ目的トス

第二條 帝國大學ハ大學院及分科大學ヲ以テ構成ス大學院ハ學術技藝ノ蘊奧ヲ攷究シ分科大學ハ學術
技藝ノ理論及應用ヲ教授スル所トス

第三條 分科大學ノ學科ヲ卒ヘ定規ノ試験ヲ經タル者ニハ卒業證書ヲ授與ス

第四條 分科大學ノ卒業生若クハ之ト同等ノ學力ヲ有スル者ニシテ大學院ニ入り學術技藝ノ蘊奧ヲ攷
究シ定期ノ試験ヲ經タル者ニハ學位ヲ授與ス

第十四編 教育勅語

第十四編 帝國大學令

第五條 帝國大學總長ハ帝國大學ヲ總轄シ帝國大學内部ノ秩序ヲ保持ス(二十六年勅令第八十二號ヲ以テ改正)

第六條 帝國大學ニ評議會ヲ設ク(同上)
評議會ハ各分科大學長各分科大學教授各一名ヲ以テ會員トス

帝國大學總長ハ評議會ヲ召集シ其ノ議長トナル

第七條 教授ニシテ評議員タルモノハ各分科大學毎ニ教授ノ互選ニ依リ文部大臣之ヲ命ス(同上)
前項ノ評議員ハ三箇年ヲ以テ任トス但滿期ノ後再選セラル、コトヲ得

第八條 評議會ハ左ノ事項ヲ審議ス(二十九年勅令第七十五號及二十六年勅令第八十二號ヲ以テ改正)
第一 各分科大學ニ於ケル學科ノ設置廢止ノ件

第二 講座ノ種類ニ付諮詢ノ件

第三 大學内部ノ制規但勅令又ハ省令ヲ發スルノ必要アルモノハ其建議案

第四 學位授與ノ件

第五 其他文部大臣又ハ帝國大學總長ヨリ諮詢ノ件
評議會ハ高等教育ニ關スル事項ニ付其ノ意見ヲ文部大臣ニ建議スルコトヲ得

第九條 分科大學ハ法科大學醫科大學工科大學文科大學理科大學農科大學トス(同上)

第十條 分科大學長ハ分科大學ノ學務ヲ統理ス(二十三年勅令第九十三號及二十六年勅令第八十二號ヲ以テ改正)

第十一條 各分科大學ノ教官ハ教授及助教授トス(二十三年勅令第二百六十九號及二十六年勅令第八十二號ヲ以テ改正)

第十二條 必要アル場合ニ於テハ帝國大學總長ハ講師ヲ囑託スルコトヲ得(二十六年勅令第八十二號ヲ以テ改正)

第十三條 帝國大學ニ功勞アリ又ハ學術上効績アル者ニ對シ勅旨ニ由リ又ハ文部大臣ノ奏宣ニ由リ名

譽教授ノ名稱ヲ與フルコトアルヘシ(同上)
第十四條 各分科大學ニ教授會ヲ設ケ教授ヲ以テ會員トス(二十三年勅令第二百六十九號ヲ以テ削除シ二十六年勅令第八十二號ヲ以テ更ニ本

條ヲ加フ)
分科大學長ハ教授會ヲ召集シ議長トナル

第十五條 教授會ハ左ノ事項ヲ審議ス(二十六年勅令第八十二號)
第一 分科大學ノ學科課程ニ關スル件

第二 學生試験ノ件

第三 學位授與資格ノ審査

第四 其ノ他文部大臣又ハ帝國大學總長ヨリ諮詢ノ件

第十六條 分科大學長ハ必要アリト認ムルトキハ教授ノ外助教授又ハ囑託講師ヲ教授會ニ列席セシムルコトヲ得

第十七條 各分科大學ニ講座ヲ置キ教授ヲシテ之ヲ擔任セシム
教授ヲ缺ク場合ニ於テハ助教授又ハ囑託講師ヲシテ講座ヲ擔任セシムルコトアルヘシ

第十八條 講座ノ種類及其數ハ別ニ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第十九條 本令ハ明治二十六年九月十一日ヨリ施行ス

●京都帝國大學 (三十年勅令第二百九號)

第一條 京都ニ帝國大學ヲ置キ京都帝國大學ト稱ス

第二條 京都帝國大學ノ分科大學ハ帝國大學令第九條ニ依ラス法科大學醫科大學文科大學及ヒ理工科

第十四編 京都大學令

第十四編 高等學校令 師範教育令

四

大學トス

第三條 京都帝國大學ノ分科大學及分科大學中ノ各學科開設ノ期日ハ文部大臣之ヲ定ム

●高等學校令 (二十七年勅令第七十五號)

第一條 第一高等中學校、第二高等中學校、第三高等中學校、第四高等中學校及第五高等中學校ヲ高等學校ト改稱ス

第二條 高等學校ハ専門學科ヲ教授スル所トス但帝國大學ニ入學スル者ノ爲メ豫科ヲ設クルコトヲ得

第三條 高等學校ハ其ノ附屬トシテ低度ナル特別學科ヲ設クルコトヲ得

第四條 高等學校ニ於テ設クル所ノ學校及講座ノ數ハ文部大臣之ヲ定ム

附則

第五條 本令ハ明治二十七年九月十一日ヨリ施行ス但各高等學校ニ於テ學科ヲ設置スルノ時期ハ文部大臣之ヲ指定スヘシ

本令ヲ施行シ又ハ一部ヲ施行スル所ノ高等學校ニ於テ高等中學校ノ學科ヲ履修スル年期限内ニ在ル生徒ノ爲ニ舊學科ヲ存スルコトヲ得

●師範教育令 (三十年勅令第三百四十六號)

第一條 高等師範學校ハ師範學校尋常中學校及高等女學校ノ教員タルヘキ者ヲ養成スル所トス

女子高等師範學校ハ師範學校女子部及高等女學校ノ教員タルヘキ者ヲ養成スル所トス

師範學校ハ小學校ノ教員タルヘキ者ヲ養成スル所トス

前三項ニ記載シタル學校ニ於テハ順其信愛威重ノ徳性ヲ涵養スルコトヲ務ムヘシ

第二條 高等師範學校及女子高等師範學校ハ東京ニ各一校ヲ設置シ師範學校ハ北海道及各府縣ニ各一校若ハ數校ヲ設置ス

第三條 高等師範學校及女子高等師範學校ハ文部大臣ノ管理ニ屬シ師範學校ハ地方長官ノ管理ニ屬ス

第四條 師範學校ノ經費北海道及沖繩縣ヲ除クハ府縣稅又ハ地方稅ノ負擔トス

第五條 師範學校ノ設備ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第六條 高等師範學校女子高等師範學校及師範學校生徒ノ募集及卒業後ノ服務ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第七條 高等師範學校女子高等師範學校及師範學校生徒ノ學費ハ文部大臣ノ定ムル所ニ依リ其ノ學校ヨリ之ヲ支給スヘシ

前項ノ外文部大臣ノ定ムル所ニ依リ私費生ヲ置クコトヲ得

第八條 高等師範學校女子高等師範學校及師範學校ノ學科及其ノ程度並教科書ハ文部大臣之ヲ定ム

第九條 師範學校ニ豫備科小學校教員講習科及幼稚園保姆講習科ヲ置クコトヲ得

附則

第十條 本令ハ明治三十一年四月一日ヨリ施行ス

明治十九年勅令第十三號師範學校令ハ本令施行ノ日ヨリ廢止ス

第十一條 他ノ法令中尋常師範學校トアルハ本令施行ノ日ヨリ當然師範學校ト改正セラレタルモノト看做ス

●師範學校生徒定員 (三十年勅令第三百四十七號)

第十四編 師範學校生徒定員

五

第十四編 中學校令

六

第一條 師範學校ハ道府縣管内學齡兒童數三分ノ二ニ對シ一學級七十名ノ割合ヲ以テ算出スル全學級數ノ二十分ノ一以上ニ相當スル卒業生ヲ出スニ足ルヘキ生徒ヲ毎年募集スヘシ

第二條 男女生徒員數ノ割合ハ地方長官之ヲ定メ文部大臣ニ開申スヘシ

第三條 地方ノ情況ニ依リ女生徒ヲ置カサルトキハ其ノ事由ヲ具シテ文部大臣ノ認可ヲ經ヘシ

附則

第四條 本令ハ明治三十一年四月一日ヨリ施行ス

設備ノ都合ニ依リ已ムヲ得サル場合ニ於テハ地方長官ハ文部大臣ノ許可ヲ受ケ前項期限ヨリ一箇年以內生徒定員ニ關スル從前ノ規程ヲ適用スルコトヲ得

●中學校令 (三十二年勅令第二十八號)

第一條 中學校ハ男子ニ須要ナル高等普通教育ヲ爲スヲ以テ目的トス

第二條 北海道及府縣ニ於テハ土地ノ情況ニ應ジ一箇以上ノ中學校ヲ設置スヘシ

文部大臣ハ必要ト認ムル場合ニ於テ府縣ニ中學校ノ増設ヲ命スルコトヲ得

第三條 前條ノ中學校ノ經費ハ北海道及沖繩縣ヲ除ク外府縣ノ負擔トス

第四條 郡市町村(北海道及沖繩縣)又ハ町村學校組合ハ土地ノ情況ニ依リ須要ニシテ其ノ區域內小學教育ノ施設上妨ナキ場合ニ限リ中學校ヲ設置スルコトヲ得

第五條 私人ハ本令ノ規定ニ依リ中學校ヲ設クルコトヲ得

第六條 土地ノ情況ニ依リ中學校ノ分校ヲ必要トスルトキハ文部大臣ノ認可ヲ經テ之ヲ設置スルコトヲ得但シ一校ニ付一分校ニ限ル

第七條 中學校ノ設置廢止ハ文部大臣ノ認可ヲ受ケヘシ

中學校ノ設置廢止ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第八條 公立中學校ノ位置ハ文部大臣ノ認可ヲ經テ地方長官之ヲ定ム

第九條 中學校ノ修業年限ハ五箇年トス但シ一箇年以內ノ補習科ヲ置クコトヲ得

第十條 中學校ニ入學スルコトヲ得ル者ハ年齡十二年以上ニシテ高等小學校第二學年ノ課程ヲ卒リタル者又ハ之ト同等ノ學力ヲ有スル者タルヘシ

第十一條 中學校ノ學科及其ノ程度ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第十二條 中學校ノ教科書ハ文部大臣ノ檢定ヲ經タルモノニ就キ地方長官ノ認可ヲ經テ學校長之ヲ定ム但シ文部大臣ノ檢定ヲ經サル教科書ヲ使用スル必要アルトキハ地方長官ハ文部大臣ノ認可ヲ經テ

一時其ノ使用ヲ認可スルコトヲ得

中學校教科書ノ檢定ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第十三條 中學校ノ教員ハ文部大臣ノ授與シタル教員免許狀ヲ有スル者タルヘシ但シ文部大臣ノ定ムル所ニ依リ本文ノ免許狀ヲ有セサル者ヲ以テ之ニ充ツルコトヲ得

中學校教員免許狀ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第十四條 公立中學校職員ノ俸給旅費其ノ他諸給與ニ關スル規則ハ文部大臣ノ認可ヲ經テ地方長官之ヲ定ム

第十五條 中學校ノ編制及設備ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第十六條 公立中學校ニ於テハ授業料ヲ徵收スヘシ但シ特別ノ場合ニ於テハ之ヲ減免スルコトヲ得

第十四編 中學校令

七

授業料入學料等ニ關スル規則ハ公立學校ニ在リテハ地方長官ニ於テ私立學校ニ在リテハ設立者ニ於テ文部大臣ノ認可ヲ經テ之ヲ定ム

第十七條 本令ノ規定ニ依ラサル學校ハ中學校ト稱スルコトヲ得ス

第十八條 本令施行ノ爲ニ必要ナル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

附則

第十九條 本令ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

第二十條 既設ノ尋常中學校分校ニシテ第六條ノ制限ニ超過スルモノハ文部大臣ノ認可ヲ經テ本令施行ノ日ヨリ五箇年以内存置スルコトヲ得

第二十一條 明治十九年勅令第十五號中學校令第十二條ニ依リ設置シタル農業工業商業等ノ專修科ハ本令施行ノ日ニ於テ現ニ在學スル生徒ノ卒業スル迄之ヲ存置スルコトヲ得

第二十二條 既設ノ公私立尋常中學校ハ本令施行ノ日ヨリ中學校ト改稱ス
他ノ法令中尋常中學校トアルハ本令施行ノ日ヨリ當然中學校ト看做ス

●實業學校令 三十二年勅令第二十九號

第一條 實業學校ハ工業農業商業等ノ實業ニ從事スル者ニ須要ナル教育ヲ爲スヲ以テ目的トス

第二條 實業學校ノ種類ハ工業學校農業學校商業學校船舶學校及實業補習學校トス

蠶業學校山林學校獸醫學校及水産學校等ハ農業學校ト看做ス

徒弟學校ハ工業學校ノ種類トス

第三條 北海道及府縣ニ於テハ實業學校ヲ設置スルコトヲ得但シ道廳府縣立實業補習學校ハ他ノ道廳

府縣立實業學校ニ附設スル場合ニ限ル

文部大臣ハ土地ノ情況ニ應ジ必要ナル實業學校ノ設置ヲ府縣ニ命スルコトヲ得

第四條 前條ノ實業學校ノ經費ハ北海道及沖繩縣ヲ除ク外府縣ノ負擔トス

第五條 郡市町村(北海道及沖繩縣ノ區ヲ含ム)又ハ町村學校組合ハ土地ノ情況ニ依リ須要ニシテ其ノ區域内小學教

育ノ施設上妨ナキ場合ニ限リ實業學校ヲ設置スルコトヲ得

第六條 私人ハ本令ノ規定ニ依リ實業學校ヲ設置スルコトヲ得

第七條 工業學校農業學校商業學校船舶學校ノ設置廢止ハ文部大臣ノ認可ヲ受ケ實業補習學校ノ設置

廢止ハ地方長官ノ認可ヲ受クヘシ

實業學校ノ設置廢止ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第八條 實業學校ノ學科及其ノ程度ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第九條 實業學校ノ教科書ハ公立學校ニ在リテハ學校長ニ於テ私立學校ニ在リテハ設立者ニ於テ地方

長官ノ認可ヲ經テ之ヲ定ム

第十條 實業學校教員ノ資格ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第十一條 公立實業學校職員ノ俸給旅費其ノ他諸給與ニ關スル規則ハ文部大臣ノ認可ヲ經テ地方長官

之ヲ定ム

第十二條 公立實業補習學校職員ノ名稱待遇ハ公立小學校ノ例ニ依ル

第十三條 實業學校ノ編制及設備ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第十四條 實業學校ニ於テハ授業料ヲ徵收スルコトヲ得

第十四編 高等女學校令

第十五條 本令施行ノ爲ニ必要ナル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

附則

第十六條 本令ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

第十七條 本令ハ官立學校ニ適用セス

第十八條 他ノ法令中ニ技藝學校トアルハ本令施行ノ日ヨリ當然實業學校ト看做ス

第十九條 明治二十三年勅令第二百十五號小學校令中徒弟學校及實業補習學校ニ關スル規定ハ本令施行ノ日ヨリ其ノ效力ヲ失フ

●高等女學校令 (三十二年勅令第三十一號)

第一條 高等女學校ハ女子ニ須要ナル高等普通教育ヲ爲スヲ以テ目的トス

第二條 北海道及府縣ニ於テハ高等女學校ヲ設置スヘシ

前項ノ校數ハ土地ノ情況ニ應シ文部大臣ノ指揮ヲ承ケ地方長官之ヲ定ム

第三條 前條ノ高等女學校ノ經費ハ北海道及沖繩縣ヲ除クノ外府縣ノ負擔トス

第四條 郡市町村北海道及沖繩縣又ハ町村學校組合ハ土地ノ情況ニ依リ須要ニシテ其ノ區域内小學教育ノ施設上妨ナキ場合ニ限り高等女學校ヲ設置スルコトヲ得

第五條 郡市町村立ノ高等女學校ニシテ府縣立高等女學校ニ代用スルニ足ルヘキモノアルトキハ地方長官ニ於テ文部大臣ノ認可ヲ受ケ府縣費ヲ以テ相當ノ補助ヲ與ヘ第二條ノ設置ニ代フルコトヲ得

第六條 私人ハ本令ノ規定ニ依リ高等女學校ヲ設置スルコトヲ得

第七條 高等女學校ノ設置廢止ハ文部大臣ノ認可ヲ受クヘシ

高等女學校ノ設置廢止ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第八條 公立高等女學校ノ位置ハ文部大臣ノ認可ヲ經テ地方長官之ヲ定ム

第九條 高等女學校ノ修業年限ハ四箇年トス但シ土地ノ情況ニ依リ一箇年ヲ伸縮スルコトヲ得

高等女學校ニ於テハ二箇年以内ノ補習科ヲ置クコトヲ得

第十條 高等女學校ニ入學スルコトヲ得ル者ハ年齡十二年以上ニシテ高等小學校第二學年ノ課程ヲ卒リタル者又ハ之ト同等ノ學力ヲ有スル者タルヘシ

第十一條 高等女學校ニ於テハ女子ニ必要スル技藝ヲ專修セントスル者ノ爲ニ技藝專修科ヲ置クコトヲ得

ヲ得

高等女學校ニ於テハ其ノ卒業生ニシテ某學科ヲ專攻セントスル者ノ爲ニ專攻科ヲ置クコトヲ得

第十二條 高等女學校ノ學科及其程度ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第十三條 高等女學校ノ教科書ハ文部大臣ノ檢定ヲ經タルモノニ就キ地方長官ノ認可ヲ經テ學校長之ヲ定ム但シ文部大臣ノ檢定ヲ經サル教科書ヲ使用スル必要アルトキハ地方長官ハ文部大臣ノ認可ヲ經テ一時其ノ使用ヲ認可スルコトヲ得

高等女學校教科書ノ檢定ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第十四條 高等女學校ノ教員ハ文部大臣ノ授與シタル教員免許狀ヲ有スル者タルヘシ但シ文部大臣ノ定ムル所ニ依リ本文ノ免許狀ヲ有セサル者ヲ以テ之ニ充ツルコトヲ得

高等女學校教員ノ免許ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第十五條 公立高等女學校職員ノ俸給旅費其ノ他諸給與ニ關スル規則ハ文部大臣ノ認可ヲ經テ地方長

第十四編 高等女學校令

官之ヲ定ム

第十六條 高等女學校ノ編制及設備ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第十七條 公立高等女學校ニ於テハ授業料ヲ徵收スヘシ但シ特別ノ場合ニ於テハ之ヲ減免スルコトヲ得

授業料入學料等ニ關スル規則ハ公立學校ニ在リテハ地方長官ニ於テ私立學校ニ在リテハ設立者ニ於テ文部大臣ノ認可ヲ經テ之ヲ定ム

第十八條 本令ノ規定ニ依ラサル學校ハ高等女學校ト稱スルコトヲ得ス

第十九條 本令施行ノ爲ニ必要ナル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

附則

第二十條 本令ハ明治三十二年四月一日ヨリ施行ス

地方長官ハ文部大臣ノ認可ヲ受ケ本令施行ノ日ヨリ四箇年以内第二條ノ設置ヲ延期スルコトヲ得

●地方學事通則 (二十三年法律第八十九號)

第一條 町村ハ教育事務ノ爲勅令ノ規程ニ依リ町村學校組合ヲ設ク

町村學校組合ニハ町村制第十七條ヲ適用ス

第二條 市町村及町村學校組合ハ勅令ノ規程ニ依リ小學校教育事務ノ爲之ヲ數區ニ分畫ス

前項ノ場合ニ於テ其區ニ區會若クハ區總會ノ設ナキトキハ市制第十三條町村制第十四條ノ規程ヲ適用ス

一區若クハ數區ヲシテ專ラ使用セシムル小學校ニ關シテハ其區内ニ住居シ若クハ滞在シ又ハ土地家

屋ヲ所有シ營業(店舗ヲ定メサル行商ヲ除ク)ヲナス者ニ於テ設立維持ヲ負擔スヘシ但其區ノ所有財產アルトキハ其收入ヲ以テ先ツ其費用ニ充ツヘシ

市制第六十條町村制第六十四條ノ區長並其代理人ハ命令ノ定ムル所ニ從ヒ其區ニ屬スル國ノ教育事務ヲ補助執行ス

第三條 教育事務ニ關シテハ市町村内ノ區及町村組合若クハ其區ニ對シ市若クハ町村ニ關スル法律ノ規程ヲ適用スルコトヲ得

第四條 町村及町村學校組合若クハ其區ハ郡長ノ指定ニ從ヒ他町村又ハ町村學校組合若クハ其區ノ兒童教育事務ノ委託ニ應スヘシ

第五條 町村學校組合ヲ解ク場合町村學校組合内ノ某町村ヲシテ其小學校數校中ノ一校若クハ若干校ノ設立維持ヲ一町村限リ負擔セシムル場合又ハ町村學校組合内ノ某町村ヲシテ兒童教育事務ノ委託ヲ一町村限リ負擔セシムル場合ニ於テ財產處分ニ付關係町村ノ協議整ハサルトキハ郡參事會ニ於テ之ヲ議決スヘシ

兒童教育事務ノ委託ニ對スル報酬金ノ給否金額及其他必要ノ事項ニ付關係町村ノ協議整ハサルトキモ亦前項ノ例ニ依ル

第六條 府縣郡市町村及町村學校組合ハ教育事務ノ爲勅令ノ定ムル所ニ依リ學務委員ヲ置クヘシ

市町村内若クハ町村學校組合内ノ區ハ小學校教育事務ノ爲勅令ノ定ムル所ニ依リ學務委員ヲ置クコトヲ得

第七條 市町村立學校長其他校員學務委員及區長並其代理人等ノ執行スル國ノ教育事務ハ市制第三十

一條第二本文町村制第三十三條第二本文ニ依ルノ限ニ在ラス

第八條 府縣郡市町村吏員ニ對スル懲戒處分ニシテ國ノ教育事務取扱ニ關スルモノニ就キテハ其懲戒ノ規程ハ勅令ノ定ムル所ニ依ル

第九條 府縣郡市町村村學校組合及市町村內若クハ町村學校組合內ノ區ハ學校基本財産ヲ設クルコトヲ得

學校基本財産ハ單ニ某學校ノ爲之ヲ設ケ又ハ通シテ數學校ノ爲之ヲ設クルコトヲ得
學校基本財産ノ設置及處分ハ監督官廳ノ許可ヲ受クヘシ(二十九年法律第八十一號)
學校基本財産ノ收入ヲ教育ニ關スル目的ノ外ニ使用スルトキハ監督官廳ノ許可ヲ受クヘシ

第十條 府縣郡市町村村學校組合及市町村內若クハ町村學校組合內ノ區ハ教育ニ關スル寄附金等アルトキハ學校基本財産トナスヘシ但寄附者其使用ノ目的ヲ定ムルモノハ此限ニ在ラス
公立學校ノ授業料入學試驗料書器使用料等ハ學校基本財産トナスコトヲ得

府縣郡市町村村學校組合及市町村內若クハ町村學校組合內ノ區ハ歳出ノ殘餘ヲ以テ學校基本財産トナシ又ハ特ニ歳入ノ幾分ヲ増加シテ學校基本財産トナスコトヲ得(二十九年法律第八十一號ヲ以テ)
府縣郡市町村村學校組合及市町村內若クハ町村學校組合內ノ區ハ歳出ノ殘餘ヲ以テ學校基本財産トナシ又ハ特ニ歳入ノ幾分ヲ増加シテ學校基本財産トナスコトヲ得(二十九年法律第八十一號ヲ以テ)

第十一條 従前學校ノ爲設ケタル積立金等ニシテ市制第八十一條町村制第八十一條ニ依リ市町村基本財産ニ加入シタルモノハ本法實施後二年間ハ府縣郡參事會ノ許可ヲ受ケ之ヲ區分シテ學校基本財産トナスコトヲ得

第十二條 府縣制郡制市制町村制ニ規定シタル内務大臣ノ職務及關係ハ教育ニ關スル事項ニ就キテハ内務大臣ニ屬スルモノトス

第十三條 本法ハ市制町村制ヲ施行シタル府縣ニ施行スルモノトス其施行ノ時期ハ府縣知事ノ具申ニ依リ文部大臣之ヲ定ム

● 小學校令 (二十三年勅令第二百十五號)

第一章 小學校ノ本旨及種類

第一條 小學校ハ兒童身體ノ發達ニ留意シテ道德教育及國民教育ノ基礎並其生活ニ必須ナル普通ノ智識技能ヲ授クルヲ以テ本旨トス

第二條 小學校ハ之ヲ分テ尋常小學校及高等小學校トス

市町村若クハ町村學校組合又ハ其區ノ負擔ヲ以テ設置スルモノヲ市町村立小學校トシ一人若クハ數人ノ費用ヲ以テ設置スルモノヲ私立小學校トス

徒弟學校及實業補習學校モ亦小學校ノ種類トス(三十二年勅令第二十九號ニ依リ本令中徒弟學校及實業補習學校ニ關スル規定ヲ廢止ス以下倣之)

第二章 小學校ノ編制

第三條 尋常小學校ノ教科目ハ修身讀書作文習字算術體操トス

土地ノ情況ニ依リ體操ヲ缺クコトヲ得又日本地理日本歷史圖畫唱歌手工ノ一科目若クハ數科目ヲ加ヘ女兒ノ爲ニハ裁縫ヲ加フルコトヲ得

第四條 高等小學校ノ教科目ハ修身讀書作文習字算術日本地理日本歷史外國地理理科圖畫唱歌體操トス女兒ノ爲ニハ裁縫ヲ加フルモノトス

土地ノ情況ニ依リ外國地理唱歌ノ一科目若クハ二科目ヲ缺クコトヲ得又幾何ノ初步外國語農業商業手工ノ一科目若クハ數科目ヲ加フルコトヲ得

第十四編 小學校令

第十四編 小學校令

第五條 尋常小學校ノ教科ト高等小學校ノ教科ト一校ニ併セ置クコトヲ得

第六條 高等小學校ニ於テ土地ノ情況ニ依リ農科商科工科ノ一科若クハ數科ノ專修科ヲ置クコトヲ得 其專修科ハ正教科ニ併セ置キ又ハ之ニ代フルモノトス

第七條 尋常小學校又ハ高等小學校ニ補習科ヲ置クコトヲ得

第八條 尋常小學校ノ修業年限ハ三箇年又ハ四箇年トシ高等小學校ノ修業年限ハ二箇年三箇年又ハ四箇年トス

第九條 專修科補習科徒弟學校及實業補習學校ノ教科目及修業年限ハ文部大臣之ヲ定ム

第十條 小學校ノ某教科目ハ文部大臣定ムル所ノ規則ニ從ヒ之ヲ隨意科目トナシ又ハ之ヲ學習シ能ハサル兒童ニ課セサルコトヲ得

第十一條 第三條又ハ第四條ニ依リ小學校ノ教科目ヲ加除スルニハ市町村立小學校ニ就キテハ其市參事會又ハ町村長ニ於テ私立小學校ニ就キテハ其設立者ニ於テ府縣知事ノ許可ヲ受クヘシ

第五條ニ依リ尋常小學校ノ教科ト高等小學校ノ教科ト一校ニ併セ置キ又ハ其併置ヲ止ムルニハ市町村立小學校ニ就キテハ其市町村ニ於テ私立小學校ニ就キテハ其設立者ニ於テ府縣知事ノ許可ヲ受クヘシ

第六條第七條又ハ第八條ニ依リ正教科專修科若クハ補習科ヲ設置廢止シ又ハ修業年限ヲ定ムルニハ市町村立小學校ニ就キテハ其市町村ニ於テ私立小學ニ校就キテハ其設立者ニ於テ府縣知事ノ許可ヲ受クヘシ

第十二條 小學校教則ノ大綱ハ文部大臣之ヲ定ム

府縣知事ハ小學校教則ノ大綱ニ基キ其府縣ノ小學校教則ヲ定メ文部大臣ノ許可ヲ受クヘシ

第十三條 小學校ノ單級多級ノ制男女ヲ區別シ教授スヘキ場合多級ノ學校ニ學校長ヲ置クヘキ場合一教員ノ教授シ得ヘキ兒童ノ數等ニ關シテハ文部大臣之ヲ規定ス

第十四條 小學校ノ休業ハ日曜日ヲ除クノ外毎年九十日ヲ超エサルモノトス但徒弟學校實業補習學校補習科等ニ就キテハ此限ニ在ラス 特別ノ事情アルトキハ府縣知事ニ於テ文部大臣ノ許可ヲ受ケテ前項ニ依ラサルコトヲ得 傳染病ノ流行其他非常變災アルトキハ市内ニ在ル小學校ニ就キテハ府縣知事町村内ニ在ル小學校ニ就キテハ郡長ニ於テ一時之ヲ閉サシムヘシ其急迫ナル場合ニ於テハ市町村長ニ於テ亦之ヲ閉ツルコトヲ得

第十五條 小學校ノ每週教育時間ノ制限及祝日大祭日ノ儀式等ニ關シテハ文部大臣之ヲ規定ス

第十六條 小學校ノ教科用圖書ハ文部大臣ノ檢定シタルモノニ就キ小學校圖書審查委員ニ於テ審查シ府縣知事ノ許可ヲ受ケタルモノニ限ルヘシ

審查委員ハ府縣ニ置キ府縣官吏府縣參事會員尋常師範學校長教員及小學校教員ヲ以テ之ヲ組織ス 審查委員及審查ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第十七條 小學校ニ於テハ校舍校地校具體操場ヲ備ヘ又農科ヲ設クル小學校ニ於テハ農業練習場ヲ備フヘキモノトス

特別ノ事情アルトキハ體操場農業練習場ヲ備ヘサルコトヲ得此場合ニ於テハ市町村立小學校ニ就キテハ其市町村ニ於テ監督官廳ノ許可ヲ受クヘク市内ニ在ル私立小學校ニ就キテハ其設立者ニ於テ府

第十四編 小學校令

縣知事町村内ニ在ル私立小學校ニ就キテハ其設立者ニ於テ郡長ノ許可ヲ受クヘシ

第十八條 校舍校地校具體操場農業練習場ハ非常變災ノ場合ヲ除クノ外小學校ノ目的ニ關セサル事件ノ爲使用スルコトヲ得ス若シ特別ノ事情アリテ之ヲ使用セントスルトキハ市町村立小學校ニ就キテハ其ノ市町村長ニ於テ監督官廳ノ許可ヲ受クヘク市内ニ在ル私立小學校ニ就キテハ其設立者ニ於テ府縣知事町村内ニ在ル私立小學校ニ就テハ其設立者ニ於テ郡長ノ許可ヲ受クヘシ

第十九條 校舍校地校具體操場農業練習場ノ設備ニ關スル規則ハ文部大臣ノ定ムル所ノ準則ニ基キ府縣知事ニ於テ土地ノ情況ヲ量リ之ヲ定ムヘシ

第三章 就學

第二十條 兒童滿六歲ヨリ滿十四歲ニ至ル八箇年ヲ以テ學齡トス
學齡兒童ヲ保護スヘキ者ハ其學齡兒童ヲシテ尋常小學校ノ教科ヲ卒ラサル間ハ就學セシムルノ義務アルモノトス
前項ノ義務ハ兒童ノ學齡ニ達シタル年ノ學年ノ始メヨリ生スルモノトス

第二十一條 貧窮ノ爲又ハ兒童ノ疾病ノ爲其他已ムテ得サル事故ノ爲學齡兒童ヲ就學セシムルコト能ハサルトキハ學齡兒童ヲ保護スヘキ者ハ就學ノ猶豫又ハ免除ヲ市町村長ニ申立ツヘシ

市町村長ハ前項ノ申立ニ依リ必要ナリト認ムルトキ又ハ前項ノ申立ナキモ猶必要ナリト認ムルトキハ學齡兒童若クハ學齡兒童ヲ保護スヘキ者ニ就キテ検査ヲ行フコトヲ得
市町村長ハ本條第一項ノ申立又ハ第二項ノ検査ニ依リ就學ヲ猶豫シ又ハ免除スルトキハ監督官廳ノ

許可ヲ受クヘシ

第二十二條 學齡兒童ヲ保護スヘキ者ハ其學齡兒童ヲ市町村立小學校又ハ之ニ代用スル私立小學校ニ出席セシムヘシ若シ家庭又ハ其他ニ於テ尋常小學校ノ教科ヲ修メシメントスルトキハ其市町村長ノ許可ヲ受クヘシ

第二十三條 傳染病若クハ厭惡スヘキ疾病ニ罹ル兒童又ハ一家中ニ傳染病者アル兒童又ハ不貞ノ行爲アル兒童又ハ課業ニ堪ヘサル兒童等ハ小學校ニ出席スルコトヲ許サス
前項ニ關スル規則ハ府縣知事之ヲ定ム

第二十四條 學齡兒童ノ就學及家庭教育等ニ關スル規則ハ府縣知事之ヲ定メ文部大臣ノ許可ヲ受クヘシ

第四章 小學校ノ設置

第二十五條 各市町村ニ於テ其市町村内ノ學齡兒童ヲ就學セシムルニ足ルヘキ尋常小學校ヲ設置ス町村組合ニシテ組合會ヲ設ク其町村一切ノ事務ヲ共同處分スルモノハ本令ニ關シテハ之ヲ一町村ト同視ス

第二十六條 市ニ於テ設置スヘキ尋常小學校ノ校數並位置ハ府縣知事其市ノ意見ヲ聞キ之ヲ定ムヘシ町村ニ於テ設置スヘキ尋常小學校ノ校數並位置ハ郡長其町村ノ意見ヲ聞キ之ヲ定メ府縣知事ノ許可ヲ受クヘシ

第二十七條 郡長ハ一町村ノ資力其町村ニ相當スヘキ尋常小學校設置ノ負擔ニ堪ヘスト認定スル場合ニ於テハ其町村ヲシテ尋常小學校設置ノ爲他ノ町村ト學校組合ヲ設ケシメ及其學校組合ニ於テ設置

第十四編 小學校令

スヘキ尋常小學校ノ校數並位置ヲ定ムヘシ

第二十八條 郡長ハ一町村内ノ就學スヘキ學齡兒童ノ數一尋常小學校ヲ構成スルニ足ラスト認定スル場合又ハ一町村内ノ就學スヘキ學齡兒童ノ數一尋常小學校ヲ構成スルニ足ルモ道路ノ遠隔若クハ困難ナルカ爲適度ノ通學路程内ニ於テ一尋常小學校ヲ構成スルニ足ルヘキ數ヲ得ルコト能ハスト認定スル場合ニ於テハ左ノ例ニ依ルヘシ

一 其町村ヲシテ尋常小學校設置ノ爲他ノ町村ト學校組合ヲ設ケシメ及其學校組合ニ於テ設置スヘキ尋常小學校ノ校數並位置ヲ定ムヘシ

二 其町村ヲシテ其町村内ノ就學スヘキ學齡兒童ノ全部若クハ一部ノ教育事務ヲ他町村又ハ町村學校組合若クハ其區ニ委託セシムヘシ

郡長ハ町村ノ一部ニシテ前項ノ事情アルモノ道路ノ遠隔若クハ困難ナルカ爲其兒童ヲシテ其町村ノ尋常小學校ニ通學セシムルコト能ハサル事情アリト認定スル場合ニ於テハ前項ノ例ニ依ルヘシ

郡長ハ町村學校組合ニシテ前項ノ事情アリト認定スル場合ニ於テハ本條第一項第二ノ例ニ依ルヘシ

第二十九條 郡長ハ第二十七條及第二十八條ニ依リ町村學校組合ヲ設ケシムルトキハ關係町村及郡參事會ノ意見ヲ聞キ府縣知事ノ許可ヲ受クヘシ

其學校組合ニ於テ設置スヘキ尋常小學校ノ校數並位置ヲ定ムルトキモ亦同シ

郡長ハ第二十八條ニ依リ學校教育事務ヲ委託セシムルトキハ關係町村學校組合及郡參事會ノ意見ヲ聞キ府縣知事ノ許可ヲ受クヘシ

第三十條 府縣知事ハ市ニ於テ設置スヘキ尋常小學校校數アルトキハ市内ノ一區若クハ數區ニ對シ又ハ市ヲ分畫シテ數區トナシ其一區若クハ數區ニ對シ小學校設置ニ關スル負擔ノ爲其使用スヘキ小學校ヲ指定スルコトヲ得

郡長ハ町村若クハ町村學校組合ニシテ左ノ場合ニ該當スルモノアルトキ其他必須ノ事情アルトキハ町村内若クハ町村學校組合内ノ一區若クハ數區ニ對シ又ハ町村若クハ町村學校組合ヲ分畫シテ數區トナシ其一區若クハ數區ニ對シ小學校設置ニ關スル負擔若クハ兒童教育事務委託ノ爲其使用スヘキ小學校ヲ指定スルコトヲ得

一 町村若クハ町村學校組合ニ於テ設置スヘキ尋常小學校校數アルトキ

二 町村内若クハ其一部内又ハ町村學校組合ノ一部内ノ就學スヘキ兒童ノ全部若クハ一部ノ教育事務ヲ他町村又ハ町村學校若クハ其區ニ委託スルコトヲ要スル場所數箇所アルトキ

三 町村若クハ町村學校組合ニ於テ設置スヘキ尋常小學校ト其一部内ノ兒童ノ全部若クハ一部ノ教育事務ヲ他町村又ハ町村學校組合若クハ其區ニ委託スルコトヲ要スル場所トアルトキ

本條第一項ノ處分ヲナシ又ハ之ヲ止ムルトキハ關係市及區ノ意見ヲ聞クヘシ

本條第二項ノ處分ヲナシ又ハ之ヲ止ムルトキハ關係町村學校組合及區ノ意見ヲ聞キ府縣知事ノ許可ヲ受クヘシ

第三十一條 郡長ハ第二十八條第一項ノ事情アルモ同項ニ依ルコトヲ得スト認定スルトキハ府縣知事ノ許可ヲ受ケ其町村ヲシテ尋常小學校ノ設置又ハ兒童教育事務ノ委託ニ關ル義務ヲ免レシムルコトヲ得

郡長ハ第二十八條第二項若クハ第三項ノ事情アルモ同項ニ依ルコトヲ得スト認定スルトキハ府縣知

第十四編 小學校令

事ノ許可ヲ受ケ其町村若クハ町村學校組合ヲシテ其一部ニ關シテハ尋常小學校ノ設置又ハ兒童教育事務ノ委託ニ關ル義務ヲ免レシムルコトヲ得

本條ノ場合ニ於テモ町村若クハ町村學校組合ハ特別ノ事情アルトキハ猶郡長ノ許可ヲ受ケテ尋常小學校ヲ設置スルコトヲ得其小學校ノ位置ハ其町村若クハ町村學校組合ニ於テ之ヲ定メ郡長ノ許可ヲ受ケヘシ

第三十二條 郡長ハ町村學校組合ヲ解カシムルトキハ關係町村及郡參事會ノ意見ヲ聞キ府縣知事ノ許可ヲ受ケヘシ

郡長ハ町村内若クハ其一部内又ハ町村學校組合ノ一部内ノ就學スヘキ學齡兒童ノ全部若クハ一部ノ教育事務ヲ他町村又ハ町村學校組合若クハ其區ニ委託セシムルコトヲ止ムルトキハ關係町村町村學校組合及區ノ意見ヲ聞キ府縣知事ノ許可ヲ受ケヘシ

第三十三條 町村ハ一町村限りノ負擔ヲ以テ尋常小學校ヲ設置スルニ比シ猶優等ナル尋常小學校ヲ得ヘキ場合又ハ其費用ヲ輕減シ得ヘキ場合ニ於テハ數町村ノ協議ニ依リ郡長ノ許可ヲ受ケテ學校組合ヲ設ケ其學校組合ニ相當スル尋常小學校ヲ設置スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ設置スヘキ尋常小學校ノ校數並位置ハ其學校組合ヲ設ケルノ協議ヲナスノ際併セテ之ヲ定メ郡長ノ許可ヲ受ケヘシ

第三十四條 前條ノ町村學校組合ハ郡長ノ許可ヲ得ルニアラサレハ之ヲ解クコトヲ得ス

郡長ハ前條及本條ノ場合ニ於テハ府縣知事ノ指揮ヲ受ケヘシ

第三十五條 府縣知事ハ市内ニ私立尋常小學校アルトキハ其市立小學校ノ設置若クハ其一部ノ設備ヲ

猶豫シ其私立小學校ヲ以テ之ニ代用セシムルコトヲ得

郡長ハ町村内若クハ町村學校組合内ニ私立尋常小學校アルトキハ其町村立小學校ノ設置若クハ其一部ノ設備又ハ兒童教育事務委託ノ事ヲ猶豫シ其私立小學校ヲ以テ之ニ代用セシムルコトヲ得

私立小學校用ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第三十六條 市町村ハ府縣知事ノ許可ヲ受ケ高等小學校ヲ設置シ又ハ其區ヲシテ之ヲ設置セシムルコトヲ得

第三十七條 町村ハ數町村ノ協議ニ依リ郡長ノ許可ヲ受ケテ町村學校組合ヲ設ケ府縣知事ノ許可ヲ受ケテ高等小學校ヲ設置スルコトヲ得

郡長ハ前項ノ場合ニ於テハ府縣知事ノ指揮ヲ受ケヘシ

本條ノ學校組合ニ就キテハ第三十四條ヲ適用ス

第三十八條 第三十六條及第三十七條ノ規程ハ徒弟學校及實業補習學校ニ關シ之ヲ適用ス

第三十九條 第三十一條末項第三十三條第三十六條第三十七條及第三十八條ニ掲グル小學校ノ廢止ハ其設立ノ例ニ依ルヘシ

第四十條 市町村ハ幼稚園圖書館盲啞學校其他小學校ニ類スル各種學校等ヲ設置スルコトヲ得此場合ニ於テハ第三十六條第三十七條及第三十九條ノ規程ヲ適用ス

第四十一條 私立ノ小學校幼稚園圖書館盲啞學校其他小學校ニ類スル各種學校等ノ設立ハ其設立ニ於テ府縣知事ノ許可ヲ受ケ其廢止ハ之ヲ府縣知事ニ上申スヘシ

第四十二條 第四十條及第四十一條ノ學校等ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第十四編 小學校令

第五章 小學校ニ關スル府縣郡市町村ノ負擔及授業料

第四十三條 市町村立小學校ノ設置ニ關ル市町村及町村學校組合並區ノ負擔ノ概目左ノ如シ

- 一 校舍校地校具體操場農樂練習場ノ供給及支持
- 二 小學校教員ノ俸給旅費等
- 三 小學校ニ關スル諸費

第四十四條 市町村立小學校ニ就學スル兒童ヲ保護スヘキ者ハ授業料規則ニ依リ授業料ヲ納ムヘシ

授業料ハ市町村ニ屬スル收入トス

一家ノ兒童同時ニ數名就學スルトキハ授業料ヲ減スルコトヲ得

市町村長ハ兒童ヲ保護スヘキ者貧窮ナル場合ニ於テハ授業料ノ全額若クハ一部ヲ免除スヘシ

授業料ハ物品若クハ勞力ヲ以テ之ニ代フルヲ許スコトヲ得(三十年勅令第四百七號ヲ以テ改正)

第四十五條 郡長ハ町村學校組合ニ於テ設置スヘキ尋常小學校數校アルトキハ學校組合内ノ某町村ヲ

シテ其數校中ノ一校若クハ若干校ノ設置ヲ一町村限リ負擔セシムルコトヲ得

郡長ハ第二十八條ニ依リ町村學校組合ヲシテ兒童教育事務ヲ委託セシムルトキハ其學校組合内某町

村ヲシテ其委託ノ事ヲ一町村限リ負擔セシムルコトヲ得

本條ノ處分ヲナシ又ハ之ヲ止ムルトキハ關係町村及町村學校組合ノ意見ヲ聞キ府縣知事ノ許可ヲ受

クヘシ

第四十六條 郡長ニ於テ町村學校組合ノ資力其學校組合ニ相當スル尋常小學校設置ノ負擔ニ堪ヘスト

認定シ又ハ町村學校組合ノ一部タル町村ノ資力其學校組合費用ノ分擔ニ堪ヘスト認定スルトキハ郡

ハ郡費ヲ以テ其學校組合若クハ町村ニ相當ノ補助ヲ與フヘシ

前項ノ認定ニ就キテハ郡長ハ郡參事會ノ意見ヲ聞キ府縣知事ノ指揮ヲ受クヘシ

第四十七條 郡長ニ於テ第二十七條ノ事情アルモ同條ニ依ルコトヲ得スト認定スルトキハ郡ハ郡費ヲ

以テ其町村ニ相當ノ補助ヲ與フヘシ

前項ノ認可ニ就キテハ郡長ハ郡參事會ノ意見ヲ聞キ府縣知事ノ指揮ヲ受クヘシ

第四十八條 府縣知事ニ於テ市ノ資力其市ニ相當スル尋常小學校設置ノ負擔ニ堪ヘスト認定スル府縣

ハ府縣費ヲ以テ其市ニ相當ノ補助ヲ與フヘシ

前項ノ認定ニ就キテハ府縣知事ハ府縣參事會ノ意見ヲ聞キ文部大臣ノ指揮ヲ受クヘシ

第四十九條 府縣知事ニ於テ郡ノ資力第四十六條又ハ第四十七條ノ補助ヲ負擔スルニ堪ヘスト認定ス

ルトキハ府縣ハ府縣費ヲ以テ其郡ニ相當ノ補助ヲ與フヘシ

前項ノ認定ニ就キテハ府縣知事ハ府縣參事會ノ意見ヲ聞キ文部大臣ノ指揮ヲ受クヘシ

第五十條 區長並其代理者及學務委員ニ於テ國ノ教育事務ヲ執行スルカ爲ニ要スル費用ハ市町村若ク

ハ町村學校組合ノ負擔トス但區長並其代理者及區ノ學務委員ニ關スルモノハ市町村會又ハ町村學校

組合ノ議決ヲ以テ區ノ負擔トナスコトヲ得

第五十一條 郡視學ノ給料旅費退隱料等ハ郡ノ負擔トス其額及支給方法ハ郡會ノ決議ニ依リ府縣知事

ノ許可ヲ受ケテ之ヲ定ムヘシ(本條ハ三十二年勅令第二百六十二號ヲ以テ三十三年四月一日ヨリ廢

止ス)

第五十二條 小學校教員檢定委員及檢定ニ關スル費用ニシテ府縣ニ屬スルモノ並小學校教科用圖書等

第十四編 小學校令

第十四編 小學校令

査委員及審査ニ關スル費用ハ府縣ノ負擔トス

第六章 小學校長及教員

第五十三條 小學校ノ教員中小學校ノ某教科目ヲ教授スル者ヲ專科教員トシ其他ノ者ヲ本科教員トス
小學校ノ教員中小學校ノ教科目ヲ補助教授シ又ハ一時教授スル者ヲ准教員トシ其他ノ者ヲ正教員トス

第五十四條 小學校ノ教員ハ小學校教員免許狀ヲ有スル者タルヘシ

第五十五條 小學校教員免許狀ヲ得ルニハ檢定ニ合格スルコトヲ要ス

檢定ハ府縣ニ小學校教員檢定委員ヲ置キ之ヲ施行ス但某種ノ小學校教員ノ檢定ハ文部省ニ於テ之ヲ施行ス

檢定委員ノ組織權限檢定ノ科目方法受檢者ノ資格教員免許狀教員候補者等ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第五十六條 小學校長及教員ノ任用解職其他進退ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第五十七條 市町村立小學校長及教員ノ名稱及待遇法ハ別ニ定ムル所ニ依ル

第五十八條 市町村立小學校長及教員ノ任用解職ハ府縣知事之ヲ行フ

第五十九條 (二十六年勅令第二百六十號ヲ以テ第一項ヨリ三項マテヲ削除ス)

市町村立小學校長ハ府縣知事其學校ノ教員中ニ就キテ之ヲ兼任スルモノトス

第六十條 市町村立小學校教員ノ給料額及旅費額ノ標準并給料旅費其他諸給與ノ支給方法ハ府縣知事ニ於テ之ヲ規定シ文部大臣ノ許可ヲ受クヘシ

(三十九年勅令第二號ヲ以テ第二項ヲ削除ス)

市町村立小學校教員ノ給料ノ若干分ハ土地ノ使用又ハ物品ヲ以テ之ヲ換給スルコトヲ得但其歩合ハ府縣知事ニ於テ之ヲ規定シ文部大臣ノ許可ヲ受クヘシ

前項ニ依リ換給スル土地ノ使用又ハ物品ノ價格ハ市町村ノ申出ニ依リ監督官廳之ヲ確定ス其確定シタル價格ハ監督官廳ニ於テ必要ナリト認ムルトキハ何時ニテモ之ヲ訂正スルコトヲ得又監督官廳ハ前項ノ換給ヲ適當ナラスト認ムルトキハ之ヲ許サトコトヲ得

第六十一條 小學校長及教員ノ職務及服務規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第六十二條 市町村立小學校教員ハ學務委員ニ任セラレタルトキハ之ヲ辭スルコトヲ得ス

第六十三條 小學校長及教員ハ兒童ニ體罰ヲ加フルコトヲ得ス

第六十四條 市町村立小學校長及教員職務ヲ粗略ニシ若クハ職務上違奉スヘキ指令ニ違背シ又ハ體面ヲ汚辱スルノ行爲アルトキハ府縣知事懲戒處分ヲ行フヘシ其處分ハ譴責罰俸免職免許狀褫奪トス

私立小學校長及教員ニシテ前項ノ行爲アルトキハ其情狀ニ依リ府縣知事ニ於テ其業務ヲ停止シ又ハ免許狀ヲ褫奪スヘシ

免職若クハ業務停止又ハ免許狀褫奪ノ處分ニ不服アル者ハ十四日以内ニ文部大臣ニ訴願スルコトヲ得

市町村立小學校長及教員ノ懲戒處分ニ關スル規則並私立小學校長及教員ノ業務停止及免許狀褫奪ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第六十五條 小學校教員禁錮以上ノ刑ニ處セラレ又ハ信用若クハ風俗ヲ害スル罪ヲ犯シテ罰金ノ刑ニ

第十四編 小學校令

處セラレ又ハ監視ニ付セラレタルトキハ其職ヲ失ヒ免許狀ヲ褫奪セラル、モノトス

第七章 管理及監督

第六十六條 郡ニ郡視學一名ヲ置キ府縣知事之ヲ任免ス

(本條以下第六十九條迄ハ三十二年勅令第二百六十二號)

郡視學ハ府縣稅ヲ以テ支辨スル郡吏員ト同一ノ待遇ヲ受クルモノトス

第六十七條 郡視學ハ郡長ノ指揮命令ヲ受ケテ郡内ノ教育事務ヲ監督ス

第六十八條 府縣知事ハ郡ノ申出ニ依リ特ニ郡視學ヲ置カサルコトヲ得此場合ニ於テハ府縣知事ハ府縣稅ヲ以テ支辨スル郡吏員ノ一名ニ命シテ郡視學ノ名義ヲ以テ其職務ヲ行ハシム

第六十九條 郡視學ニ對スル懲戒處分ハ官吏懲戒法ニ依リ府縣知事之ヲ行フ

第七十條 市町村長ハ市町村ニ屬スル國ノ教育事務ヲ管掌シ市町村立小學校ヲ管理ス但學校長若クハ首席教員ノ管理ニ屬スル事務ハ之ヲ監督ス

第七十一條 市町村長ニ對スル懲戒分ニシテ國ノ教育事務取扱ニ關スルモノニ就キテハ市制第二百一十四條町村制第二百二十八條ヲ適用ス

第七十二條 市ハ教育事務ノ爲市制第六十一條ニ依リ學務委員ヲ置クヘシ但市會ノ議決ニ依ルノ限ニ在ラス

委員ニハ市立小學校男教員ヲ加フヘキモノトス其數ハ委員總數ノ四分之一ニ下ルコトヲ得ス
委員中教員ヨリ出ツル者ハ市長之ヲ任免ス

第七十三條 市ノ學務委員ハ市ニ屬スル國ノ教育事務ニ就キ市長ヲ補助ス

第七十四條 府縣知事ハ市ノ區長及其代理者ヲシテ市長ノ機關トナリ其指揮命令ヲ受ケテ區ニ屬スル國ノ教育事務ヲ補助執行セシムルコトヲ得

第七十五條 市ハ教育事務ノ爲市條例ノ規程ニ依リ市内ノ區ニ學務委員ヲ置クコトヲ得

委員ニハ市立小學校男教員ヲ加フヘキモノトス

第七十六條 府縣知事ハ前條ノ學務委員ヲシテ其區ニ屬スル國ノ教育事務ニ就キ市長區長及其代理者ヲ補助セシムルコトヲ得

第七十七條 市ノ區長及其代理者並第七十二條及第七十五條ノ學務委員ニ對スル懲戒處分ニシテ國ノ教育事務取扱ニ關スルモノニ就キテハ左ノ例ニ依ル

- 一 市制第六十四條第五ノ規程ニ依リ市長ニ於テ懲戒處分ヲ行フ此場合ニ於テハ市制第二百二十四條第二項第一ノ規程ヲ適用ス
- 二 市制第二百二十四條第一項及第二項第二第三第四ノ規程ヲ適用ス

第七十八條 第七十三條及第七十六條ノ事務執行ニ關スル市長區長及其代理者並學務委員ノ關係及其他必要ナル規則ハ府縣知事之ヲ定ムルコトヲ得

第七十九條 町村ハ教育事務ノ爲町村制第六十五條ニ依リ學務委員ヲ置クヘシ但町村會ノ議決ニ依ルノ限ニ在ラス

委員ニハ町村立小學校男教員ヲ加フヘキモノトス其數ハ委員總數ノ四分之一ニ下ルコトヲ得ス
委員中教員ヨリ出ツル者ハ町村長之ヲ任免ス

第八十條 町村ノ學務委員ハ町村ニ屬スル國ノ教育事務ニ就キ町村長ヲ補助ス

第十四編 小學校令

第八十一條 府縣知事ハ町村ノ區長及其代理者ヲシテ町村長ノ機關トナリ其指揮命令ヲ受クテ區ニ屬スル國ノ教育事務ヲ補助執行セシムルコトヲ得

第八十二條 町村ハ教育事務ノ爲町村條例ノ規程ニ依リ町村内ノ區ニ學務委員ヲ置クコトヲ得

委員ニハ町村立小學校男教員ヲ加フヘキモノトス

第八十三條 府縣知事ハ前條ノ學務委員ヲシテ其區ニ屬スル國ノ教育事務ニ就キ町村長區長並其代理者ヲ補助セシムルコトヲ得

第八十四條 町村ノ區長及其代理者並第七十九條及第八十二條ノ學務委員ニ對スル懲戒處分ニシテ國ノ教育事務取扱ニ關スルモノニ就キテハ左ノ例ニ依ル

- 一 町村制第六十八條第五ノ規程ニ依リ町村長ニ於テ懲戒處分ヲ行フ此場合ニ於テハ町村制第二百二十八條第二項第一ノ規程ヲ適用ス
- 二 町村制第二百二十八條第一項及第二項第二第三第四ノ規程ヲ適用ス

第八十五條 第八十條及第八十三條ノ事務執行ニ關スル町村長區長及其代理者並學務委員ノ關係及其他必要ナル規則ハ府縣知事之ヲ定ムルコトヲ得

第八十六條 町村學校組合ハ教育事務ノ爲條例ノ規程ニ依リ學務委員ヲ置クヘシ

町村學校組合ハ教育事務ノ爲條例ノ規程ニ依リ學校組合内ノ區ニ學務委員ヲ置クコトヲ得

本條ノ委員ニハ町村立小學校男教員ヲ加フヘキモノトス

ムルコトヲ得

第八十八條 第八十六條ノ學務委員ニ對スル懲戒處分ニシテ國ノ教育事務取扱ニ關スルモノニ就キテハ左ノ例ニ依ル

- 一 町村制第六十八條第五ノ規程ニ依リ組合長ニ於テ懲戒處分ヲ行フ此場合ニ於テハ町村制第二百二十八條第二項第一ノ規程ヲ適用ス
- 二 町村制第二百二十八條第一項及第二項第二第三第四ノ規程ヲ適用ス

第八十九條 第八十七條ノ事務執行ニ關スル組合長及學務委員ノ關係及其他必要ナル規則ハ府縣知事之ヲ定ムルコトヲ得

第九十條 特別ノ事情アル町村若クハ町村學校組合ニ於テハ府縣知事ノ許可ヲ受ケ學務委員ヲ置カサルコトヲ得

第九十一條 文部大臣ハ私立小學校ニシテ法律命令ノ規程ニ戾ルモノアルトキハ府縣知事ニ命シテ之ヲ閉鎖セシムルコトヲ得

第九十二條 前諸條ニ掲グル教育事務トハ專ラ小學校教育ノ範圍ニ屬スル事務ヲ謂フ

第八章 附則

第九十三條 本令ハ市制町村制ヲ施行シタル府縣ニ施行スルモノトス其施行ノ時期ハ府縣知事ノ具申ニ依リ文部大臣之ヲ定ム

第九十四條 幼稚園圖書館盲啞學校其他小學校ニ類スル各種學校等ニ就キテハ本令ノ規程ヲ適用スルコトヲ得但尋常小學校設置ノ義務就學ノ義務等ニ關スル規程ハ此限ニ在ラス

第十四編 小學校令

第十四編 小學校令施行方

第九十五條 本令ニ依ラスシテ授與シタル小學校教員免許狀ハ仍其効力ヲ有スルモノトス但正教員准
教員ノ別ハ文部大臣之ヲ定ム

第九十六條 明治十九年(四月)勅令第十四號小學校令其他本令ニ牴觸スル成規ハ本令施行ノ府縣ニ於
テ其施行ノ時期ヨリ總テ之ヲ廢止ス

●小學校令施行方 (二十四年勅令第五號)

明治二十三年勅令第二百十五號小學校令ハ其全部施行シ雖キ事狀アル地方ニ限リ府縣知事ノ具狀ニ依
リ文部大臣ノ指揮ヲ以テ其一部ヨリ漸次施行スルコトヲ得

●從來ノ市町村立小學校一時存續方 (二十四年勅令第十九號)

- 第一條 從來ノ市町村立尋常小學校ハ明治二十三年(十月)勅令第二百十五號小學校令施行ノ時期ニ遡
シタル後ニ於テモ一時之ヲ存續シ左ノ各款ニ依リ處分スヘシ
- 一 新ニ尋常小學校ノ校數并位置ヲ指定セラレタル市町村ト從來ノ尋常小學校設置區域ト其性質前
後同一ナル場合ニ於テハ從來ノ市町村立尋常小學校ニシテ其位置新ニ指定セラレタル市町村立
尋常小學校ノ位置ト同一ナルモノハ之ヲ繼續維持スヘシ
 - 二 新ニ尋常小學校ノ校數並位置ヲ指定セラレタル市町村ト從來ノ尋常小學校設置區域ト其性質前
後同一ナル場合ニ於テハ從來ノ市町村立尋常小學校ニシテ不用ニ屬スヘキモノハ學齡兒童ヲ就
學セシムルノ準備新ニ整フノ時ニ及ヒ之ヲ廢スヘシ
 - 三 兒童教育事務ヲ他ニ委託スヘキコトヲ命セラレタル町村ト從來ノ尋常小學校設置區域ト其性質
前後同一ナル場合ニ於テハ第二款ノ例ニ依ルヘシ

四 新ニ尋常小學校ノ校數並位置ヲ指定セラレ及兒童教育事務ヲ他ニ委託スヘキコトヲ命セラレタ
ル町村ト從來ノ尋常小學校設置區域ト其性質前後同一ナル場合ニ於テハ第一款第二款ノ例ニ依
ルヘシ

五 聯合町村ヨリ成立スル尋常小學校設置區域及其他市町村ノ區域ト同一ナラサル尋常小學校設置
區域ニ於テ設置スル尋常小學校ハ其區域ノ學齡兒童教育ノ事業ヲ引續クヘキ市町村、町村學校
組合又ハ市町村内若クハ町村學校組合内ノ區ニ於テ學齡兒童ヲ就學セシムルノ準備整フノ時ニ
及ヒ之ヲ廢スヘシ

第二條 市町村ニ於テ設置スル從來ノ高等小學校ハ其市町村會ノ議決ニ依リ明治二十三年(十月)勅令
第二百十五號小學校令施行ノ時期ニ違シタル後ニ於テモ一時之ヲ存續シ其市町村ニ於テ同令第三十
六條ノ手續ヲ經タル上之ヲ繼續維持スルコトヲ得

第三條 聯合町村ヨリ成立スル高等小學校設置區域及其他市町村ノ區域ト同一ナラサル高等小學校設
置區域ニ於テ設置スル高等小學校ハ其町村聯合會又ハ學區會ノ議決ニ依リ明治二十三年(十月)勅令
第二百十五號小學校令施行ノ時期ニ違シタル後ニ於テモ尙六箇月以内之ヲ存續スルコトヲ得

第四條 第一條乃至第三條ニ依リ一時存續スル小學校ニ係ル管理監督ノ事務ハ從來ノ職員ニ於テ從來
ノ例ニ依リ之ヲ擔任スヘシ

第五條 第一條乃至第三條ニ依リ一時存續スル小學校ニ係ル費用及第四條ノ事務ニ係ル費用ハ從來ノ
小學校設置區域ニ於テ從來ノ例ニ依リ之ヲ負擔スヘシ

第六條 第一條第五款及第三條ニ依リ一時存續シタル小學校ニ係ル事務引續方等ニ關シテハ府縣知事
第十四編 從來ノ市町村立小學校存續方

第十四編 市町村立小學校授業料ニ關スル件

三四

之ヲ規定スルコトヲ得

第七條 本令ノ規程ニ依リ難キ場合ニ在テハ府縣知事ニ於テ文部大臣ノ許可ヲ經テ特別ノ處分ヲ爲スコトヲ得

●市町村立小學校授業料ニ關スル件 (三十年勅令第四百七號)

第一條 市町村立尋常小學校授業料ハ一箇月三十錢以內トシ土地ノ情況ヲ量リ地方長官之ヲ定ム

第二條 高等小學校ノ授業料ハ地方長官之ヲ定メ文部大臣ノ許可ヲ受クヘシ

第三條 特別ノ規定アルモノノ外小學校授業料ニ關シ必要ナル事項ハ地方長官之ヲ定ム

附則

第四條 本令ハ明治三十一年四月一日ヨリ施行ス

明治二十三年勅令第二百十五號小學校令第四十四條第六項ハ本令施行ノ日ヨリ削除ス

●市町村立尋常小學校授業料免除方 (二十六年勅令第三十四號)

第一條 市町村ハ左ノ場合ニ限リ市町村會ノ議決ニ依リ府縣知事ノ許可ヲ受ク尋常小學校ニ就學スル全員又ハ或學級ノ兒童ノ授業料ヲ徵收セサルコトヲ得

一 學校基本財産ノ收入又ハ寄附金ニ依リ設備及維持ニ供給スルニ足ルトキ

二 設備及維持ニ供給スル爲ニ市町村ノ資力ニ對シ市町村稅ヲ過度ニ賦課スルニ至ラサルトキ

第二條 府縣知事ハ市町村會ノ議決前條ノ範圍ヲ超エ又ハ將來ニ尋常小學校ノ擴張ヲ妨クルモノト認ムルトキハ之ヲ許可セサルヘシ

●市町村立小學校授業料免除方 (二十九年勅令第五號)

第一條 戰地ニ於ケル勤務ニ起因シテ死去シタル者ノ遺族ニシテ左ニ掲グル者ニ對シテハ市町村立小學校ニ於テ授業料ヲ徵收セサルモノトス

一 軍人恩給法第二十七條第一ニ該當スル者及第四十條ニ掲ケタル者ニシテ第二十七條第一ニ該當スル者ノ同籍内ニ在ル子及弟妹

二 官吏遺族扶助法第四條第二項ニ該當スル者ノ同籍内ニ在ル子及弟妹

三 明治二十七年勅令第六十四號第一條第一項ニ該當スル者ノ同籍内ニ在ル子及弟妹
前項ノ遺族ニシテ扶助料ヲ受クヘキ者ナキ死者ノ前項ニ該當シタル事實明白ナルトキハ其ノ同籍内ニ在ル弟妹ニ對シ前項ヲ適用ス

第二條 戰地ニ於ケル勤務ニ起因シテ軍人恩給法第九條第十四條又ハ官吏恩給法第三條ニ該當スル者又ハ戰地ニ於テ傷疾ヲ受ケ疾病ニ罹リ明治二十七年勅令第六十四號ニ依リ手當金ヲ受クル者又ハ公務ニ依リ從軍シタル者ノ同籍内ニ在ル子及弟妹ニ對シテハ市町村會ノ議決ニ依リ市町村立小學校

ニ於テ授業料ヲ減額シ又ハ徵收セサルコトヲ得

第三條 本令ニ依リ減額シ又ハ徵收セサル授業料ニシテ已ニ納付済ノモノハ還付セサルモノトス但市町村會ニ於テ議決ヲ爲シタトキハ此ノ限ニアラス

●市制町村制ヲ施行セサル地方ノ小學教育規程 (二十五年勅令第四十號)

第一條 明治二十三年勅令第二百十五號小學校令中小學校ノ設置小學校ニ關スル府縣郡ノ負擔並郡視學事務委員區長及其代理者ニ關スル條規ヲ除キ其他ノ條規ハ市制町村制ヲ施行セサル地方ニ於テ左ノ例ニ依リ之ヲ施行ス

第十四編 市制町村制ヲ施行セサル地方ノ小學教育規程

三五

第十四編 公立學校職員休職

一 明治二十三年勅令第二百十五號小學校令ノ規定ニ依リ難キ場合アルトキハ北海道廳長官府縣知事ニ於テ文部大臣ノ許可ヲ受ケ特別ノ處分ヲナスコトヲ得

二 明治二十三年勅令第二百十五號小學校令ニ規定スル府縣知事ノ職務ハ北海道ニ於テハ北海道廳長官之ヲ行ヒ郡長ノ職務ハ郡長ヲ置カサル地方ニ於テハ島司區長又ハ之ニ準スヘキ者之ヲ行ヒ市長町村長若クハ市參事會ノ職務ハ島司郡區長又ハ之ニ準スヘキ者之ヲ行フヘシ

第二條 區町村ハ北海道廳長官府縣知事ノ指定スル區域及位置ニ於テ一小學校若クハ數小學校ヲ設置スヘシ

第三條 本令施行ノ時期ハ北海道廳長官府縣知事ノ具申ニ依リ文部大臣之ヲ定ム

第四條 明治十九年勅令第十四號小學校令其他本令ニ牴觸スル成規ハ本令施行ノ地方ニ於テ其施行ノ時期ヨリ總テ之ヲ廢止ス

●市制町村制ヲ施行セサル地方ノ學務委員ニ關スル件 (二十七年勅令第十一號)

第一條 市制町村制ヲ施行セサル地方ニ於テ地方長官必要ト認ムルトキハ小學校教育事務ノ爲ニ小學校設置區域ニ學務委員ヲ置クコトヲ命スルコトヲ得

第二條 學務委員ニ關スル費用ハ關係區域ノ負擔トス

第三條 學務委員ノ組織任免及其ノ他必要ナル規則ハ地方長官之ヲ定メ文部大臣ノ許可ヲ受クヘシ

●公立學校職員休職 (二十七年勅令第四百一十一號)

第一條 學校編制ノ變更事務ノ伸縮等ニ依リ其ノ人ヲ要セル場合其ノ他傷疾疾病等ノ事故アル場合ニ

於テハ地方長官ハ公立學校職員ニ休職ヲ命スルコトヲ得

豫備後備ノ軍籍ニ在ル公立學校職員戰時若クハ事變ニ際シ召集セラレタルモノハ當然休職ヲ命セラレタルモノトス

第一項ニ依ル休職ノ期限ハ一箇年トシ第二項ニ依ル休職ノ期限ハ其ノ事故ノ止ミタル後尙三箇月トス

第二條 休職ノ期限滿ツルトキハ當然退職者トス

第三條 休職者ハ職務ニ從事セス及俸給ヲ減セラレ又ハ全ク之ヲ受ケサルノ外總テ本職者ト異ルコトナシ

附則

第四條 本令ハ市町村立小學校教員ニ適用セス

第五條 明治二十七年六月五日以後本令施行以前ニ召集セラレタル者ハ其ノ召集ノ日ヨリ休職ヲ命セラレタルモノトス

●諸學校通則 (十九年勅令第十六號)

第一條 師範學校ヲ除クノ外各種ノ學校又ハ書籍館ヲ設置維持スルニ足ルヘキ金額ヲ寄附シ其管理ヲ文部大臣又ハ府知事「縣令」ニ願出ルモノアルトキハ之ヲ許可シ官立又ハ府縣立ト同一ニ之ヲ認ルコトヲ得但寄附人ノ望ニ依リ其名稱ヲ附スルコトヲ得

第二條 寄附金ハ其寄附人ヨリ指定セシ用途ノ外ニ支消スルコトヲ得ス

第三條 學校幼稚園書籍館等ノ設置變更廢止其府縣立ニ係ルモノハ文部大臣ノ認可ヲ經ヘク其區町村

第十四編 諸學校通則

第十四編 實業教育費國庫補助法

立ニ係ルモノハ府知事縣令ノ認可ヲ經ヘシ其私立ニ係ルモノハ設置變更ハ府知事縣令ノ認可ヲ經ヘク廢止ハ府知事縣令ニ上申スヘシ

第四條 凡教員ハ文部大臣若クハ府知事縣令ノ免許狀ヲ得タルモノタルヘシ

第五條 公立學校ノ用地ハ免稅タルヘシ

●實業教育費國庫補助法 (二十七年法律二十一號)

第一條 實業教育ヲ獎勵スル爲ニ國庫ハ毎年度金二十五萬圓ヲ支出シテ其ノ費用ヲ補助スヘシ (三十一年第十八號ヲ以テ改正)

第二條 公立ノ工業農業商業商船學校、徒弟學校及實業補習學校ニシテ實業ノ教育ニ效益アリト認めルトキハ文部大臣ハ其ノ學校ニ補助金ヲ交付スヘシ

監督官廳ノ認可ヲ經タル農工商組合ニ於テ設立シタル實業學校ハ文部大臣ノ特別ノ認定ニ依リ前項ニ準スルコトヲ得(同上)

第三條 各學校ニ交付スル補助金ハ其ノ設立者ノ負擔額ト同額以內ニ限ル

第四條 補助ヲ受クヘキ學校ハ文部大臣ノ認可シタル學則ニ依リ及同大臣ノ定ムル必要ノ條件ヲ充タスモノニ限ル

第五條 此法律ニ依リ補助ヲ受クル學校ノ設立者ハ補助年期間其ノ學校經費ヲ繼續支出スルノ義務アルモノトス

第六條 各學校ニ補助金ヲ交付スルハ五箇年ヲ以テ一期トス滿期ノ後必要ニ依リ仍之ヲ繼續スルコトヲ得但シ文部大臣ニ於テ學校ノ管理不適當ナリト認めタルトキ又ハ第四條其ノ他文部大臣ノ定ムル所ノ規則ニ違背シタルトキ又ハ第五條ノ義務ヲ盡スコト能ハサルトキハ補助年期間ト雖補助ヲ廢止若ハ停止スルコトヲ得

第七條 第二條ニ掲グルノ學校ノ教員ヲ養成スルノ必要アルトキハ文部大臣ハ第一條ニ掲グル金額ヨリ八分ノ一以內ヲ支出シ其ノ費用ニ充ツルコトヲ得(同上)

第八條 此ノ法律施行ノ爲ニ必要ナル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

附則

第九條 此ノ法律ハ明治二十七年九月一日ヨリ施行ス

●高等中學校設置區域內府縣委員會規則 (二十年勅令第四十六號)

第一條 委員會ハ九月若クハ十月ニ於テ高等中學校所在ノ府縣廳下ニ之ヲ開ク其開閉ハ學校設置區域內各府縣知事協議ノ上開會地ノ縣知府事ヨリ之ヲ命ス會期ハ七日以內トス但各府縣知事協議ノ上内務大臣ノ許可ヲ得テ開會ノ場所ヲ變更スルコトヲ得

第二條 委員ハ通常府縣會議ノ勅メ委員會ニ於テ議定シタル事件ノ要領ヲ報告スヘシ

第三條 委員ノ任期ハ一會期限リノモノトス

但前任ノ者ヲ再選スルコトヲ得

第四條 委員會ノ書記ハ開會地ノ府縣知事其廳ノ屬官若クハ雇員中ヨリ之ヲ選任スヘシ

第五條 委員會ノ諸費ハ之ヲ各府縣ニ平分シ其府縣會議諸費ヨリ支辨スヘシ

第六條 府縣會議規則第三條第四條第五條第九條第十一條第二十五條第二十六條第二十七條第二十八條第二十九條第三十條第三十二條第三十三條ハ此委員會ニ適用シ其條項中府縣知事ノ職權ニ屬スルモノ

第十四編

高等中學校設置區域內府縣委員會規則

第十四編 公立學校ニ學校醫ヲ置クノ件 學位令

四〇

ノ各府縣知事協議ノ上開會地ノ府縣知事之ヲ施行スヘシ

●公立學校ニ學校醫ヲ置クノ件 (三十一年勅令第二號)

第一條 北海道府縣郡市町村ノ設置ニ係ル學校ニ學校醫ヲ置ク

地方長官ハ特別ノ事情アルトキハ村立學校及人口五千未満ノ町立學校ニハ當分ノ内學校醫ヲ置カサルコトヲ得

第二條 學校醫ハ地方長官之ヲ囑託ス

第三條 學校衛生事務ニ關シ學校醫ハ地方長官郡市町村長ノ諮詢ニ應シテ意見ヲ述フヘク又之ニ建議

スルコトヲ得

第四條 學校醫ニハ其ノ學校經費ヨリ相當ノ手當ヲ給スヘシ

第五條 學校醫ノ囑託執務及其ノ他ニ關シ必要ナル規程ハ文部大臣之ヲ定ム

附則

第六條 本令ニ於テハ北海道沖繩縣ノ區ノ設置ニ係ル學校ハ町立學校ト同視シ沖繩縣ノ間切及島ノ設置ニ係ル學校ハ村立學校ト同視ス

第七條 市制町村制ヲ施行セサル地方ニ在テハ本令中市町村長ニ關スル規定ハ島司郡長(北海道ニ在テハ支廳長)區長區長又ハ之ニ準スヘキモノニ適用ス

第八條 本令ハ明治三十一年四月一日ヨリ施行ス

●學位令 (三十一年勅令第三百四十四號)

第一條 學位ハ法學博士醫學博士藥學博士工學博士文學博士理學博士農學博士林學博士及獸醫學

博士ノ九種トス

第二條 學位ハ文部大臣ニ於テ左ニ掲クル者ニ之ヲ授ク

一 帝國大學大學院ニ入り定規ノ試験ヲ經タル者又ハ論文ヲ提出シテ學位ヲ請求シ帝國大學分科大學教授會ニ於テ之ト同等以上ノ學力アリト認メタル者

二 博士會ニ於テ學位ヲ授クヘキ學力アリト認メタル者

帝國大學分科大學教授ニハ當該帝國大學總長ノ推薦ニ依リ文部大臣ニ於テ學位ヲ授クルヲ得

第三條 學位ヲ有スル者其ノ榮譽ヲ汚辱スルノ行爲アルトキハ學士會ノ議ヲ經テ文部大臣其ノ學位ヲ

褫奪ス

第四條 明治二十年勅令第十三號學位令ニ依リ授與シタル學位ハ本令ノ學位ト同一ノモノトス

第五條 本令ニ關スル細則ハ文部大臣之ヲ定ム

●博士會規則 (三十一年勅令第三百四十五號)

第一條 博士會ハ文部大臣ノ監督ニ屬シ明治三十一年勅令第三百四十四號學位令第一條第一項第二號及第三條ニ規定セル學位ノ授與視奪ニ關スル事項ヲ審査ス

第二條 博士會ハ法學博士會醫學博士會藥學博士會工學博士會文學博士會理學博士會林學博士會及獸醫學博士會ノ九種トシ當該博士ヲ以テ組織ス

第三條 博士會ハ文部大臣ニ於テ必要アリト認メタルトキ又ハ會長ヨリ具申アリタルトキハ文部大臣之ヲ召集ス

博士會ハ會員ノ過半数出席スルニアラサレハ議決スルコトヲ得ス

第十四編 博士會規則

四一

第十四編 文部省外國留學生規程

四二

第四條 學位授與ノ議事ハ出席會員三分ノ二以上學位候補ノ議事ハ出席會員四分ノ三以上ノ多數ニ依リ之ヲ決ス

前項ノ議決ハ無記名投票ヲ以テ之ヲ行フ

第五條 博士會會長ハ會員中ヨリ之ヲ互選シ文部大臣ノ認可ヲ受クヘシ

會長ハ會務ヲ總管シ議事ヲ整理シ其ノ議決ヲ文部大臣ニ具申ス

第六條 各博士會ヲ通シテ幹事一人ヲ置キ文部省高等官中ニ就キ文部大臣之ヲ命ス
幹事ハ各會長ノ指揮ヲ受ケ庶務ヲ整理ス

第七條 各博士會ヲ通シテ書記二人ヲ置キ文部屬ヲ以テ之ニ充ツ
書記ハ各會長及幹事ノ命ヲ受ケ議事ノ筆記及庶務ニ從事ス

第八條 博士會會員ニハ旅費日當等ヲ給與セス

第九條 博士會ノ議事規則ハ各博士會ニ於テ之ヲ定メ文部大臣ノ認可ヲ受クヘシ

附則

第十條 同種ノ博士七名ニ充タサル間當該博士會ノ職務ハ東京帝國大學評議會ニ於テ之ヲ行フ

●文部省外國留學生規程 (二十五年勅令第百二號)

第一條 文部省外國留學生ハ文部大臣ニ於テ特ニ須要ノ學術技藝ヲ研究セシメンカ爲ニ文部省直轄學校卒業ノ者又ハ文部省直轄學校教官ノ中ヨリ選拔差遣スルモノトス

第二條 (削除)

第三條 文部省外國留學生ノ專修スヘキ學科留學スヘキ邦國及留學年限等ハ文部大臣之ヲ指定ス

第四條 文部省外國留學生ニ支給スヘキ學資金ハ一箇年金千八百圓以内トシ旅費ハ外國旅費規則ニ依リ列任官ニ準シ之ヲ支給ス

特別ノ事由アルトキ又ハ各地ヲ巡歴シテ研究セシムルトキハ前項學資金ノ外特ニ相當ノ學資金ヲ増給スルコトヲ得但シ巡歴研究ノ爲學資金ヲ増給スルトキハ別ニ旅費ヲ支給セス (三十二年勅令第百二號ヲ以テ改正)

第五條 文部省直轄學校教官ニシテ外國留學ヲ命シタル者ハ本邦發程ノ日ヨリ歸朝ノ日マテ當該各學校教官定員ノ外ニ置キ本官ノ俸給ヲ支給セス但シ時宜ニ由リ特ニ俸給三分ノ一以内ヲ支給スルコトヲ得(同上)

第六條 文部省外國留學生ハ歸朝ノ日ヨリ其留學年數ノ二倍ニ當ル期間ハ文部大臣ノ指定スル職務ヲ辭スルコトヲ得ス

附則

明治二十五年及二十六年ニ限リ本令第四條第一項ノ學資金ハ銀貨千七十圓以内ヲ支給シ同條第二項ノ場合ニ於テハ銀貨千圓ヲ限リトス

●遞信省外國留學生規程 (三十年勅令第百三十四號)

第一條 遞信省外國留學生ハ遞信大臣ノ選拔ニ依リ海事ニ關シ殊ニ須要ノ學術技藝ヲ研究セシムル爲メ外國ニ派遣スルモノトス

第二條 遞信省外國留學生ノ人員ハ同時ニ六人ヲ超ユルコトヲ得ス

第三條 遞信省外國留學生ノ專修スヘキ學科留學スヘキ邦國及年限ハ遞信大臣之ヲ指定ス

第四條 遞信省外國留學生ノ學資金ハ一箇年英貨百八十磅以内トス

第十四編 遞信省外國留學生規程

四三

第十四編 遞信省外國留學生規程

留學中各地巡歴研究ノ必要アルトキ其ノ他特別ノ事由アルトキハ一箇年英貨六十磅以内ノ學資ヲ増給スルコトヲ得

第五條 遞信省外國留學生ノ旅費ハ外國旅費規則ニ依リ最下額ヲ支給ス在官者ニシテ外國留學ヲ命セラルタル者特ニ公務取調ヲ命セラレタルトキハ其ノ官相當ノ旅費ヲ支給スルコトヲ得

巡歴研究ノ爲メ學資金ヲ増給スルトキハ別ニ旅費ヲ支給セス

第六條 在官者ニシテ外國留學ヲ命セラレタル者ニハ本邦發程ノ日ヨリ歸朝ノ日マテ本官ノ俸給ヲ支給セス但シ特ニ公務取調ヲ命シタル場合ハ此ノ限ニアラス

第七條 遞信省外國留學生ハ歸朝ノ日ヨリ其ノ留學年數ノ二倍ニ當ル期限間ハ遞信大臣ノ指定スル職務ヲ辭スルコトヲ得ス

第十五編 軍事

●徵兵令 (二十二年法律第一號)

第一章 總則

第一條 日本帝國臣民ニシテ滿十七歳ヨリ滿四十歳迄ノ男子ハ總テ兵役ニ服スルノ義務アルモノトス

第二條 兵役ハ分テ常備兵役後備兵役補充兵役及國民兵役トス (二十八法律第十五號ヲ以テ補充兵役ハ四字ヲ追加ス)

第三條 常備兵役ハ分テ現役及豫備役トス

現役ハ陸軍ハ三箇年海軍ハ四箇年ニシテ滿二十歳ニ至リタル者之ニ服シ豫備役ハ陸軍ハ四箇年四箇月海軍ハ三箇年ニシテ現役ヲ終リタル者之ニ服ス (二十八法律第十五號ヲ以テ四箇月ノ三字ヲ追加ス)

第四條 後備兵役ハ五箇年ニシテ常備兵役ヲ終リタル者之ニ服ス

第五條 補充兵役ハ陸軍ニ在テハ第一補充兵役第二補充兵役トシ第一補充兵役ハ七箇年四箇月ニシテ其年所要ノ現役兵員ニ超過スル者ノ中所要ノ人員之ニ服シ第二補充兵役ハ一箇年四箇月ニシテ其年所要ノ第一補充兵員ニ超過スル者之ニ服ス又海軍ニ在テハ一箇年ニシテ其年所要ノ現役兵員ニ超過スル者之ニ服ス (二十八法律第十五號ヲ以テ本條追加)

第六條 國民兵役ハ分テ第一國民兵役第二國民兵役トス

第一國民兵役ハ後備兵役及第一補充兵役ヲ終リタル者之ニ服シ第二國民兵役ハ常備兵役後備兵役補充兵役及第一國民兵役ニ在ラサル者之ニ服ス (二十八法律第十五號ヲ以テ第五條ヲ本條ノ如ク改メ第六條ヨリ第九條マテテテ順次繰下ク)

第七條 各兵役ノ期限既ニ滿ルト雖モ戰時或ハ事變ニ際スルトキ若クハ臨時ニ演習或ハ觀兵ノ爲アル

第十五編 徵兵令

トキ若クハ航海中或ハ外國駐劄中ハ其期ヲ延スコトアル可シ
第八條 重罪ノ刑ニ處セラレタル者ハ兵役ニ服スルコトヲ許サス

第二章 服役

第九條 陸軍現役兵及補充兵ハ毎年所要ノ人員ニ應ジ壯丁ノ身材藝能職業ニ從ヒ步兵騎兵砲兵工兵輜
重兵職工及雜卒ニ區別シ抽籤ノ法ニ依リ當籤ノ者ヲ以テ之ニ充ツ(二十八法律第十五號ヲ以テ及補充兵ノ四字ヲ追加ス)
海軍現役兵及補充兵ハ毎年所要ノ人員ニ應ジ沿海地方及島嶼ノ壯丁ヲ調査シ海軍ニ適スル職業ニ從
ヒ水兵火夫職工及雜卒ニ區別シ抽籤ノ法ニ依リ當籤ノ者ヲ以テ之ニ充ツ但海軍志願兵徵募規則ニ依
リ服役スル者ハ本令ノ限ニ在ラス(二十八法律第十五號ヲ以テ及補充兵ノ四字ヲ追加ス)

警備隊ヲ置キタル島嶼ノ壯丁(近衛師團ニ編入スル者ヲ除ク)ハ總テ之ヲ警備隊ニ充テ其地ニ於テ服役セシム但在營

期限ハ一箇年以内トス(二十八法律第十五號ヲ以テ追加ス)

第十條 雜卒ノ現役期限ハ其職務ニ因リ之ヲ短縮スルコトアル可シ但常備兵役ノ全期ハ之ヲ減スル
コトナシ

第十一條 抽籤番號ノ順序ニ由リ其年ノ補充兵役所要員ニ超過スル者ハ國民兵役ニ服セシム(二十八

第十五號ヲ以テ本條ヲ追加シ第十條ヲ第
十二條トシ以下第十四條マテ順次繰下ク)

第十二條 二十歳ニ至ラスト雖モ滿十七歳以上ノ者ハ志願ニ由リ現役ニ服スルコトヲ得
第十三條 滿十七歳以上滿二十八歳以下ニシテ官立學校ノ小學校及撰科等 府縣立師範學校中學校若クハ

文部大臣ニ於テ中學校ノ教科程度ト同等以上ト認メタル學校若クハ文部大臣ノ認可ヲ經タル學則ニ
依リ法律學政治學理化學ヲ教授スル私立學校ノ卒業證書ヲ所持シ若クハ陸軍試驗委員ノ試驗ニ及第

シ服役中食料被服裝具等ノ費用ヲ自辨シ豫備後備將校タル冀望ヲ有スル者ハ志願ニ由リ一箇年間陸
軍現役ニ服スルコトヲ得但費用ノ全額ヲ自辨シ能ハサルノ證アル者ニハ其幾部ヲ官給スルコトアル
ヘシ(二十二法律第二十九號二十六法律第四號
二十八法律第十五號ヲ以テ條中ヲ改正ス)

一年志願兵ノ豫備役後備役年限ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム(二十八法律第十五

滿十七歳以上滿二十八歳以下ニシテ官立府縣立師範學校ノ卒業證書ヲ所持シ官立公立小學校ノ教職

ニ在ル者ハ六週間陸軍現役ニ服セシム其服役ニ關スル費用ハ官給トス(二十二法律第二十九號ヲ

法律第四號ヲ以テ滿二十
六歳ヲ滿二十八歳ト改ム)

前項ノ現役ヲ終リタル者ハ直チニ國民兵役ニ服セシム(二十二法律第二

第三項又ハ第四項ニ依リ服役中ノ者ニシテ滿二十八歳迄ニ其教職ヲ罷ムル者ハ抽籤ノ法ニ依ラスシ

テ更ニ二箇年間陸軍現役及常例ノ豫備役後備役ニ服セシム但第一項ニ依リ一年志願兵ヲ志願スル者

ハ此限リニ在ラス(二十二法律第二十九號ヲ以テ本項ヲ追加シ二十六

第十四條 禁錮ノ刑ニ處セラレ若クハ賭博犯ニ由リ懲罰ニ處セラレタル者ハ一年志願兵タルコトヲ許

サス

第十五條 現役中殊ニ勤務ニ熱シ品行方正ナル者ハ歸休ヲ命スルコトアルヘシ

第十六條 豫備兵後備兵ハ戰時若クハ事變ニ際シ之ヲ召集ス平時ニ在テハ毎年一度六十日以内勤務演

習ノ爲メ之ヲ召集シ又毎年一度簡閱點呼ヲ爲ス(廿八法律第十五號ヲ以

第十七條 第一補充兵及海軍補充兵ハ現役兵ノ補缺ニ充テ又戰時若クハ事變ニ際シ之ヲ召集ス但第一

補充兵ヲ以テ現役兵ノ補缺ニ充ツルハ其服役ノ初年ニ限ル

第十五編 徵兵令

第十五編 徵兵令

四

第一補充兵ハ平常ニ在テ百五十日以内教育ノ爲メ之ヲ召集ス其他勤務演習及簡閱點呼ヲ爲スコト豫
備兵ト同シ(二十八年法律第十五號ヲ以テ次項トモ追加シ第十五條ヲ刪除シ第
十六條ヲ第十八條ニ改メ第十九條以下第二十四條マテ順次繰下ク)
第二補充兵ハ戰時若クハ事變ニ際シ第一補充兵ヲ召集シ仍ホ兵員ヲ要スルトキ之ヲ召集ス
第十八條 國民兵ハ戰時若クハ事變ニ際シ後備兵ヲ召集シ仍ホ兵員ヲ要スルトキニ限り之ヲ召集ス

第三章 免役延期及猶豫

第十九條 兵役ヲ免スルハ廢疾又ハ不具等ニシテ徵兵検査規則ニ照シ兵役ニ堪ヘサル者ニ限ル
第二十條 左ニ掲ケル者ハ徵集ヲ延期ス次年ニ於テ仍ホ徵集ニ適セサル者ハ國民兵役ニ服セシム
第一 體格完全且強壯ナルモ身幹未ダ定尺ニ滿タサル者

第二 疾病中又ハ病後ニシテ勞役ニ堪ヘサル者

第二十一條 公權ノ剝奪若クハ停止ヲ附加ス可キ重罪ノ爲メ訊問若クハ拘留中ノ者ハ徵集ヲ延期ス
第二十二條 徵集ニ應スルトキハ其家族自活シ能ハサルノ確証アル者ハ本人ノ願ニ由リ徵集ヲ延期ス
其事故三箇年ヲ過クルモ仍ホ止マサル者ハ國民兵役ニ服セシム但分家又ハ絶家廢家再興ノ故ヲ以テ
本條ニ當ル者其他自活シ能ハサル事故ヲ作爲シタル者ハ其願ヲ許可セズ

第二十三條 第十三條第一項ニ掲ケル學校ニ在ク者ハ本人ノ願ニ依リ滿二十八歳迄徵集ヲ猶豫ス其
事故滿二十八歳迄ニ止ミ又ハ二十八歳ヲ過クルモ仍ホ止マサル者ハ抽籤ノ法ニ依ラスシテ之ヲ徵集
ス但第十三條第一項ニ依リ一年志願兵ヲ志願スル者及第十三條第三項ニ依リ服役スル者ハ此限ニ在
ラス(二十二年法律第二十九號ヲ以テ本項ヲ改正シ二十六年法律第四號ヲ以テ第三十六條ニ改メ)
外國ニアル者(朝鮮國ニ在ルハ本人ノ願ニ由リ徵集ヲ猶豫ス滿三十二歳迄ニ歸朝スル抽籤ノ法ニ依

ラスシテ之ヲ徵集シ三十二歳ヲ過クル者ハ國民兵役ニ服セシム但第十三條第一項ニ依リ一年志願兵
ヲ志願スル者ハ此限ニ在ラス(二十八年法律第十五號ヲ以テ本條中改正)
第二十四條 餘人ヲ以テ代フ可カラサル職務ヲ奉スル官吏及市町村長助役收入役ハ豫備兵後備兵ニ
在ルト第一補充兵ニ在ルトトテ間ハ勤務演習簡閱點呼ノ爲メ召集スルコトナシ(二十八年法律第十
五號ヲ以テ條中改
正)

法律ヲ以テ設立シタル議會ノ議員其開會中亦同シ

第四章 (二十八年法律第十五號ヲ以テ本
章總テ刪除シ以下逐章繰上ク)

第四章 雜則

第二十五條 毎年一月ヨリ十二月迄ニ滿二十歳ト爲ル者ハ其年ノ一月一日ヨリ同月三十一日迄ニ又第
二十三條第一項ニ當ル者ニシテ二十八歳迄ニ事故止ミ同條第二項ニ當ル者ニシテ三十二歳迄ニ歸朝

シタル者ハ十四日以内ニ書面ヲ以テ(戶主ニ非サル者 籍ノ市町村長ニ届出可シ但二十歳未滿ニ現
役ヲ終ヘタル者又ハ現役中ノ者ハ本條ノ届出ヲ爲スニ及ハス(十三條云々以下五十七字ヲ追加ス))

第二十六條 徵集ハ本籍所在ノ徵募區ニ於テスルモノトス(二十八法律第十五號
號ヲ以テ條中改正)

第二十七條 疾病又ハ犯罪等ノ爲メ期限ニ際シ入營シ難キ者ハ翌年之ヲ徵集ス

第二十八條 兵役ヲ免レンカ爲メ身體ヲ毀傷シ疾病ヲ作爲シ其他詐偽ノ所爲ヲ用ヒ又ハ逃亡若クハ潛
匿シタル者又ハ正當ノ事故ナク身體ノ検査ヲ受ケサル者ハ抽籤ノ法ニ依ラスシテ之ヲ徵集ス

第二十九條 服役年期ノ計算ハ現役豫備補充役及海軍後備役ニ在テハ各其役ニ就ク年ノ十二月一
日(第十三條第三項ニ依リ服役スル者ニ現役年期ノヨリ陸軍後備役ニ在テハ其役ニ就ク年ノ四月一日
計算ハ別ニ勅令ヲ以テ規定スル月日ヨリ起算ス)

第十五編 徵兵令

五